

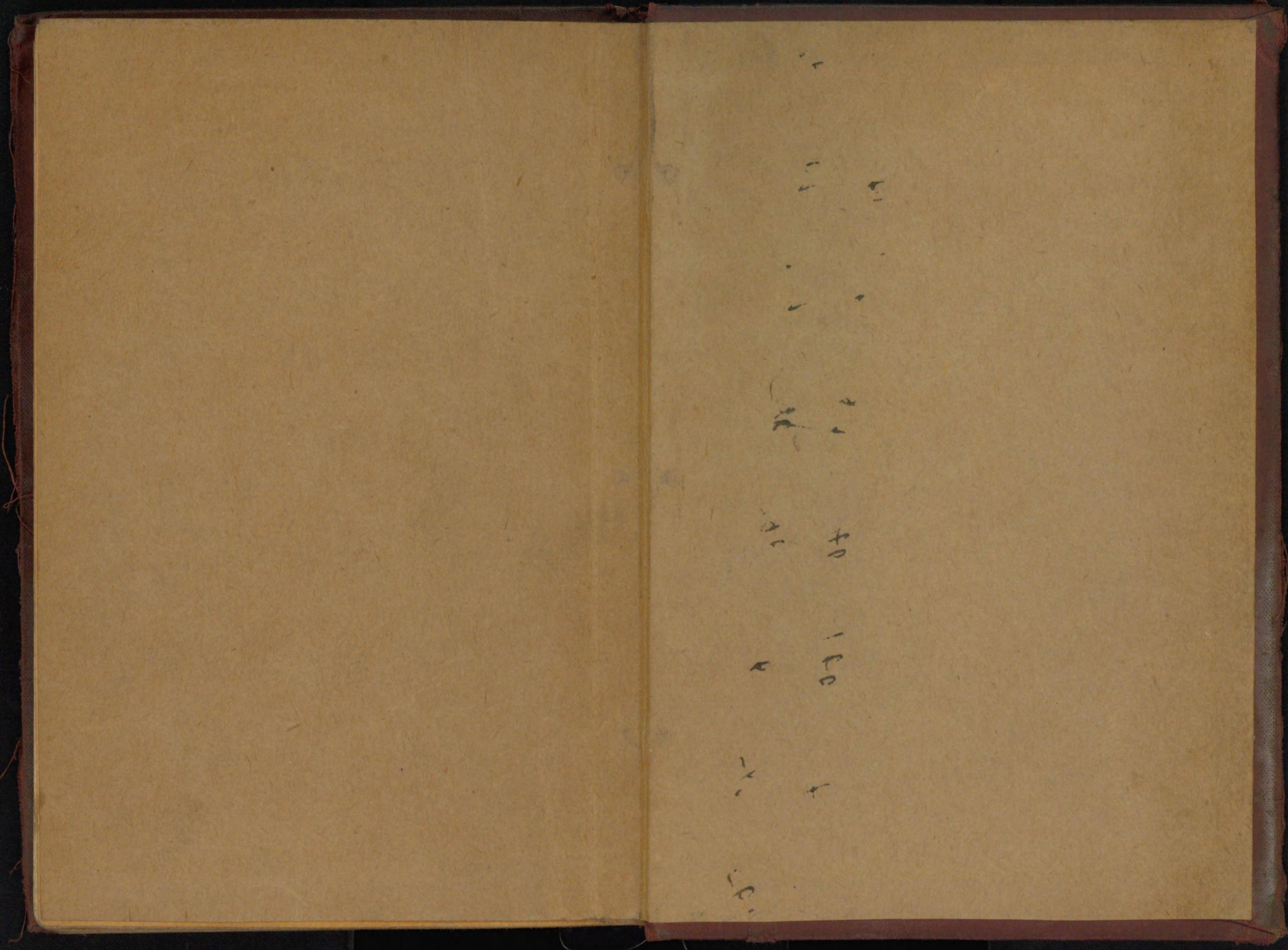
630
8

630-8



1200501540807

630
8



1
11
11
11
40
100
1
10



630
8

新 潮 文 庫

第 二 百 五 十 五 編

八 犬 傳 物 語

加 藤 武 雄 著

新 潮 社 出 版



622



八犬傳物語

加藤武雄著



新潮文庫

— 255 —

新潮出版社



630
8

序

南總里見八犬傳は世界第一の大作である。西歐小説中の最大長篇と云はれるユーゴーの「ミゼラブル」も、トルストイの「戦争と平和」も、量に於いては八犬傳に比較すべくもない。烏國日本にこの大著あるは、世界古今の文學に向つて萬丈の氣を吐いたものと言ふべきである。著者曲亭馬琴は、眞に偉大の存在である。

八犬傳は文化十一年の春、筆を起して、天保十二年の秋に脱稿した。その間實に二十八年、九輯五十三卷百八十一回にわたり、四百字詰の原稿紙で五千枚以上六千枚にも近からうと思ふ。殆んど一生の心血をこの一作に傾けつくしたと言つても可いのである。彼は執筆中眼を病んでからは、残れる三分の一を隻眼で書き出し、結末に近く全く盲目となつては、口授してやうやく稿をついだのである。馬琴は卷末にその苦心の狀を記してゐるが、隻眼の明かな間は、初めの如く十一行に細字で書いたが、それさへ段々おぼろとなり、遂には五行に大字で手探りに書くに至つた。

第九輯百七十七回、扇谷管領定正、洲崎の水戦に敗れ、纔かに身を以て脱する條の如き、字體しどろもどろで讀みがたく、遂に筆を投じて、



ながららふる甲斐こそなければ見えたりし書ふみまき卷川
になほ渡る世は

と詠じて長嘆してゐる。

その後は亡兒琴嶺が妻木村氏に口授して筆記せしめたが、筆記者文字を知らないので、この偏へんはかう書き、あの旁つくりはあゝ書くなどゝ一々文字の書きやうを教へなければならぬので、言ひ表はしがたい苦心だった。本書の卷末に添へた述懐の歌に、

あはれとは見る人おもへ八重すだれかかゝるやみ

目にあみはたす書ふみ

とある。その苦作の状以て想見すべきである。

本書の八犬士出生の因縁と水滸傳の百八豪傑出生の由來とその趣を同じうするところから、本書を水滸傳の換骨脱胎となし、又犬士の一人犬飼現八を張飛に擬した一節が三國志に類すると云つて、直に三國志の模倣といふが如きは、單に形式にのみとらへられた論議で、馬琴の眞意の那邊に存するかを知らぬ者の言である。

2
馬琴は理想を描ける作者である。そして八犬傳は武士道の理想を描いたものである。日本武士を描いて、八犬傳の如く委曲を盡したものはない。八犬士を初め書中に現はれた人物は、皆日本武士の好典型である。武士道が盛んであれば、日本は盛んであり、武士道が衰へれば、日本は衰へるのである。

3
我が國民道徳の本質たる武士道の理想を根幹として椽大の筆を揮つた馬琴の八犬傳は千載不磨の雄篇である。大町桂月が嘗て本書を以て國民道徳の經典と稱し、頼山陽の日本外史と共に、日本の國土に生れ文字を解する程のものゝ必讀すべき書であることを、聲を大にして説いたのは、まことに、首肯すべき言だ。

私は八犬傳を以て、武士道の理想を描いたものだと言つた。そして、時代の理想たる仁義禮智忠信孝悌の諸徳を具體化したものを描いて、武士道の理想のやうやく地に落ちむとする當時を警醒したところに、一篇の大精神の存することを深く思はなければならぬ。而して、一知半解の徒、八犬士を以て、仁義禮智忠信孝悌の傀儡の如く思惟するは、馬琴の意圖のいづくに存するかを知らざるものである。

八犬傳は量に於いてばかりでなく、質に於いても世界古今の傑作を凌駕するものであるが、而もその全部を讀破するは、容易のことでない。即ち讀者の多くは、信乃と濱路の戀、芳流閣上の奮闘、房八の悲劇、荒芽山の活劇等、その一部を讀んで辛うじてその風神を得ようとするに過ぎない。八犬傳の大精神に至つては、この部分的の叙述によつて到底詳かにすることを得ない。その結構、脈絡を仔細に點檢して、はじめてこれをよくするのである。

こゝに於いてか、この大作の梗概を一の物語風に簡約して叙述したものを要するのである。私はこれを思ひ立つて、原作の十分の一たる五百五十枚に書き縮め、全篇の筋を没せず、複雑を極めた結構をそのままに傳へ、原作の字句の妙味をも残さうとした。この至難のわざを敢てして、その所期を出來るだけ達しようとした努力は、いくらかこれを認めていたゞくことが出來ようと思ふ。

なほ八犬傳の叙述は、冗漫に過ぎて倦怠を感じしむるところが少なくない。その後半に於いて、特にその然るを見る。八犬傳の讀者、ともすれば、前半を讀むにとゞめて、後半を閉却するが如き傾向あるは、故なきことではない。この點に於いても、繁を去り冗を省き、しかも全篇の一貫した大精神を失はぬ本物語の刊行は、眞に意義あることを信ずるのである。

昭和十二年七月

著者

目次

一、八犬士出生の因縁……………二一

(一) 里見義實と金碗孝吉……………二一

(二) 玉梓が怨念……………二六

(三) 豪犬八房……………二二

(四) 伏姫富山に入る……………二五

(五) 八顆の靈玉飛散す……………二八

二、信乃と濱路……………三〇

(一) 信乃の生立ち……………三〇

(二) 村雨の寶刀……………三五

(三) 信乃と額藏……………四〇

- (四) 濱路の戀……………四三
- (五) 藝六が奸計……………四七
- (六) 信乃、濱路と別る……………五〇
- (七) 濱路、節に死す……………五六
- (八) 二勇士、芳流閣上に闘ふ……………六一

三、四犬士の集合離散……………六五

- (一) 利根河畔の一犬士……………六五
- (二) 小文吾と房八……………七〇
- (三) 房八、義に死す……………七五
- (四) 大八蘇生す……………八一
- (五) 三犬士、一犬士を援く……………八七
- (六) 道節、單身定正を覘ふ……………九三
- (七) 荒芽山の厄難……………一〇一

四、小文吾と毛野……………一〇

- (一) 小文吾、猪を搏にす……………一〇
- (二) 小文吾、石濱に抑留せらる……………一四
- (三) 女田樂且開野……………一〇
- (四) 對牛樓に毛野鬻を鑿にす……………一五

五、現八と大角……………一三〇

- (一) 赤城山の冤鬼……………一三〇
- (二) 節婦雛衣……………一三七
- (三) 現八、赤岩に勇を揮ふ……………一四二
- (四) 靈玉、妖獸を斃す……………一四七

六、流浪の信乃……………一五四

- (一) 死んだ濱路と生ける濱路……………一五四

(三) 偽の堯元と眞の堯元……………一六一

七、越路・信濃路……………一六九

(一) 小文吾、猛牛と闘ふ……………一六九

(二) 莊助と船蟲と……………一七五

(三) 小文吾・莊助の奇禍……………一八〇

(四) 毛野、二犬士と逢ふ……………一八三

八、鈴森の復讐戦……………一八七

(一) 囚はれた二犬士……………一八七

(二) 猫穴の怪……………一九三

(三) 放下屋物四郎……………一九七

(四) 船蟲の最期……………二〇一

(五) 毛野、縁連を討つ……………二〇六

九、犬江親兵衛の活躍……………二二三

(一) 梟雄墓田素藤……………二二三

(二) 八百比丘尼妙椿……………二二八

(三) 親兵衛、義實を救ふ……………二三三

(四) 素藤捕へらる……………二三六

(五) 親兵衛斥けらる……………二三九

(六) 妙椿連りに妖術を施す……………二二三

(七) 政木狐と河鯉孝嗣……………二三九

(八) 親兵衛、素藤を誅す……………二四五

十、八犬士揃ふ……………二五一

(一) 結城の大法筵……………二五一

(二) 親兵衛、京師に使う……………二六〇

(三) 親兵衛、虎妖を退治す……………二六四

十一、大聯合軍、安房に迫る.....二七〇

(一) 毛野八百八人の智計.....二七〇

(二) 兩管領の軍配.....二七四

(三) 行徳口の快捷.....二七六

(四) 國府臺口の大捷.....二八三

(五) 定正の水軍全滅す.....二九一

(六) 里見氏光榮の和議.....二九五

(七) 信乃、村雨の寶刀を獻す.....三〇〇

大團圓.....三〇四

(一) 八犬士、八姫を配さる.....三〇四

(二) 八犬士は羽化登仙したか.....三〇五

一、八犬士出生の因縁

(一) 里見義實と金碗孝吉



永享十年、鎌倉四代の管領足利持氏と京都の足利六代將軍義教との間に不和を生じ、戦を交ふるに及んだが、將軍方優勢で、持氏は敗れてその亡ぼすところとなつた。持氏の臣結城氏朝は、その忘れ形見の春王・安王を奉じて、兵を下總に擧げた。里見季基をはじめとして持氏恩顧の武士馳せ集まつて力を併せたので、結城の城は怒濤の如く押寄せらる大敵を前に廻して、いさゝかの動搖も見せなかつた。同十一年の春から嘉吉元年の四月まで三年の籠城に、糧食竭きはて、城遂に陥り、春王・安王は捕へられ、氏朝・季基等、戦を枕に戦死した。

こゝに里見治部大夫義實は、清和天皇の御裔、源氏の嫡流、鎮守府將軍源義家十世の孫里見治部少輔源季基の嫡男で、房總に據つて關東に雄視した。義實この時十九歳であつたが、文武の道にすぐれ、智仁勇を兼ね、名將の器を具へてゐた。共に死なうと逸るのを、父季基押しとよめて、「父子もろとも、こゝで屍を曝したら、里見の家は斷絶してしまふだらう。南朝の忠臣新田の御内に重きをなした我が里見氏は東國の名族である、一先づこゝを落ちのび、時機を待つて家を興すべきである」と言つて、

譜代の老臣杉倉木曾介氏元・堀内藏人貞行等を附添はせ、亂軍にまぎれて落ちゆかした。父の嚴命如何ともしがたく、義實は追手の勢を斬り拂ひ、辛くも虎口を脱して、相模路をさした。かくて三浦郡の矢取の入江に着いたころは、夏霞が夕ぐれをこめて、鷗の夢も穩かに見えた。ほのかな安房の山々を望んで、彼方こそ我等の志すところと、急ぎ渡らうとしたが、一艘の舟もないので、貞行はそれを求めるために出向いた。義實主従はその歸りを今か／＼と待つてゐると、俄かに黒雲むらがり立ち、海面かき曇り、波は烈風にさかまき、雨は篠突くばかりである。雷鳴電光すさまじい中を、義實、とある松の蔭に笠をかざして立つてゐたが、たま／＼沖の方に一團の雲舞ひさがり、中にまばゆき物見えだが、忽ち白龍現はれ、波を捲き立て、南の方へ飛び去つた。

「何といふ不思議のことだらう、これ我が家の興る吉兆にちがひない」と義實勇み立つて喜んでゐると、三崎の方から飛ぶやうに來る船がある。貞行が求めえて歸り來つたのである。この時、雨後の空さやかに晴れて、月もよく風もよく、清光水に映る中を舟は快く駛つて、主従恙なく安房に着いた。

この時安房には、瀧田の城主神餘長狭介光弘、館山の城主安西三郎大夫景連、平館の城主麻呂小五郎兵衛信時、鼎の足の如き勢をなしたが、中でも神餘が最も盛んで、その宗族東條氏の所領を併せて、安房の半を制し、遂に安西、麻呂を壓して、推されて國主となるに至つた。然るに長狭介光弘、心驕りて酒色に溺れ、淫婦玉梓、佞人山下柵左衛門定包の兩人を寵し、兩人が情を通じて國を奪はうと計つてゐるとも知らなかつた。こゝに瀧田の城下近く、柚木朴平とて、百姓ながら武を磨き、氣概を以

て世に立つ一丈夫があつた。同氣相求むる洲崎無垢三と云へる者を語らひ、定包が遊山に出て行つたのを窺ひ、討取つて國の害を除かうと企てたが、定包の奸計にうらを搔かれて、定包に射た矢が、圖らず光弘を撃ち落すに至つた。無垢三はその場を去らず討取られ、朴平は搦め取られて獄中に死し、定包今は思ふが儘に、光弘の後を襲ぎて自ら安房の覇權を執つた。安西・麻呂の兩將心中甚だ平かならず、血氣の麻呂信時先づたまりかねて、一日、安西景連を館山に訪ひ、力を協せて、定包を討たうとはかつたが、景連年老いて、徒に謀を弄び、ことを斷ずる明なく、兩將意見を異にして、一座白けた時、近侍の者入り來つて、『里見又太郎義實と名乗れる武士、年十八九ぐらゐであるが、お目にかかりたいと言つて控へ居ります』と申す。

信時、『追ひ拂へ』と勧めたが、景連、『その若者は結城三年の籠城に戰の道を心得てをる筈、定包征伐に用ゐて一方の將たらしめることが出來よう、先づ一見して人物を試みてみたい』と言つて、帷幕の内に力士をかくしおき、槍薙刀の穂先をほめかして義實を入れた。義實すこしも驚かず、『治に居て亂を忘れぬ、感じ入つた心掛けだ』と平氣で呟きながら、兩將の前に罷り出た。兩將が、種々問ひ試みてみるのに、智謀窮るところを知らないもので、『これは怖るべき英雄だ、いつそ殺してしまふ方がいゝ』と考へた景連は、定包征伐の出陣の首途に、軍神を祭る神の供へ物にとて、鯉を獲來るよう義實に求めた。これは、安房の一國に鯉といふものがないので、釣り得ぬを罪にして首を刎ねようとする魂膽であつた。『何といふ無禮な要求であらう。わが君は三軍に將たるべき人である、賤しい漁

夫の業を學びたまふことがあらうや、君辱めらるゝ時は臣死すといふ。唯我等が首をもて神の供へ物となして下さるるやうに。」と、貞行・氏元、ひとしく激して云ふのを、義實打ちなだめて、だまつて竿を提げて出た。兩人と共に、この池、あの川と尋ね歩いたが、一匹の鯉をも獲ることが出来ないで、約束の日限は空しく過ぎた。かゝるところに、河下の方から聲高く唄ひながら來る者がある。その唄を聞くと、

里見えてく、白帆走らせ風もよし、安房の水門による船は、浪に碎けず、潮にも朽ちず、人もこそ引け、われも引かなむ。

何者だらうと見ると、亂れた髮芒の如く、海松のやうなる裳を垂れ、手と云ひ顔と云ひ、皮膚一めんにくづれたゞれて、裂けた柘榴の如く、流れる膿血は、何とも言へない悪臭である。三人を見て、『此處にゐない鯉を捜すなんて、どうしたことだ』と呟くさまのわけありさうなのに、義實、『お前は何者だ』と問ふ。その乞食は、三人をある山蔭にいざなひ、義實の前にひれ伏して、『はじめてのお目見えを、定めていぶかしいと思召されるでせうが、私は神餘長狭介光弘が家來の金碗八郎孝吉がおちぶれた姿です。屢々君を諫めて聽かれないので、國を去つて、放浪の旅を重ねて歸つて見ますと、君は討たれて逆臣定包の世となつてゐました。そこで晋の豫讓を學び、身に漆を塗つて姿を窺し、ひそかに定包を窺ふものですが、噂に聞くと、里見の公達義實の君、結城を落ちて、こゝなる麻呂・安西をたのませられるとき、どうにかして一度はお目見えいたしたいと、こゝらあたりをさまようて居たのでございます』と申し、さて、鯉を獲來れといつたのは、安西等の奸計であることを説き、進んで策を獻するやう、『今や安房半國の民は、皆逆賊定包の肉を啖はうと思つてゐます。わが君が若し義に依つて旗擧げをなされたら、四方から響のやうに應じ、一討で安西・麻呂を倒すことは磐石で卵を壓すよりも容易なことと思ひます』と。義實遂に竿を投げてその議に従ひ、孝吉を參謀として兵を擧ぐるに至つた。義實、孝吉の身體の潰え壞れたのは漆の毒なるを知り、蟹の汁を塗つてこれを癒すやうにと教へたので、孝吉は早速試みたところ、天、この義烈の人を嘉みされたのか、見る／＼癒えて、英姿颯爽たる一丈夫となつた。孝吉、大に喜び、打連れて、小湊の地に赴いた。

小湊は日蓮上人誕生の聖地で、その人々は皆熱心な法華の信者である。孝吉、その夜誕生寺のほとりなる竹叢に火を放つと、火炎たちまち夜の空を染めて、梢の寢鳥は騒ぎ、僧侶らはあわてふためいて、連りに鐘を撞いた。里人驚いて、『火事はお寺だぞ、起きないか』と罵りつゝ、我先にと遠近より馳せ集るもの百人餘りにも及んだ。孝吉、進み出で、押鎮め、義實を戴いて定包を討つことを説く、定包の苛政に苦める土民らは、勇み立つ法華信者の事として、忽ちこれに同じて、我も／＼とその手に加はつた。手近の東條の城には、定包が片腕とも頼む萎毛酷六郎元頼が籠つてゐる。まづ彼處を乗取らうと縛めきさわぐ。孝吉謀りて、自ら縛めを受け、村民共に引立てられて、城に到り、村民共をして『昨夜竹藪に火を放ち、村々を騒がした痴者を引捕へてまゐつた、これは、舊領主に仕へる金碗八郎孝吉と申し、故主の讐を復せむと姿を窺して、あの邊を徘徊する者、御成敗あつて然るべき

でせう』と云はしめた。元頼、城門を開いて入らしめたので、孝吉、つと繩を振りほどき、番兵の刀を奪つて、はたとその頭を斬り落した。これを合圖にうしろに續いた軍勢、どつとおめいて驀地に亂入したので、東條の城は難なく乗り取ることが出来た。命からかくに落延びる城將元頼を孝吉間道より追ひ行き討取つた。『幸先がよい、この勢で進んで逆賊の巢窟をくつがへせ』と、兵を分つて氏元を東條の城に残し、その餘は夜中走つて、明け方に瀧田に到り、神餘の城を圍んだ。

(二) 玉梓が怨念

神餘の城中では、定包不義の快樂に耽り、酒色をほしきまゝにし、妖婦玉梓が膝を枕に夜どほしうつゝをぬかしてゐたが、大軍俄かに押寄せたと聞いて大騒ぎになり、岩熊鈍平、鏑塚幾内などと云へる老黨に防ぎ戦はせたが、皆散々にやぶられて引揚ぐ。しかし神餘は聞えた堅城であり、揉み合ふ事七八日に及ぶも、城中さまで弱つた色が見えぬので、寄手の兵糧早く盡きた。孝吉、貞行等丁度麥の收穫時なのを幸ひ、刈取つてこれに充てようと申出たが、義實、『我が軍は仁義の師である。生麥を掠めて農夫が糧を奪ふのはよろしくない』と言つて承知しない。そこで自ら一計を案じ、日々城内より餌をあさりに出づる鳩の群を網で捕へて、それ等の足毎に定包の罪惡を數へて城内の軍兵に歸服を勧める檄文數十通を結び附けて放ち遣つたので、鳩は城内に飛び歸り、彼方此方にその檄文を落した。勢ひやむを得ないで定包にしたがへる軍兵らは、これを讀んでいたく心動き、中にもたけり逸る若き

一群は、定包が腹心とたのみ岩熊鈍平・鏑塚幾内・妻立戸五郎三人のうち、鏑塚既に討たれたので、残れる岩熊、妻立の二人の首を取つて、然る後定包を討つて義實に降らむと密議してゐると聞き、鈍平胸安からず、戸五郎を語らつて、不意に定包を襲うた。

定包酒の酔醒めず、奥の間の柱に倚つた尺八を弄んで居た折、鈍平、戸五郎、數多の夥兵を従へてどか／＼と闖入するのを、『何事だ』と言はせもあへず、『積惡のむくい今思ひ知れ』と云ひつゝ、戸五郎刀を抜いて跳りかゝる。定包、尺八で發止と受けると、笛は斜めに切れ飛んだ。戸五郎のひるむところ、鈍平後から定包に組付き、引組んで上になり下になる。遂に定包を組敷いて首を搔かうとしたが、刀が無い。そこでかたはらに落ち散つた彼の尺八の切尖の尖つたので、ぐさと咽喉を貫いた。

逆臣はかく逆臣のために討たれた。戸五郎・鈍平の兩人は、定包が首を取り、玉梓に繩打つて降参し、龍田の城は遂に落ちた。兩人、義實の前に畏まつて、『定包は主を殺し、土地を奪へる逆賊であります。某等打つことが出来ず、假にその手についたのは、ひそかに時運をまつたわけ。今やうやく宿志を遂げ、お目見えの引出物に、彼の首級をもつて参りました』と申し陳べるのを、孝吉は『白々しい無道を飾る巧言、その罪愈々ゆるしがたい』とて、義實に乞うてこれを斬つた。さて玉梓は死にも得ず、着飾つた小袖に荒繩をうたれ、おめ／＼と孝吉の前に引き出された。孝吉その罪を數へて罵るに、返す言葉も無くなつたが、『私の罪はまことに深うはございますが、仁君と承る里見の殿には物の數にもあらぬ婦女子の命をとらうとはよもなされませう。いかに八郎の君、舊い誼で、命乞ひして下さ

「いまし」と、につこり笑つて見上げた妖婦のところがすやうな一瞥に、上座にあつた義實は心動いて、「非を悔いて助命を乞ふのだ、赦してやつたらどうだ」と孝吉に告げられたが、孝吉なか／＼承知せず、「仰せではございますが、定包につぐ逆賊はこれなる玉梓でございます。先君光弘が非業の死も玉梓の計るところ、十悪の大罪、何としてもお許しなさるべき筋ではござりませぬ。どんな苛刑でもこの毒婦をこらすには足りませんまい」と申したので、義實は尤ものことゝ、「さうあらう、とく引き出して首を刎ねるがよい」と云ふ。玉梓聞くと、芙蓉の如きまなじり血をそゞぎ、齒をくひしぼつて、きつと義實主従をにらまへ、「怨めしい金碗八郎、赦さうと云ふ主命をなんで拒むのか。義實公も、云ひ甲斐ない。赦すと思はれたら、なぜ赦さないのであらう。さあ、殺すなら殺してみよ。この怨み、永く世にとゞまり、汝等が兒や孫まで畜生道に導くからさう思ふがよい」と、憤怒の形相すさまじく、狂氣の如くわめき叫び、刑場にひき出されて首の地に落つるまで、罵りつゞけてやまなかつた。この毒婦が一念、後日にどんな結果をもたらすであらう。

たま／＼東條なる杉倉氏元より、あまき 蛭崎十郎輝武ひらたてを使者として、安西景連が内通により麻呂信時を討取つたといふ注進があつた。ついで、信時の居城平館は景連の手に奪はれたとの報があつた。氏元、残念でたまらず、「急いで御加勢を願ひます。一打ちで館山を抜き、景進が白髪首引き抽いてまゐらう」と申來つたが、創業の義實、敵を作るを好まず。これをおしとめて、先づ新領の民を撫し、倉を開いて賑はし、専ら内治に力を盡した。らうくわつ 老猾の景連、殊更に禮を厚うして、義實に交を求め、「この程の冷遇は、信時に強ひられて、やむを得なかつたのであります」など、どこをおしてそんな圖々しい詫言わびごとが出来たものと癪にさはつたが、先づそのまゝにしておいた。これより、安西は麻呂の舊領を併せて、安房・朝夷二郡に據り、義實は神餘の舊領長狭・平群二郡を得てこれに對し、三家鼎立の安房の形勢は一變して、兩家對立の有様をなすに至り、暫くは無事であつた。

その年七月、義實創業の諸臣に對し、論功行賞の事があり、云ふまでもなく金碗九郎孝吉、第一の勳功者であるので、義實すなはち長狭半郡を與へて東郡の城主となさうとしたが、孝吉辭して、「某は唯故主の爲に讐を復さむばかりで、今まで生きながらへてゐたもの。今更賞を受け、祿を食ふなどは、本意でございませぬ」と云ふ。義實、「さう申すのは尤もであるが、むかし、張良は漢によつて故國の讐を報い、後、漢に仕へて封侯であつた。我れ高祖ではないが、御身の功は張良に下らない。功ある人を賞さない道理はない、枉げてわが意に従ひくれよ」と再三強ひられて孝吉は、辭むことも、受けることもならず、短刀きらりと抜き放ち、あなやと云ふ間もあらせず、賜はつた感狀を束に巻き添へ、ぐさと腹に突立つた。さて、おどろく義實主従をおししづめつゝ、苦しき息に申すやう、「とても死なねばならぬこの身、かの落葉ヶ岡で、定包と誤つて、光弘公をそこなうた朴平・無垢三等は、もと某が家僕にして、我が劍法を傳へたもの、主君の横死も、所詮は我のなしたこと。かた／＼罪は免れぬところ」と、義に活き義に死する烈士の心の中を思ふと義實等たゞ嗟嘆の外なかつたが、義實、この時ふと膝を打ち、氏元に命じて、「かの翁を」と、こちらへ招き來させた。六十餘りの旅やつれした

百姓、右手に菅笠、左手に五歳ばかりの童兒の手を引いたのが、孝吉を一眼見ると前後左右を打わすれ、『八郎どの、上總からまゐりました』と思はず聲の筒抜けて、とりすがりたさうにするのである。これは、孝吉が放浪の旅の間にふとちぎつて出来た、そのわすれ形見の一子をつれて、娘の父の尋ね来たのである。金碗どのの屋敷はどこと尋ねまどうてゐるのを、ふと認めた氏元が、折柄こゝにつれて来て、はしなくも臨終の際に名乗り合つたのも、つきない親子の縁であらう。『母の濃萩は産後間もなくみまかり、爺と婆とがこの年月の丹誠にやうやく育てましたが、婆ははや世を去つて田に鳴子引くのも覺束ない七十の老の身が、弓のやうな腰を氣張つて、どうにかしてあなたに會ひ、この子をお見せし、お目にもかゝらうと、風聞を辿つて、こゝまで参りました』と、涙を拭ひもえない爺が縁言を、手傷の孝吉、篤ときいてうなづきながら、無量のおもひを眼にこめて、わが子が顔をうちまもつた。義實、その子に金碗大輔孝徳の名を賜ひ、『成長の曉には、必ず長狭半郡を割き與へて、東條の城主となさう』と、孝吉が死出の土産に告げきかせたので、孝吉莞爾として、義實が介錯の下に、先君の跡を追うて逝つた。然るに、こゝに不思議ともいふべき一事は、孝吉死する時、七月七日の月西に入り、陰々と心火ひらめき、女子の像かげの如く大輔の身にそうて、やがてかき消す如くきえたのである。これを見たのはたゞ義實のみであつたが、玉梓が最期の一念、やうやく祟りをなすものと思はれる。

(三) 豪 犬 八 房

それから數年を経た。義實安房半國を領して治績益々あがり、隣國上總椎津の城主萬里谷入道靜蓮が息女五十子を娶り、嘉吉二年夏の末に一女を儲け、同三年の末には一男を擧げたが、女子は三伏の時節なので伏姫と名づけ、男子は二郎太郎と呼んで繼嗣に定めた。後に安房守義成と云へる二代目の名君となつた。

伏姫生れつき美しく氣高く、肌は玉のやうに透つて、かの竹の中から生れた竹取の少女もかうよとばかり、三十二相缺けたところも無かつたが、どうしたのか、日夜むづがつて、はや三歳となつたが、物も云はず、笑ひもせず、たゞ啼くのみだつた。義實も夫人もこれには大方ならず心を痛めたが、こゝに安房郡洲崎明神のほとりの石窟は役行者の舊跡で、中に行者の石像があつて、靈驗今もいちじるしいと聞いたので、五十子前は月々代參を立て、姫の上に祈願をこめられたが、此度は姫を轎子に乗せ、乳母女房その他を付きそはせ、彼地は安西が領地なので微行で參詣された。七月の願を籠めて歸館せむとする途中、八十ばかりの白髪の新さびた老翁が居つて、『里見の姫君ではおはさぬか』と呼び止む様の故ありさうなので、就いて問うたところ、老翁占つて云ふには、『これは靈の祟である。このお子の不幸である。禳ふのにむづかしい事はないが、禍福は糾へる繩のやうで、たとへば一人の子を失うて後にあまたの翼を得ば、その禍は禍ならず、妖は徳に克たず、惡靈いかに祟りをなすとも里見家

はますく榮えるのである』とて、懐から取り出した水晶の珠數を伏姫が肩にかけて、『これを護身にせられよ。後に思ひあはす事があらう』と云ひすて、洲崎の方へ去ると見たが、走るが如く飛ぶが如く、忽ち影は見えなくなつた。人々しばらくは呆氣にとられたが、『有がたいこと、これまさしく役の行者が示現である』とて、その珠數をよく見ると、八つの珠の一つづゝに、仁義禮智忠信孝悌の文字一つづゝ、各々自然に現はれた。これ實に八犬士出生の第一因縁である。

さて、この事があつてから伏姫は今までの反對に、かしこく大人しくたのしげに遊びたはむれるやうになり、次第に成長するに隨ひ、美しさはまし、恰も匂ひこぼるゝ初花に、いざよふ月を掛けたやうであつた。その心は云ふまでもなく、學びの道、その他、すべて世の少女に立ち優り、天女が假に下界に降つたやうにも思はるゝのであつた。その十六歳の秋の頃である、安房の一半なる義實の領分は稍よく實つたが、他の一半の安西の領分は凶作に苦しんだので、景連使して米を借りたいと申込み、同時に景連七十をすぎて子が無いので、あなたの息女を養うて一族の中から佳い婿を選び、所領を譲らうと言つて來た。義實養女のこととは斷つたが、『民の饑渴を救ふといふことは、自領他領の隔てがあるべきでない』とて、快く米穀を送つてやつた。然るにその翌くる年は、義實の領分凶作に苦しむ、景連の方豊饒だつたので、かの金碗八郎孝吉の遺子大輔孝徳、齡は早や二十を越えて、親にも劣らぬ器量骨柄であるが、進み出で、策を獻じ、自ら使者となつて、安西方に赴き、五千俵の米を請うたところ、老猾の景連、米を出さぬのみか、里見の疲弊に乗じてこれを亡ぼさうと、返答をしないで、大

輔を留め置き、その間に陣の用意をした。大輔それと悟つて、ひそかに逃れ出でたが、忽ち追手の大軍に圍まれ、生死のほども知れなくなつた。

かくて安西景連は、突然里見領に亂入し、自ら將として瀧田の本城をとり圍み、別將をして東條の城を圍ましめ、ひし／＼と攻め立てたのである。義實ならびない名將ではあるが、事不意で策をめぐらすに由ないとところに、民飢ゑ、兵疲れて、戦ふに堪へない、今は滅亡を待つ外なかつたが、こゝに一場の奇談がある。八房と呼ぶ里見家秘藏の飼犬があつたが、もとは長狹郡富山のほとりの片田舎に生れた一つ子の牡狗で、母犬が狼にかみ殺された後は、夜なく怪しい燐火の光と共に、富山の方より通ひ來る牝狸に乳を哺ませられて生長し、犬の一つ子は勇力敵するものなしと云はるゝやうに、たぐひ稀なる逸物なので、義實これを養ひ、白きに黒きを雜へて頭と尾の八所に斑毛があるので、八房と呼んで寵愛したが、この犬ことに伏姫に馴れて、常にその居間のほとりを去らなかつた。この時、百計盡きて思案にくれたる義實、ふと縁先に食を乞ふ八房を見やつて、『犬は恩愛を知るといふ。汝も年月養はれたる主家の危難を思つたら、寄手の陣へ忍び入つて、犬にも劣れる敵將景連を啖ひ殺せよ』などと戯れつぶやいたが、八房は主の顔をつくづく見上げて、心得たといふ様をした。義實、『もし汝がかの老奸が首を獲つて來らば、おもひのままの美食を與へよう』と云つたが、八房うしろ向きになつていなむやうな風をする。『そんならば官職を授け領地をやらうと思ふがどうだ』と云つても、なほ振り向かない。義實、『さらば我が婿になし、伏姫をめあはせようか』と言へば、八房はじめて尾を掉り

頭を擡げつゝまたゝきもせで主の顔を打ちまもり、わゝと吠えた。義實はゝゝみ、「汝を愛する伏姫を、汝も亦慕ふと見える。成しとげたら婿にしようぞ」と云ふと、八房は前足を折つて拜する如く、一聲啼いて走り去つた。

義實興さめて、よしない戯れをしたものと獨言いひつゝ奥に入つたが、運命今は極まつたので、その夜、夫人、姫君をはじめとし、氏元以下の郎黨を召し集へ、しめやかな夜宴に、水を酒に代へて酌み交はした。十日の月落ちて星の光寒く夜は更けた。いざ最後の一戦の用意と、義實父子甲冑をつけようとする時、戸外に犬の啼く聲がした。あれは正しく八房である、異なる聲だと人々燭をあげて縁に出で、見れば八房は生々しい首を縁端に載せ、踏石に前足かけてつくづくとその首を打成つた。「饑ゑた餘りに人の死骸を食つたのだな、とく追ひやるがよい」と、氏元が云ふをおしとゞめ、義實立出で、つくづくその首を見ると、鮮血に塗れてはつきりしないが、どうやら敵將安西景連の首のやうだ。洗つて見ると、正しくさうだ。あゝ犬に靈があつて、よく主命を奉じて敵將を殺したのである。

大將討たれて、安西勢見るゝ潰え、瀧田・東條の圍みはとけた。義實即ち進んで館山を抜き、安西氏をほろぼして、安房一國を所領するに至つた。此よし、鎌倉管領成氏朝臣より室町將軍へ上聞し、義實公を國守に拜し、治部少輔に補せらるゝの沙汰があつた。君臣一同の慶び此上もなかつたが、それにつけても心にかゝるのは、開國第一の功勞者金碗孝吉の遺子、大輔孝徳がことである。いよく東條の城主となし、伏姫をこれにめあはせむといふ義實の胸中であつたが、安西に糧を乞ふの使となつて赴いてから、今に至つて消息無いのは、奸智に長けた景連の欺いて殺すところとなつたか、逃れ出でむとして大勢に圍まれ討死したのか、但しは使命を全うしないのを恥ぢて身を隠したか、何れにしても打捨て置きがたいと、八方に人をはしらせ、草を分け土をふるつてさがしたが、行方は更に知れなかつた。而して更に義實が心を苦しめたのは、此度の役に殊功を立てた豪犬八房がその後の振舞である。

(四) 伏姫、富山に入る

この度の事八房の勳功第一とあつて、畜生ながら厚遇を極めた。朝夕の食物、起臥の手あて、到らぬところもなく盡くしたが、八房すこしも喜べる様なく、頭を伏せ、尾を低れて、食はず、睡らず、かの夜敵將の首を齎らした縁側のほとりにうづくまつて立去らない。たまゝ義實の立出づるを見れば、前足を掛け尾を掉つて求めるところがあるやうだ。義實は思ひ當ることがあつて、心安からず、斥けて見ようとしたが、八房たけり狂つて鎖を斷り人を噛みつゝ、躍り上つて奥の方に馳せ入つたが、折から清少納言が枕草紙を繙いてゐた伏姫が裳にとびかゝり、その前脚を長い袂につき入れそのまゝ臥して、おのれも動かず姫をも動かさず、人々の追はうとすれば、眼をいからし、牙を鳴らしてうなるさまのすさまじさに、殿中上を下への騒ぎである。義實すはなち手槍を提げて『退けよ』と促したが、八房きつと見上げて牙を張り、いよく哮つてすはや飛びかゝらむとするので、勃然と憤れる義

實、一突に突き殺さうとするのを、伏姫おし留めて申すやう、『畜類ながら不思議の功を立て、非分の賞を求めること、何事もみな、我身にかゝる業でございませう。たとひ、かりそめの御戯れといつても、かの一言を無にするには出来ませう』とて、八房に従はうといふのである。涙ながらに繰返す姫の言葉に道理があるので、義實瞑目して長く嗟嘆したが、『なるほどこれは免かれがたい宿因で、かの玉梓が悪靈の祟りであらう。八房は狸の育つるところと聞くが、狸を田面と呼ぶは、玉梓の訓にも通ふので今漸く知つた。力及ばないこと』といつてこれをゆるしたが、恩愛の情、忍ばうとしても忍びがたいものがあり、殊に母五十子前のなげきは、いたましいとも何とも云ひやうなく、『どうしてそんな間違つた事に觀念されるのか』と、姫が袂にとり縋つて恨み泣き搔口説くのを、悪業のとてもまぬかれがたいことを覺悟した伏姫は、言葉しづかに母君をなだめつゝ、八房と共に立出た。玉の簪とり捨て、白小袖を襲ね着て、かの役行者から授けられた珠數を襟にかけ、料紙一そろひ、法華經一部の外は身に添ふものもなく、もし八房が情慾を起して身に迫らば、一刀に刺殺して我も死なむと懐劍一振をふところに、八房のいでゝ行くうしろについて、徒歩の足もと覺束なく、とぼく／＼と城門を立出づる時、晩秋の夕ぐれ風は、黒髪のみだれを吹くのであつた。

義實も、五十子も『途中が心もとない、見え隠れに見てこよ』と、蟹崎十郎輝武に兵あまたさづけ、その後を跟けさせたが、瀧田の城をはなれると、八房は伏姫を背に乗せ、富山の方を目がけて飛鳥の如く馳せて行く。輝武、馬に鞭あてゝ辛うじてあとをつきとめ、夜から曉へかけて富山の奥深く分け入つた。この山は安房第一の深山で、大樹暗く枝を垂れて荆棘路を埋め、よぢのぼる峯又峯に雲霧たなびき迷うたが、雲の晴間に眺めやると、伏姫は八房が背に揺られながら、谷川を渡つてなほ奥深く分け入るのが見える。輝武等やうやくその谷川のほとりに來たが、水迅きこと矢のやうである。輝武、何事かあると踏み試みたが、苔むす岩に踏みすべり、頭を岩に碎かれて、流れに落ちて死んだ。同時に谷川のかなたは雲霧深く立ちこめて見渡す眼を遮つたのは、人の入るのを悪むのでもあらうと、義實堅く命じて、これより人の富山に入るのを禁じたから、姫の消息は深く雲霧にとざゝれて、知るもの絶えてなかつた。

かくて二年経つた。里見の夫人五十子は、姫が身を案ずるのあまり病を得て、明日をも知らぬ容態となり、義實も亦しきりに姫にあひたく思ふ折柄、ある夜靈夢に感じて伏姫を見るべき時期の到れるを悟り、一日早朝、堀貞行以下二十人ばかりの従者を引連れて富山にむかつた。

話變つて、安西に糧を乞ふ使者となつて、そのまゝ行方不明となつた金碗大輔孝徳は、かの時、安西の追手の大軍を斬り抜け、唯一騎馳せ歸つたが、瀧田・東條の兩城、既に敵の圍の中に落ちて、入ることかなはず、しかのみならず、兩城糧食乏しくて、守りがたい形勢なので、鎌倉に赴き管領家の援兵を求めたところ、これ亦里見の書翰無きゆゑに疑はれ、手を空しうして安房に歸ると、景連ははや亡びて一國里見の領となり、いまさらおめ／＼と主君の前にいでがたく、何か、申譯の功名一つとして、世を忍びつゝいろ／＼考へてゐたところ、たま／＼八房が事を聞いたので、一つ、彼を討ちとつ

て姫君をお援ひ申上げ、歸參の面目を立てたいものだ、富山の奥に分け入つたのは、丁度義實が富山を訪へる日と同じであつた。かくて一挺の鳥銃を提げ、ひとり山深く分け入つて、此處か彼處かとたづねつゝ山路に暮し山路に明して五六日を経たが、ふと、谷川の畔に出ると、靄深い向う岸に人氣がするので、とどろく胸を押し鎮め、水際にうづくまつて耳をそばだてると、女子の經讀む聲が、流れの音にまぎれてかすかにきこえるのである。

(五) 八顆の靈玉飛散す

八房につれだつて富山に入つた伏姫は、山ふかい洞窟を住居として、八房が採つてすゝむる木の實蕨の根に、饑を凌ぎつゝ、今日と暮し、明日と過すうちに、八重霞尾の上に罩めて深山櫻はら／＼と散るほどもなく、袂涼しい松の風、いつか落葉を誘ひ來て、時雨はやがて雲となり、再び春のめぐりくると、かの父かと思ひ母かと思ふ山鳥の啼く音悲しく、さすがに涙に暮るゝ事もあつたが、一念發起、只管後生のためと、手に經卷を措かず、口に讀誦を止めず、今は全くおもひを塵の中に絶つたので、玉の如き容貌更に神々しさを添へたが、ふとある日溪流に映つた我が姿の淺ましくも體は人で頭は正しく犬であるを見てから、胸のあたり苦しくして心地例ならず、やがて腹はり充ちて痛み堪へがたい。ふとめぐりあつた神童の示しによつて、これは交らなくても自然に犬の氣を受けて孕めるものと知り、伏姫悲しさ忌はしさやる方無く、自害して果てようと、書置を認めて後、この世の名残に法

華經五の卷提婆達多品を讀誦してあつたとき、溪流の彼方に銃音高く聞えて、飛び來る二つ玉は傍なる八房が喉を貫き、餘れる玉、姫が乳の下に當り、姫は伏し轉んだ。これはかの金碗大輔が放つたものである。大輔、姫を援はうとして、見事八房はうちとめたが、誤まつて姫をも傷けたのを見て、且つ驚き且つ悔いつゝ、その申譯に、腰刀引抜き腹につき立てようとした。その時早く、樹蔭から一寸ちの箭飛び來つて腕を射、刀を打落した。何者ぞと顧れば、これ里見義實である。

義實、大輔の死をとめて、事の仔細を尋ぬるほどに、伏姫またよみがへつて、思ひもかけぬ三人の對面、悲喜交々のおもひがしたのである。義實、伏姫に一先づ歸城して終焉近い母に一目あふようとすゝめたが、伏姫涙ながら、「うらはづかしい身の果、再びこの山を出まいと思ひ定めてをります」と言つて、肯んじない、且つとても生きるに堪へぬ身の父無くして宿れる怪しき胤を發かうとし、懐劍腹に突き立て、ぐさとはかりに搔切つたところ、不思議や瘡口から、白氣ひらめき出で、襟にかけたかの水晶の珠數をつゝんで、空虚はるかに昇るよと見ると、珠數はたちまちふつとちぎれて、煩惱の數になぞらへた百八の珠の中、百の小珠は地に落ち、宙にのこれる八つの大珠は、燦然として光を放ち、飛びめぐり入りみだれて、天の半にかゞやいた。主従思はず心をとられて、あれよ／＼と見るほどに、颯と落せる山風のまに／＼、八つの靈玉は、八方に散り失せて、山の端にかゝれる一痕の夕月、夢よりも淡い。

そもこの八つの珠には仁義禮智忠信孝悌の八字が記されてゐた。これ實に後年八犬士出現する前兆

で、毒婦玉梓が末期の怨念、八房の犬と現れて里見の家に祟りをなしたが、義實の君徳と伏姫の義烈とで、かの役行者の告げたやうに、禍を轉じて福となしたのである。

姫の自害を見ると、孝徳後れじと再び双をとりあげたのを、義實重ねておしとどめ、「いたづらに死ぬのを止めよ、出家となつて亡父の爲め、姫のために菩提を弔ふのが、汝が爲すべき務ではないか」と諭され、孝徳、君の仰せを畏み、即座に髻を切り落し、名を、大と改めて、圓頂黒衣の姿となり、飛び散つた仁義禮智信孝悌の大珠の行方を探つて、もとの珠数にながうと思ひ立ち、飄然として六十餘州の旅に上つた。さても、かの入つたの珠はどこに散つたであらう。

以上で八犬士出生の因縁に關する物語を了るのである。

二、信乃と濱路

(一) 信乃の生ひ立ち

話は結城落城の際にもどる。こゝに前管領持氏の近習で、春王・安王兩公達の傳であつた大塚匠作三成といふ武士があつた。兩公達と共に迎へられて、結城の城中にあつたが、城の落ちようとする時、かねて主君から預り置いた一刀を取出し、番作一成といふ十六歳の子に渡して云ふには、「これは主家

重代の御佩刀で、村雨と名づけたもの。抜き放てば双より露したより、人を斬れば滴ること益々多くして流るゝが如く、鮮血を洗うて双を染めない。たとへばかの村雨が木葉を洗ふやうなので、その名を得たのである。主従皆亡びてこれを敵に奪はれるのは残念だ。汝これを預つて一先づこゝを落ち延び、若君もし死を免れて再び世にお出になつたら、一番に馳せまゐつて寶刀をお返しし、又討たれ給うたと聞いたたら、これを主君の形見となして、御菩提を弔ひ申せ」とて、錦の囊に納めた寶刀を渡し

たので、一成、仰せをうけたまはつて先づ落ちた。かくて、結城の城陥り、將軍の命により、兩公達は捕はれて、京都に送られる途中、美濃路なる樽井の道場金蓮寺で首討たれた。この時、警固の雑卒の中から躍り出でたる男、「兩公達の御傳、大塚匠作こゝに在り」と呼ばはつて、太刀取つた武士の一人を拔手も見せず斬り倒し、己もまたその場を去らず討たれたが、立ち騒ぐ者共を押して、飛鳥の如く馳せ來つた一人がある。手早く兩公達の首と匠作とを取上げ、三つの頭髮を口を啣へて、腰刀抜くより早く、匠作が首討つた武士を乾竹割に切つて捨て、陣笠かなぐり捨て、大音に名乗るを聞くと、持氏朝臣恩顧の近臣大塚匠作三成が一子番作一生成年十六歳である。群りかゝる雑卒共を縦横無盡に斬りまくる太刀は村雨の名刀である。刀尖より逆る水氣、人を斬るごとにますます加はり、狭霧の如くあたりを降りかゝつて、焚き連ねた松明篝火これがためにうちけされ、折からの五月雨雲に、月さへ影をとぎされて、如法暗夜となつたので、兵士等同志討して傷を負ふもの數を知らない。番作これにたよりを得て、首尾よくその場を逃げさせた。

さて、ひたすらに東の方へと志し、足にまかして走つたが、翌くる日の黄昏に、岐蘇の御阪のこなたなる夜長嶽の麓に出たが、淺傷の痛みはそれほどでないが、飢やうやく身に迫つて今は一步も動きがた。辛うじてたづねよつたのは拈華庵といふ扁額を掲げた荒寺である。乃ちそこなる墓所の、三四日前に埋けたと覺しい新佛の傍に三つの首をうづめ、庵の戸をたゞいたところ、二八ばかりの美しい少女があつて、庵主は未で歸らない。強ひて食を請ひ得て、持佛堂に入つて睡つたが、夜半夢破れて女の泣く聲がする。何事だらうと覗ひ見ると、これが庵主であらう、癡猛な一人の僧の双をきらめかしてかの少女を挑むのである。番作すなはち、一刀の下にかの僧を斬つて捨て、少女の素性を問ふと、思ひがけ無くもおなじく兩公達の味方にまゐつて結城で討たれた井丹三直秀が女手束である。直秀は番作が父匠作と別懇の間柄でその子その娘なる二人の間には許嫁の約さへとりむすばれてゐたが、今ここで相逢ふこと、亡き親達の引きあはせであらう。手束は數日の前は母をこの寺に葬つて、今は便るべき方もない身なので、さらばとて二人打つれ立ち、信濃のしるべに身をよせて、大塚の大を犬と改め自ら大塚番作と名乗つて世をしのびつゝ、手傷養生に日を重ねた。傷は癒えたが、足の腫つまつて、歩くに自由でないので、こゝに空しく二年をすごした。

嘉吉も早や三年になつた頃、風聞にきくと、乳母に抱かれて信濃の山中に隠れ居た春王・安王の御弟の永壽王が、再び世に出づる機運に逢ひ、左兵衛督成氏と名乗つて、鎌倉の主に推し据ゑられ、結城で戦死した家臣の子孫を召出すとのことに、番作、大によるこび、武藏の國大塚の里は、父匠作が舊采地で、母と姉とが居られる、先づそこに行つて見ようと、蹙へた片足を杖にたよつて、妻とうちつれて東に向つた。

さて、大塚に辿り着いて見ると、母は身まかつてはや二年をすぎ、残れる姉の龜篠は、身の行ひ親にも同胞にも似ず、彌々山墓六といふ名うての破落戸とちゝくり合ひ、村中の爪弾きとなつてゐたが、鎌倉の命あるや、龜篠・墓六の兩人は、いち早くも、大塚匠作が娘及びその婿と名乗り出た。墓六が破落戸の噂は公儀にも聞えて武士にはとり立てられなかつたが、八町四反の莊園をあてがはれ、大塚の村長を命ぜられて、小人時を得た勢ひすさまじく、横道苛酷の振舞に村人の怨みをあつめながらも、傲然とそらうそぶいて居つた。番作、これを見て、苦々しく、嘆かほしい事に思つたが、徒に事を起すを好まず、官府に出で、争はず、墓六の地位權勢たちまち我に歸すべきではあるが、骨肉相争ふは彼の忌むところ、袂を拂つて去らうとは思つたが、不具で病身な匠作の舊情を思ふ村民も少くない。龜篠夫婦をにくむだけに番作夫婦をあはれむこと深く、はては村人一同話し合つて、墓六が家の前面の空家を住み心地悪くなくこしらへ、これに若干の田畑を添へて夫婦のものに與へたので、その情にほだされて、番作はこゝに永住の覺悟をなした。

かくて番作は村の子供等に讀み書く業を教へ、手束は女の童どもに裁縫の手ほどきして、村人一同になつぎしたのはれつゝ、佗びしい乍らも安らかな日を送つたが、龜篠夫婦は忌み憚る事一通りでない、番作またその非道を憎んで、向ひ合つてゐながら、互に往來せず、龜篠一家をにくめる村人はこれ見

よがしに、親しく番作のところへ出入するのを、龜篠等躍起となつて、悪さまに云ひのゝしるのも笑止である。これは嘉吉三年の事で、安房の里見家に伏姫の生れた翌る年であるが、それより十年餘りを経て、番作は夫婦の間に男子三人まで設けたが、何れも孩兒の中に死んで、一人も生ひ立つものがなかつたので、手束はわけてもこれを憂ふること甚だしく、程近い瀧の川の辨財天に日參すること、三年に及んだ。

ある日、手束は時を誤り、未明に參詣に赴き、明け残る月影をたよりに歸り來る途中、田の畔に脊は黒く腹は白い狗の兒の捨てられたのが、尾を掉りて手束が裾にまつはり、追へども去らず、ころ／＼と鞠の如く慕ひ寄るので、「何んて可愛いのだらう、拾ひ歸つて養はう」と、抱き上げようとする時、忽ち紫雲地に垂れ、上に美しい仙女が、黑白斑毛の老犬の背に腰かけ、左手に數顆の珠をもつたのが、右手に手束を招きつゝ、一つの玉を投げ與へた。手束夢見る心地に、手をさしのべて受けようとしたが、珠は掌を漏り、地に轉びて行方を知らない。いぶかしくて天を仰ぐと、紫雲あとなく掻き消えて手束は、夢かとはかり惑ひつゝ、その狗を抱き上げて家にかへり、この由番作に告げた。番作は打案して、「我が姓今は犬塚、名は一戌、いづれも犬にちなんでゐるのに、かの仙女も亦犬に乗つたといふのは、何様わけのある事であらう。あまつさへこの狗まで拾つたのは念願の叶ふしにちがひない」と、斜めならずよろこんだが、果して、手束これより身重になり、伏姫自殺の後二年、寛正元年の秋、戌戌の日に男子を生んだ。八犬士の一人なる犬塚信乃成孝と呼ばれたのは、實にこの子である。

(二) 村雨の寶刀

この度の子だけは、どんなにしても育て上げようと、番作夫婦は心を合せ、十五歳までは女子の様に育てたら恙なからうといふ俗説に従ひ、その名も女子のやうに信乃と名づけて、しのすゝき、穂長すすきの如く壽長くあれとのこゝろを籠めたのである。さて、髮容から着るものまで、全く女子に異ならず装はせたので、知らぬ者は皆女子とのみ思つたが、信乃は容貌こそ優しいが、筋骨逞しくして臂力があり、九歳の齡には、普通の子の十二歳よりも大柄で、あらゆる遊びごとを好み、父より受くる武藝の上達頗る早く、又驚くばかり穎悟で、學業のすゝみも目ざましかつた。加ふるに孝心非常に深く、よく父母に事へたが、その年の秋の頃から手束心地常と變り、鍼灸藥餌の驗無く日に／＼弱り行くのみであつたので、番作も信乃もいたく心を痛めたのである。信乃が藥とりに行つたあとで、手束は番作にいふやう、「私の此度の病はわけのあることと思ひます、これまで度々子を失つたのに信乃ばかりは事なく生ひ立つよう、我が身の壽命に換へてもと神佛に祈つたので、今、信乃が益々健かに丈延びてゆくを見るにつけ、我が定命の盡きること、覺えます。とても助からぬ身には、服薬も役に立たないと思ひます」と掻き口説くのを、折柄歸つて來て障子越に聞いた信乃は、何おもつたか、藥の箱を縁に置き、そのままどこへか走り去つた。信乃の歸りを待ち侘びた番作夫婦は、日も暮れ近く、門なる槐の影長く曳いたが、未だ歸らぬのはどうしたことゝ、案じ果てた後、さらば尋



ね來ようと、番作杖に縋つて立ち出でようとしたが、脊戸の向うの糠助翁が、右手に釣竿と魚籠とを携へ、左手に信乃を扶けつゝ、歸り來つたが、番作を見るより、はゝと打笑ひ、「今日、收穫濟の骨やすめ、神宮河に雑魚釣に行つたが、歸途に瀧の川で、こゝの息子が不動の瀧に凍え倒れて居るのを見つて、驚いて引出し、坊へつれ行つて藁火に暖め、薬を服ませたところ、漸く正氣ついたが、聞けば母御の病を案じてこの寒いのに水垢離とつたといふ、世にも稀なる孝心、聞く身にも涙がこぼれる。法師たちも感心し、これこのやうに當病平癒の御符洗米を下されました」などと、門口で調子高に、自分の言ふ事のみ言つて歸つていつた。

手束は涙ながらに、「これ信乃、よくものを心得るがよい、孝行盡すも程のあるもの。身を危いところへ置いて怪我でもあつたら、親の嘆きをどう思ふぞ。かくては孝行が却つて不孝となるもの」と、諭せば、信乃も涙ぐみつゝ、今朝母上が、信乃のため命をちよめられたと宣ふを陰で聞き、かたじけなさに涙止まらず、親の願に験があつたとすれば、子の願また験あるわけと、この身を贅にして母上の命に代らうと、死ぬる覺悟で水垢離をとつたのです」と、助けられた本意無さを言ふのである。傍に聞ける番作も、手束も共に、その殊勝の志に哭いたのであるが、信乃の心盡しもその甲斐無く、應仁二年十月の末のころ、手束は遂に果敢無くなつた。追慕の涙乾かぬまゝに、三年は過ぎて、文明二年、信乃は十一歳となつたが、愈々大人びて、人品骨柄、十七八の少年にも劣らず、それにひきかへ、番作は年々に心身衰へ行き、病みわづらふ日のみ多かつた。

こゝに龜篠・藁六の夫婦は、強慾無慚のしれ者で、牛馬の如く村民を責め使ふことから、益々人々の怨みをあつめながらも、惡運盛んで、いよく勢ひをほしまゝにしたが、深く番作の人望あるを嫉み、事毎に意地悪く楯つくのである。番作は信乃を設けたが、この二人の間には未だ子が無いところから、武藏國豊島の領主豊島勘解由左衛門の一族練馬平左衛門の家臣某の女の四十二の二つ子とて忌まるゝを、生涯不通の約束で貰ひ受け、その子のみめ好きを誇りつゝ、濱路と呼びて綺羅をかざらせ、信乃を壓倒しようとした。又、彼の手束が拾つた狗は、信乃と共に生ひ立つたが、脊は漆よりも黒く、腹と四足とは雪の如く白いので、四白とも與四郎とも呼ばれ、大きき熊にまがうて、強きこと亦熊に劣らない。よく信乃になづいて村の名物となつてゐたが、龜篠夫婦はこれに對抗しようとして、雉毛の牡猫の肥え太つたのを飼ひて紀二郎と名づけ、夫婦してこれを大事がること濱路にもこえた。しかるにこの紀二郎、如月の末の猫の浮れどきに、友猫と挑んで糠助が家の圓の屋根から落ち、下に伏して居た與四郎にかみ殺されたので、龜篠夫婦腹たてゝ、與四郎をひき渡せ、成敗せむといきまぐるのである。番作これを拒むので、いよく恨み憤り、ある機會に、與四郎を自分の屋敷に誘ひ込んで、太勢で竹槍で突いて數箇所深傷を負せたが、與四郎屈せず、よろめきながら逃げかへつた。奸智に長けた藁六夫婦、こゝに一計を案じて番作方に申し送るやう、「與四郎わが家の座敷に走り入り、折柄我等が拜見し居つた管領家古河城攻について兵糧催促の御教書及び陣代の下知狀を四足に掛けて踏み裂いたのは、恐れ多い次第である、犬を追ひ入れた信乃と糠助とはまさに死罪免れがたいところで、犬の

主たる番作も責があるであらう。しかしそれも氣の毒だから、番作が秘め置く村雨の刀を出さば、我手より管領家に獻じて親子の者の生命乞ひしてつかはすがどうか」といふ難題を持ち出した。

この時、鎌倉の成氏朝臣は、顯定・定正の兩管領と不和で、鎌倉を逐はれて古河の城に立籠り、合戦止む時無く、この地の城主大石氏もいつしか兩管領が手についたので、成氏の兄春王・安王の傳だつた大塚氏の後と名乗る身に難儀が及ばないともかぎらないと墓六心安からず思ひ、かの村雨の一刀を鎌倉に獻じて歡心を得、自分の位置を固うしようといふ底意から、こんな事を云ひ出したとは、番作察して知つたので、おいそれとこれに應じない、墓六夫婦におどされて使に立つた糠助爺、我が身にかゝる事でもあり、肝心も身に添はぬやうにふるへながら説き立てるのを、體よくなだめてかへした後、信乃を膝下に呼び据ゑて、寶刀村雨の由來を説き、墓六の奸計油斷なりがたい旨を告げ、さて云ふやう、「今、これを汝に渡すが、固く守つて奪はれるな。機を見て古河にまゐり、督殿(成氏)に奉つて、身を立てるがよい」とて、硯箱なる小刀を探り天井に打ちつけると、釣索ふつと斷れ、はたと落ちた大竹筒二つに割れて、かの寶刀が現はれた。錦の囊の紐解き押戴き、しばし念じて抜き放つた。信乃は間近く居直つて、鏢もとから刀尖まで瞬きもせずうちまもつた。七星の文煙々と照り輝いて、三尺の氷のやうに寒く、さつと立ちのぼる水氣に、振ればその名の村雨の露と散るのである。

信乃、しばらくは言葉もなく、氣息を凝らして、ぢつと見入つた。この名刀の精、この英雄の風ある少年の胸にせまると見えた。番作更に云ふやう、「汝未だ幼年ながら、あたりまへの童兒の比でない、今から鬢をつめて元服し、大塚信乃成孝と名乗るがよい。せめて汝が十六歳の春を待つてから

と思つたが、病日に重つて存命のほども期しがたい我、今腹切つて死んだなら、村民いよく墓六夫婦を憎み、或はその非を訴ふる者も出て、村民を宥めるはかりごととして、彼等は必ず汝を好くもてなすにちがひない。かくて伯母婿に養はるゝとも、汝が祖父の功によつて恩祿を食むのだから、すこしも彼等の恩でない。汝この寶刀を護り、伯母夫婦がいかに賺すとも、父の遺命を楯に取つて決して渡してはならない。汝かの家にあらば、墓六も心を許して、急には寶刀を奪はうとはしまい、これは危いやうで却つて安き道である」とて、驚きとどむる信乃を膝下に抑へつけ、腹搔き切つて死んだのは、一身を犠牲として主家の寶刀と愛兒の行末とを守らうとする、この癡疾の老勇士が苦肉の計に外ならない。

信乃は父の亡骸にとりついて、しばらくは身も世もあらず泣き悲しんだが、「母に別れ更にまた父に別れて、ひとり生き存ふるも楽しくない。殊にかの非道なる伯母夫婦に養はれること、いかにしても心外である。いつそ自分も切腹して、歩行不自由な父上が冥路の手引をしてさし上げよう」とまた思ひ定めたが、折柄檐下に臥して居た與四郎、深傷の苦痛に堪へず、しきりに長鳴きするのである。不憫や與四郎、我の無き後は誰が彼を養ふだらう。かれをも共に連れて行かう」とて、先づ與四郎が頭を打落したところ、さつとほとぼしる血潮の中に聲あつて、光り閃くものが飛んで出た。手に受け止めて、何物だらうと見ると、不思議や一個の白玉の表に孝の一字を浮べたのである。これこそは、亡

き母のよく語り給うた仙女の投げたといふ玉であるか。狗兒こいぬのほとりに轉がつてそのまま失せたと聞いたが、與四郎が呑んだのであつたかとはじめて悟つて、うなづいたが、どうせ死んで行くこの身である。玉も寶刀も何のやくにたうと、發止はつしと庭石に投げ棄てたところ、玉はね返つて懐にとび入り、又棄つれば又はね返ること二度に及んだ。とかくして、腹切らむと肌押しぬいだところ、又も目を打つ一つの不思議は、この玉のあたつたあとに大なる痣あざ出で、形牡丹の花に似てゐる。訝いぶかり見つゝしばしたためらうてゐると、このときたま／＼庭口から飛び込んで來たのは、龜篠・墓六と、例の糠助爺である。突き立てようとする刃にすがつて、左右から押しとどめた。龜篠は空々しくも涙ぐみ、「心強い親に似て何といふつれない心であらう。をさないがさかしいそなた、よく自らわきまへられよ」と、様々に云ひこしらへ、我等夫婦は常に御身等二人に好意を失はないのに、番作は拗ねそむいて、自らかくは死んだのであらう。汝を迎へとり、行く／＼は濱路にめあはして二代目の莊屋となさうと、早くから思つて居た。死ぬといふ事があるものか」と、すかしなだめた。信乃は父の遺言の的中したのに感嘆し、且つは今眼の前に見た二つの不思議に心動いて、自殺を思ひとまり、遂に伯母夫婦の云ふにまかせて、その許に引きとらるゝことゝなつた。

(三) 信乃と額藏

信乃は伯母のところへ引き取られることになつたが、せめて亡き父の七々日迄はとて、なほその家

にとゞまつてゐたので、龜篠は額藏と云へる小ものを遣つて水仕のわざをさせた。額藏は幼ないが、聰とく生れついてすぐれた心もち、密かに信乃親子を慕つてゐたので、今信乃に近づく機會を得て、喜ぶ事かぎりなく、何くれと無く忠實につかへたが、行水ぎょうすいするとして肌おしぬいだ信乃が腕の痣を見て、「ふしぎな事に、私にも同じ形した痣があります」と示したのを見れば、額藏が背中にも、同様に牡丹の如き痣あざがある。更にあやしいのは、額藏も亦信乃が得たと同じ玉の、唯字を異にして、義と現はされたのを持つてゐる事である。二人は不思議なおもひをなし、互に身の上を語り合つたが、この時額藏の物語を聞けば、彼は伊豆國北條の莊屋であつた犬川衛二則任ぬのりたかが一子で、幼名を莊之介と呼んだ。父則任は、堀越御所政知まさちかが租政しゆせいを諫めてきかれず、憤つて遂に自殺したが、その時やうやく七歳だつた彼は、母が懐にいだかれて、その従弟なる安房の里見の家臣蛸崎十郎輝武を手頼り行く道すがら、この大塚のほとりで路用を賊に掠められ、やむを得ず、墓六方に一夜の宿を乞うたが、無慈悲な莊屋夫婦につれなくも追出され、母はその夜の雪に持病の癩かさつものり、つひに路で倒れ死んだから、安房に行く事もかなはず、身は莊屋夫婦に拾ひとられたが、わづかに餓死なぬほどの食物を貰ふために牛馬よりむごく扱はれて、早くもこゝに五年を経たといふのである。されど、男子の一生を空しく送る事があるべきでない、隙をぬすみて、夜は讀書、晝は太刀とる業を獨り學びつゝ、文武兩道、すでにその大體に通じたのは信乃にも劣らぬ神童であるが、同じく得た玉と痣あざと、自ら因縁の相通ふのを知れる二人は、これより相結んで兄弟となり、額藏は自ら犬川莊助義任と名乗り、信乃が分身とな

つてまもり助けむ事を約した。信乃は稚いが、心は大人にもすぐれたので、龜篠等大方ならず憚り、心の底をさとられまいと、さまざまに言ひこしらへては機嫌をとる傍から、油断ない眼をきらめかすのである。されば額藏は信乃と仲の悪い體に見せかけ、夫婦に心許させてそれとなくその意中を探るなど、幼年ながらまことに抜目が無いのである。頼り無き信乃もこゝに額藏を得た上、かの糠助爺も相變らず親切で、「和子よ、糠助が参りました」と折々例の高調子で障子の破目よりさし覗きながら、信乃が薦むる澁茶などすゝつては、四方八方の話に憂さを慰め、堪へがたい歎きの中にまた心やる方もあつた。

かくて四十九日も過ぎたので、暮六のところへ引取られたが、はじめの中は夫婦してまめくしく歎待したのである。暮六夫婦は番作の逮夜の供養など疎かならずとり行ひ、やがて信乃生立たば濱路をめあはし、己が後目を繼がす所存と語つて、愚直な村人等を籠絡したのであるが、こゝに少女濱路は素性宜しく、自ら備はる人品に、長ずるまゝに類ひない美貌となり、貌より更に美しいその心持は、全く養ひ親の二人に似ない。物心づくにつれ、かの信乃を婿になどと兩親の折につけては云ひはやす言葉をまこととして、長い袂の紅絹裏に人知れぬ戀心を秘めたのである。濱路は幼な心にも、村人に爪弾きさるゝ兩親の振舞を世に淺間しき事に思ひ、どうしてこんな親に生れたのであらうなど、思ひふけることもあつたが、まことの親は別にあつて、練馬の家臣、某といふものであると、密かに傳へ聞いてから、未だ見ないその人の慕はしくてならなかつた。又信乃へも陰になり日向になり、やさしい少女の情を運んで心を碎いたのである。信乃に聞かば、實の親の姓名も知るよしがあらう、なほむすぼるる心のかずくを話しもしたらばと、しのびくくに入無折を窺つたが、するどく光る龜篠が眼に、常に射すくめられて、さうしたいさゝかの隙をも與へない。

(四) 濱路の戀

これより先、番作の一周忌の折のこと、信乃は額藏を伴ひ、寺に詣でゝの歸途、もと住んだ家の塵屋となつたのを訪うて、その當時の追憶に耽つたのである。八重葎繁れる庭の片隅なる梅の根元に與四郎を埋め、後世のためにとて、如是畜生發菩提心と經文をその幹に彫つた文字は滅えたが、綠蔭暗く青玉の如き實累累々としてみのつてゐる。薄紅梅なので、こんなに多く實を着けたことは曾て無かつたのに、不思議なこととよく見ると、條毎に入つづゝ實が生つてゐる。梅に入房と云ふのはこれなのだらうかと、なほよく見るに、實毎に皆模様があつて、つみとつて見ると、一つには孝の字あり、一つには義の字あり、更に禮字あり、智字あり、忠信孝悌あり。二人は己等の孝字の玉、義字の玉を有てるに考へ合せて、不思議の思ひをなしたが、更にこゝに信の字の玉の所在を知つて、更に異姓の兄弟のあるのをたしかめたのである。これはかの糠助爺にかゝつた話なので、その妻死んでから一年、糠助もまた病に臥したのは信乃が十五六になつた年の秋である。信乃は彼が貧苦の中に病むのを憐み、亡父番作がひそかに遺した小判の一枚を與へなどしたが、糠助涙をこぼして喜んだのであつた。時

疫やまひの邪熱高く、今は再び生きがたいのを知り、ある夜信乃をその枕べに呼んで、喘ぎ／＼語りいでた一場の物語があつた。糠助はもと安房洲崎のほとりの土民であつたが、子を遺して妻に先立たれ、生計に窮せるまゝに、役行者の靈地として殺生禁斷のところである洲崎の浦に漁り、ことあらはれて、獄舎に繋つながれたのを、折柄國主里見殿の愛女伏姫の三回忌に當り大赦があつて、死罪を減ぜられて追放に處せられた。そこでまだ乳呑子である一子玄吉を抱へて下總の行徳の邊までさまよひ來たが、もとより路用もなく糧もなく、つく／＼身の命運を果敢なんでもその橋の上より身を投げむとしたのを通りすがりの一武士に止められ、請によつて玄吉をその人に與へ、身一つならば何とかしやうもあらうとて、この大塚に流れ來て、この家の先住なる靱七が跡目に入夫となつたが、「一升瓢はいつでも一升とやら、年貢の滞りを償われ、水も飲めない瘦百姓のはかない身の果も皆役行者の御咎めであらう」と糠助は語りさして、歎息した。

軒端の干菜をさわがした風も静まり、天井を渡る鼠の音もやんだ。行燈の灯がじ／＼と鳴つて、煤け障子の影法師が、ちつとして動かない。糠助やがて涙ぐみながら言葉を續けて云ふやう、「今死んで行く身に、唯一つの心掛りといふのは、彼の一人子の玄吉が事である。成氏朝臣の御内とばかり、養親の名をも聞かずに捨てるやうに與へたあの時はそんなにも思はなかつたが、年經つにつけ思はれてならぬはあの子がごと、今何と名乗つてゐるか知らないが、障り無く育たば、御身と似た年頃である。我子といふしは、生れながら右の頬先に痣があつて、形牡丹に似てをる。又七夜の祝の爲めに我

が庖刀を入れた鯛の腹から、玉出で、文字の如きものがある。些か目の見ゆる子が母は、「まこと」とも「のぶ」とも訓む信の字に似たと語つたが、その玉は臍帯と共に守囊まもりぶくろに納めて、長祿三年十月二十日誕生、安房國の住民糠助が一子玄吉、初毛並に感得祕藏の玉と、母が手づから釘の折せのやうな假名で書き附けてその身に添へて置いたが、もし失はないであつたら、これに上越す證據は無い、そなたも成氏君に縁故があると聞くが、若し古河殿に參つたら、以上の二つを心當てに尋ね逢ひて、まことの父の事、今見られるまゝに話して下され」とて、胸にふさがる哀しみに、ほろ／＼と涙を流した。信乃は聞く中にも、痣と玉との二つの不思議に心ひそかに驚いて、さてはこの爺の子もわれ等が兄弟の一人であつたのかとうなづきながら、「必ずめぐり合つて親しい友とならう。心安くお思ひなさるがいゝ」など、いろ／＼慰めたので、糠助いたくよろこんだが、遂にその夜の明け方ちかく敢あなくなつた。

さて、こゝに慕六夫婦は、信乃が成長して、今や天晴の丈夫となり、一村の人望甚だ高いのを見るや、二葉のうちに摘まなかつたのを、この頃しきりに悔ゆるのである。一方に濱路は年長けるほどに、いよ／＼美しく、今は年頃の嫁御寮、莊屋殿には何で配はせられないのかなどと、信乃と濱路との婚姻を促す村人も多かつた。折柄、當國豊島の領主豊島勘解由左衛門信盛、その弟練馬平左衛門倍盛兩人いさゝか兩管領を怨めることがあり、管領山内家の老臣で、自立の志ある越後・上野兩國の領主長尾判官景春に一味したため、兩管領に攻め滅された騒ぎがあつた。巢鴨大塚などの里も、その餘波を

受けて人心おだやかならなかつたから、夫婦はこれを口實として婚姻をのばしてゐたが、濱路の美しさを餌として名利を釣らうとする心の底、それには先づ信乃を追はなければならない。信乃を追ふには、先づ村雨の寶刀を奪つて、と、しきりに肝膽を砕いたのである。

然るに、この頃、城主大石兵衛尉が陣代兼上蛇太夫みまかつて、長男宮六これをつぎ、下役軍木五倍二・卒川庵八などをはじめ、あまたの従者を引連れて領内を巡検することがあつたが、墓六が家に一夜を宿ることとなつたので、墓六、饗應に善美をきはめ、心を盡して媚びへつらつた。管領家の浪人綱乾左母二郎がこの地にさまよひ來り、糠助が舊宅に身を寄せて手跡遊藝などの師匠に生活する、幫間めいた男を、席にはんべらしなどして、歌曲に興を添へたが、濱路には殊更に美しく粧はせ、或は酌を執らせ、或は筑紫琴をかなでさせなどした。濱路はひたすら心憂く又はつかしく、左母二郎など袖を列ねて、鬼瓦のやうな醜男の威勢を張る前に媚ぶる事をいかに信乃が思ふだらうと口惜しく誰に聴かさう琴の調べぞ、亂るゝ節もそのまゝに掻き鳴らすのである。醉顔蕩けた宮六、眼を細うして濱路を顧み、聲を太くしてほめそやし、眼尻を垂れ鼻の下を長くし、我を忘れて笑ひくづるゝ様憎々しく腹立たしく、濱路は辛うじて一曲を奏し了るや、あたりのさわぎにまぎれて姿を隠した。あとには左母二郎が輕薄の笑ひ聲、一きは高くきこえた。

さてこの左母二郎は、色白くにやけ、辯舌巧みに人を操るを得意とし、多藝で文書く道をはじめ音曲の嗜みもあり、番作があとをついでこの里の手習師匠となり、かねて歌舞今様などを教へてをるが、こゝの少女、彼處のやもめと浮いた名の立つこと少なくない。然るにいつの間にか濱路を見染めて、いやらしい振舞をする事しきりなので、濱路、厄病神のおもひをなし、左母二郎の訪ふ折は、奥にかくれて影を見せない。今は浪人なれど、やがて歸參のかなふ曉には、食祿五百貫をあてがはれ、近習のかしらとなり、ならびない寵を得べき身であると、自ら吹聴するのを龜篠まこととし、ひそかに濱路の婿にしようとする心持があつた。左母二郎は、將を射んとすれば先づ馬と、うまゝ龜篠にとり入り、墓六にもひたすら媚びへつらつて、呼ばれるれば箸を投げて走りゆき、路に逢へば雨中にも下駄を脱いで腰を屈めるのを常とした。

(五) 墓六が奸計

こゝに陣代兼上宮六は、さきの夜一目に濱路を見染めてから戀心止みがたく、その意を見て取つた軍木五倍二は、宮六に濱路を娶らむことを勧め、自ら媒妁として墓六に娘戀望の一義を申入れた。墓六、心に喜びつゝも、さすがに信乃の憚られて、おいそれとはうべなひ兼ねるのを、五倍二、陣代の威を藉りて有無を言はず、たのみのしるしと禮物さしおいて歸つた。昆布などにとりそへた白銀二十枚を、龜篠先づ見て雀躍し、いよく運が向いて來たと聲をしのびて喜んだ。しかし信乃が在つては、里人に誓つた言葉の手前にも、濱路を遣ふことむつかしく、これのみ心にかゝつたが、墓六、打案じて膝を打ち、何事か龜篠に囁くと、龜篠も頻りに會心の笑をもらしつゝうなづくのである。さて、ど

んなはかりごとをめぐらしたらうか、龜篠は次の日の午すぎ、背戸口から出て竊に左母二郎が宿所に赴き、ひき下した簾の奥深くひそく聲で「御身と娘濱路とは人は知らぬがどうやら情由あるらしい、御身を婿にとは我等ものぞむところだが、信乃といふ者がある以上思ふに任せなかつた。信乃は此度仕を求めて古河に行く事となつたから、濱路はいよ／＼御身のものになるであらう、ところで、折入つての願ひといふのは、墓六が彼の幼い折に婿引出とて取らせた秘藏の一口がある。取返さなくては叶はぬが、あからさまに求めても返すまいから、かく／＼云々に計るがよい、そしてその摺替の役をおん身に頼みたい」と説くのである。左母二郎飛び立つばかりに喜びながらも、「嬢様と情由があるとはまこと濡衣、鮑の貝の片思ひで、むだ骨折つて首尾よく太刀は摺り替へたところが、嬢さまがなほ氣つよかつたらどうなされる」などと、いつもには似ず澁るのを、龜篠ほ／＼と打笑ひ、「粹にも似氣ない言葉ではある。親の私が眼にすら、わけがあると見えるおん身と濱路が仲ぢやないか。波のうねうね浮草は隔つてゐても遂に一つによるものである」などと、滑かな舌すべらして、かき口説くので、左母二郎は忽ち打ちまろめられ、「命に換へても」と承知し、更に額を合せ、その日の合圖、事の首尾、おちもなく語らつて、龜篠は歸つたが、さてその夜、墓六は信乃を別室に呼んで、言葉を改めて云ふやう、「今、古河の御所成氏卿、兩管領家と和議整ひ、御歸城の途に就かせられる。が、匠作殿以來の忠勤を繼いで、大塚の家を起すのは、まさにこの時ではないか。かの村雨の寶刀を捧げて、古河へ行つて身を立てるがよい。濱路はあとからおくりつかはさう、善は急げだ、疾く／＼出向かれよ」と、深切らしくすゝめた。信乃は簾上よりの申込も、兩人の意中も、疾に知り、疾に察してゐた。我を遠ざけむ計にちがひない。それは此方よりも望むところと、言下にその意にしたがつたので、龜篠早くも旅の用意とてさわぐのをきく濱路は世にも憂れたく悲しいことにおもつた。旅にいでは何時また會ふとも定めがたく、縁の絲の結びがきれでもしたらどうしようなどと少女心のやるせなく、君がためにと縫ふ衣の、一針ごとに涙がしげかつた。

さて信乃は、龜篠の勧めに任せ、發足の前日、瀧の川の辨財天に參詣したが、歸途はしなくも墓六が左母二郎を伴ひ、老僕に綱を擔がせて來るのに會つた。墓六、そなたが首途の祝ひの肴にとて、今漁りに赴くところである。そなたも一しよに行かぬかといふに、信乃辭みがたく、共に神宮河に到ると、墓六はかねて知る家にて舟を借り、土太郎と云へる船頭をやとひ、老僕は行厨を忘れたとていつて家に還し、信乃と左母二郎とを共に舟に乗せたが、墓六は壯年の頃より自慢の綱打なので、折柄日が暮れて十七日の月がまだ昇らない暗紛れに、獲物は忽ち籠に満ちた。然るに、いかにしけむ墓六は、綱もろともざんぶと水中に落ちた。信乃は驚き、たすけようと續いて水中に飛び入つたので、土太郎も亦飛び入つた。これは墓六がたくらみで、溺るゝやうに見せかけて浮きつ沈みつする。信乃腕をとつて支へるのを、土太郎はたすけるまねしながら、信乃を水中に引入れようとした。併し信乃は水練の達人で臂力亦人にすぐれたから、まつはる土太郎を一反餘り蹴放し、墓六を抱いて向う岸に遊ぎ着いた。舟に残れる左母二郎はかねて謀し合はしたことゝて信乃が副刀の村雨の太刀と、墓六が副刀の鈍刀とを、

鞘はそのまゝに中味ばかりを手早く掬り替へたが、この時ふとした出来心から、更に己が刀の目釘を外し、それとこれとをすりかへた。信乃はもとより知るよしなく、慕六もまたこれを知らなかつた。かくてその夜はかたばかりの留別の宴を張り、明日早朝、信乃は額藏を従へて、いよく古河に赴くこととなり、夜も更けて臥床に入つた。

(六) 信乃、濱路と別る

信乃・額藏各々臥床に入り、しもべ等皆寝しづまつたのを見て、慕六、龜篠に今日神宮河でのことこまかく私語ききかすのを、龜篠耳傾けほゝゑみつゝうなづくのである。見事たばかりすました嬉しさに心跳らしつゝ、慕六、かの刀を抜き放つて灯影にかざすと、名にし負ふ村雨丸の村雨のつゆ、その刀尖よりしたゝり落つ。尊い、勿體ないとして、慌だしく指に浸しては頭に塗る靈水の幾滴、これは神宮の河水だつたのである。抜目無い左母二郎がすりかへたのをまたすり變へるとして、その窪に少しばかり河水をそゝぎ入れ置いたとは知らぬ慕六夫婦は、村雨の寶刀今ぞ正しく手に入つた、諸願成就と打よろこび、なほ盃を重ねつゝ、信乃よし額藏に討たれずとも、この太刀が無くてどうしようなど打語らつて、やがて共に臥床に入つた。

50 志を立て、郷關を出ようとする信乃、前途の光明に心は躍るが、別離の情かなしくなくはない。信乃は曉に至つても眠れない。殘燈のゆらぎに思ふこと多く、苦難のこし方を、今更のやうにおもひ

51 返すにつけても、別れての後の濱路はどうなるであらうかなど、思ひ煩つてゐると、ふと枕邊に人のよつて来る氣配がした。ほのかな灯影にしよんぼりと竹むのを、何人ぞと打ちまもると濱路で、颯のあとの方につゝぶして、たゞすゝり泣くのである。信乃は打騒ぐ胸押鎮めて颯を出で、釣緒を解き臥床を片寄せ、襟を正していふやう、「瓜田の沓と云ふではないか。この夜更けに何しにこゝには來られたか」と云へば、打ちふるふ鬢の亂れに、涙の玉をはらひ、濱路はその美しい毗にいさゝかの恨みを籠めて、「何しに來たとは餘りのお言葉、一旦親の口から許された夫婦ではござりませぬか。日ごろはともかく、今宵かぎりの別れといふのに、たゞ一言もかけ給はぬとは、何を憎んでそのやうなつれなのお仕打か」と、一すぢの少女心の、戀に燃えては、打ち返す袖の紅絹裏にたばしる涙も、烟と沸き立つのである。

信乃はそゞろに斷腸のおもひで、「嫌忘の中にある身なので、言ふべきことも言はなかつたが、御身の誠はよく知つてゐる。つれないとばかり思はぬよう。古河は僅かに十六里、間もなく再び歸つてくるほどに」となだめたが、濱路は何でこれを誠としよう。「さう言はれるのは皆偽り、今宵が長き別れとなりませう、誠の親はあるやうにきいてをれど、たゞ練馬の家臣とのみで、その練馬家も滅びて、家隸郎黨皆のこりなく討たれたさうで、今は尋ねることも、跡甲ふすべもないのでございます。御身の外には、廣い天地に、誰一人たよりとする人も無い私を、どうしてつれなくも棄て行かうとなされまますか。人目の堰は繁くあらうとも、下ゆく水のかよひ路に、心のまことは通はないでせうか。御身

が出世を、念じ祈らない日とてはない私が思ふ百分の一、おん身にまことがおありでしたら、どうして共にとは、仰せられませぬ。捨て行かれるとならば、とくおん身の双にかけて下され。振り捨てられてあこがれ死に、死ぬよりは、その方がましです」と、すゝり上げすゝり上げ、搔口説くのである。千筋に亂るゝ黒髪の、その一筋にも、なほ千斤を引くといふ。しかも信乃が心は大磐石の如くで、肅然として言ふやう、「濱路よ、御身の言葉は、皆道理だ。しかし、此度の旅だちは、私をとほざけて御身に婿をとらうとする伯父伯母の企てから出たもの、私はおん身の爲に、夫であつて未だ夫ではない、今つれだつて走つたら、淫奔の誹りは免れまい、たとひしばらく別れるとも、互に心が變らなかつたら、遂にひとつに寄る時があらう。親達の眼覚めぬひまに、とく／＼臥床に歸るよう」と云つても、濱路は立ちあがらず、首を掉つて、一しよにと仰せられる御ことばをお聞きしない間は生きて鬨の外に出ますまい。殺して下され」と男の膝に身を投げ掛ける、なよく／＼と力無いその風情は、しをれ崩れる花瓣にも似てもゐた。信乃はほと／＼困つてしまつたが、聲を勵まし、「何とてそんなにきゝわけないのか、命があつたらまた逢ふ時もあるのか」と窺められて、濱路はたゞよゝと泣き沈むばかり妻といはれるか、宿世のあだかたきでもあるのか」と窺められて、濱路はたゞよゝと泣き沈むばかりであつたが、しばらくあつて顔を上げ、「まことどうにもならないで、我が身だけがあきらめればすむことでしたら、このまゝにとゞまりませう。どうか道中恙なく古河へ行かれて名を揚げ、家を興されるよう、をり／＼の御無事のおたよりを待ちませう。よし、この世のいのちなくなつても、二世の契りをお忘れなさいますな」とかき口説く無量のおもひ、千夜をひと夜に語るとも盡きないであらう。しらく／＼明けを告ぐる鶏の聲に、信乃は、「二親が眼ざめられるであらう、早く／＼」と心強く促すに、濱路は力無く立ちあがり、「心ない鶏のこゑよ」となげきながら、去りがたい心で一ぱいだつた。殘燈光うすく窓は既に白んだ。戸外では出發を促す額藏の聲がする。なほ暗いところに立つて、別れがたく泣いて居た濱路、今はとて立出でつゝも、ふりかへつては、名残を惜む心の中はどんなであらう。信乃は何事も見まい、聞かまいとするやうに、眼を閉ぢ、齒を喰ひしばつて、石像の如くつ立つたのである。

旅の支度をとゞのへて、信乃は伯父伯母の目覚めるのを待つてゐたが、宿醉にぐつすり寝込んで明六つの鐘に未だ起きない。臥床に立寄つて別を告げると、伯父も伯母もねぼけ聲で唯「いつておいでいつておいで」といふ。信乃が、額藏を従へて立ち出づると、奴婢ども皆見送つて名残を惜しんだ。濱路は泣顔ひとにさとられるのがつらく、たゞ細目にあけた障子の隙から見ると、一目に限りないおもひをこめ、言葉も無くて見送る眼はぼうと涙にくもり、狭霧に消ゆる戀しい人のうしろ影！ その人は遂にまた歸り來らぬのであつた。

暮六夫婦の起き出でた時は日既にたかく、「信乃は」と問ふと、「朝早くお出かけです」と告げた。自分か寝ぼけて夢中に挨拶したのも知らずに、「暇乞もしないで出て行つた」とてのゝしるのであつた。濱路はと問へば、「今朝は殊に心地すぐれず、臥床にこもつて」ときくと、鍼よ薬よと俄かに立ち騒ぐ

のは、出世の梯かけはしをはづしては大事と懼れるからであらう。信乃がことは、もう安心だ。案じられるのは濱路が病氣。結納ゆひな受けてから、未だ日もたぬに、矢のやうな軍木ぬもが催促、今日も今日とて使で手紙をよこしたが、遅れるのを責めた文面に怒氣が著しい。墓六胸安からず、あわてふためいて、すぐに軍木ぬもの許におもむき、日暮時に歸つたが、得意さうに、妻にさやくやう、「信乃をとほざけたかねての苦心を、軍木さんから簸上殿に告げたところ、ことの外満足で、濱路が病氣もさしたる事は無からう。幸ひ明日は吉日だから病氣のまゝ迎へとり、婿が手で薬をのませよう。主君在城されないので婚姻の願文も未ださし上げず、晴れの儀式ははゞかりあるから略儀で、兎も角もすまさうとのこと、明日の夜もし故障があらば、汝は勿論、媒なかつした某まで腹切るより外無いと軍木さんも申される。安からぬのは濱路が心だ。おん身何とかうまく説いて見てくれぬか」といふに、龜篠、考へて、「今宵とはあまり急なこと。心もとなくも思はれる。私が謙すかしてうまくゆかなかつた時は、おん身またこんな風に」とさやく聞きかすのを、墓六委細承知と胸を打つのであつた。

濱路は朝から引籠つて、結ほるゝ胸のおもひに吐く息も炎と燃ゆるばかりである。夜着よぎにうづめた前髪も、襟も袂も涙にぬれて、泣き疲れた眼に、別れた人の面影去りがたく、龜篠が言ふことも耳に入らなかつたが、「おん身には未だ話さなかつたが、よい婿といふは別人ならず、かの陣代の簸上殿。軍木さんから矢の催促、今はのがれる路も無いので、早く心を定めて、親を安心さして下され。そなたが慕ふ信乃は、途方とほうもない馬鹿もので、年頃良人とくとを親の仇とねらひ、心の刃をといでゐたが、大悪心

あらはれかゝつて、この里に居りがたくなり、許我にまゐるといつはつて、遂にどこかへ逐電ちくでんした。甲斐無あいことはあきらめて、めでたい今宵の用意するがよからう」と聞くに、濱路は忽ち胸つぶれて思はずよと泣き沈んだ。

濱路はやがて屹となり、餘りの口惜しさ、腹立たしさに、聲ふるはして、「心得ぬことを仰せられませ。信乃さまがそのやうな悪人などは、全くのつくり言。御二方の御心になはせず、追ひやられたのですが、一旦、許嫁のちかひした上からは、他の男にまみえることは出来ません。御言葉にさからふ罪は、どうぞおゆるし下さい。この事ばかりはどうあつても」と、思ひ入つては、雄々しくも言ひ放つ言葉の、いつものなよ／＼しさとは打つて變つてゐた。言葉の威にけおされて、龜篠ぐうの音も出でず、腹立てゝつぶやくのである。詮すべくなく見えたところに、つと進み入つた墓六、濱路が前にはたと坐し、さめ／＼として鼻うちかみ、「龜篠何も言はれるな。やよ濱路、親もはづかしいばかりのそなたが貞實、彼方にてくはしく聞いた。老いてはよろづ心弱く、簸上ひがみどのの望みが餘り切なで道ならぬ縁も結んでしまつた。これも御身が後のためよいようにとの親ごゝろで、道理がないとばかり思うてはならぬ。あの曲者の信乃にだまされ、甲斐なき操立て通さむとする、一すぢのをとめごころ尤もと思ふので、強ひてとは言はぬ。しかし、一旦約束した簸上殿、すでに今宵にさしせまつた事、今になつて變へると云つたらどんなに怒るかしのれない。陣代ちんだいの威勢でこの一村を空巢あきすにすることもむつかしいことではない。老いのうきめを見ようよりは、いつそ申譯にこの皺腹、かき切らう。な

むあみだぶつ」と唱へもあへず、短刀きりり抜き放ち、腹につきたてようとするのを、龜篠・濱路、等しくおどろいてとり継るのであつた。墓六、「いや／＼死ぬより外はない、放せ、殺せ」と狂ひ騒ぐに、龜篠抱きすくめて見かへり、「濱路どう思ふ、親を殺すも殺さぬも御身が返答一つできまる。御身は親を殺すつもりか」との、しられて濱路今は力無く、「仰せに従ひますから、父上、どうぞ刀ををさめて下さい」と、かすかに答へて、その儘そこに泣き倒れた。濱路は遂に嫁がうとさだめたのである。否、その刹那に於て、死なうと決心をきめたのである。死出の旅路のよそほひに、みだれた鬢などかき上ぐるさま、よそ目には哀しきさうにも見えないので、「はじめの言葉のやうでは、手ごはいと思つたが、これではつとした、しめた／＼」と墓六夫婦は喜び合つたのである。かくて夕ぐれかけて、一家は祝宴の用意に上を下へとさわぎ立つた。

(七) 濱路、節に死す

網乾左母二郎は、莊屋の邸のさわがしさを只事ならずと怪み、何であらうと、土大根提げた老僕の忙がしさに通りかゝるのを呼び留めてきくと、「御承知ならないとは。嬢様の御婚禮でてんでこ舞してゐるところ、あなたもお手傳ひに来て下さいませ」といふに、心安からず、「婿は誰ぞ」と問へば、陣代簸上の懇望で嫁入する次第を語つて、「信乃様はお氣の毒。底意地悪い伯母御夫婦の機嫌とりつゝ辛抱した甲斐もなく、まさかの時には追ひやられて」など云ひ續ける。左母二郎聞くやきかずに、「では、だまされたのか」と齒噛みをなして憤り、いろ／＼思案した末、よし／＼濱路を盗み出して逐電し、かの夫婦のものに鼻あかせてくれようと、旅支度して、その夜ひそかに墓六が邸に忍び入つた。

濱路は堅く死を決し、最期をかざるために、髪も結び、衣も着換へた。墓六夫婦の漸く得心したものと心ゆるす隙をうかゞひ、初更に近い宵闇にまぎれて裏庭に出た。築山のほとりの樹蔭の枝に紐をかけたが、戀しい信乃様はかうとは知り給ふまいなど思ふに、今更にはかない身のなげかれて、覺えずよ／＼とすゝりあげたのを、聞きつけた左母二郎、さては濱路は今宵の婚禮を身も死ぬ迄に厭ふと見た。それは誰への心中立か。信乃にか、この我にか、大方自分の方だらうと、飽まで己惚強い馬鹿者の本性あらはし、そつと忍びよつて抱き止め、あれえと叫ぶ口に手をあて、「驚かれるな、左母二郎である。その心中立は嬉しいが死なうとは愚かなこと、手をとつてこの場を逃れよう」といふに、濱路胸つぶれながらも、「退いて下さい。あなたに用はない」と柳眉怒りにふるへるのを、左母二郎見て、「それぢや自分ではなかつたのか」と、失望やら腹立しさやらで、「かうなつては否でも應でも連れて行く、疾く／＼と手を執るのを、濱路振り拂ひ／＼、彼方に逃れ此方に逃れ、暫時はかくて争つてゐたが、左母二郎遂に濱路を捕へて猿轡を食め、小腕に搔込み、闇にまぎれて走り出た。

しばらくは脚に任せてかけ出し、途に行轡を備つて急がせたが、轎夫は加太郎・井太郎とて、近郷に名うての曲者である。はやくも女盗人と悟り、強請つた上、女を奪はうと左母二郎に打つてかゝる。左母二郎、武藝は未熟ながら、持つた村雨の刀の奇特で、忽ち二人を切り捨てた。莊屋夫婦は、花嫁の失

踪に肝を消し、かの土太郎を追手として遣はしたが、左母二郎これをもその場で斬り殺した。

こゝは板橋の此方なる圓山塚のひとりである。この日の晝、こゝに壇を設けて法を説いた不思議の行者があつた。肩に瘤があつて身は曲つてゐるが、朗々たる聲で眼光凄しく、眞夏の空に猛火を焚いて、呪文を口ずさむのである。善男善女の喜捨を集めて後、焰の中に身を消して、火定の奇蹟を示したが、その火、なほ消えのこつて闇を染めたのを、村雨の太刀の雫で打消すと物の色の分らぬ五月闇である。さて左母二郎は轎の中なる濱路を引き出し、その縛めを釋き捨て、神宮河で刀を入れ換へた一條を物語り、我に従へとすかし且つ迫るのである。濱路は始めて夫の危地に陥られたのを知り、胸の潰れる思ひだつたが、どうにかしてかの寶刀を奪ひ返さうと、従ふと見せて隙を窺ひ、匕首を閃かして左母二郎に斬つてかゝつた。左母二郎怒つて濱路が乳の下に一太刀浴びせ、痛手に弱るを突き、まろばし、太刀を大地に衝き立て、ほとりの株に尻うちかけ、懐中なる疊紙から鎌子をさぐり出し、頤の鬚を引き抜きながら、「おろかなる女ではある。泣きたくば泣け、云ひたくば云へ、月の出づるまで聴いてやらう」と、空嘯く。濱路は血潮に塗れながら、あへぎあへぐ息の下より、なほも左母二郎を罵つて止まない。左母二郎遂に怒つて一刀に刺し殺さうとする折しも、火定の坑のひとりから飛び來つた銃銀、ぐさとその胸に立つたので、あつと云つたまゝ仰反つた。

この時坑のほとりに忽然と立ち顯はれたのは、かの炎の中に身を消した行者である。はじめに異なるそのいでたちは、肌はだに南蠻鐵なんばんてつの禦帷衣くさりかたばらを着用し、唐織からおりの段だら筋の廣袖ひろそでの單衣ひとえを裾みじかに着け、

濃紫こいらさきの丸ぐけの帯を尻高しりたかに紮おね、籠手かごて躡當しんあてに四肢しそをかため、朱鞘しゆせうの太刀を横たへて、眉秀まゆひでで色白く、月代つきしろの迹長く延びたる、一癖ひとくせあるべき面框つらかまである。息吹き返して立ち向ふ左母二郎の刀を奪つて切り倒したまゝ、見向きもやらず、血を洗うて露したる切先から鏑もとまで見上げ見下し、「傳へ聞く村雨の寶劍とはこれなんだ。この太刀手に入る上は、我が大望も成就に遠くない」と呟いて打笑み、鞘取上げて納めたが、振返つてうちうなづき、弱り臥せる濱路を扶け起し、懷中から藥を取出してふくませ、驚きあやしむをおししづめて、吐息と共に云ふやう、「名のるは憚りある、がこゝにはからずもめぐり合つた私はそなたがためには異腹いはらはりの兄、犬山道松忠興いぬやまみちまつただよる、今は道節みちせつと名乗るもの」とて、さて語り出でたる身の素性すじやう、濱路もはじめて自分の素性を知つた。「私は先頃管領家に滅された練馬ねりまの老臣らうしん犬山貞興さだたか入道道策いりどうださくの遺子道松である。家に傳はる火遁くわだんの術で、修驗者しゆげんに姿を變へ、或は烈火を踏み、或は火定の終はつりを示し、本意ほんいならねど愚民を集めて、君父の讐せうなる管領扇谷あふや定正さだまさ等を討つべき軍用に供へつゝある。されど、斯かる手段は眞の義士勇者の爲すべき事でないと思ひ改め、これより單身定正を狙ひ撃たむと打ち立つ門出に、測らずもそなたの難を見、生命を救ふには遅かつたが、その場に仇敵を討止めたのは、まことに兄弟の縁のつきない所であらう。そなたが母も私の母も共に道策の側室そばめだつたが、私の母は私を生んだので正室にのぼつたのを、そなたの母妬んで私の母を毒害し、又私をも絞ひり殺したが、私は墓中から蘇つて、生れながらの肩の瘤の上に、牡丹の花の形した痣あざさへ出來た不思議さからそなたが母の悪事現れ、母は死刑となり、そなたは四十二歳の二歳兒ふたつこといふので生涯不

通の約束で、藝六方に養ひ取られたのである」と、くはしく語り聞かされて、濱路は今絶えなむ息の中にも、悲喜交々起り、おもひは千々に亂れたが、心にかゝるはその村雨の太刀である。枯野の蟲の力ない音をふりしほりつゝ、かく／＼と次第を語り、「古河に赴いた信乃に渡して下され」と頼み入った。道節はうなづいたが、「しかしこの名刀は私にも用がある、これを獻するを名として定正に近づき、彼を撃たむ存念である、宿望を果してなほ餘命があつたらそなたが請に従ふことが出来ようが、若し讐の手に死んだなら、その事叶はないから、しかとは約束しがたい」と云ふに、濱路は望を失つて息絶えた。「そなたが貞操はあはれに思ふが、武士の意氣地も苦しいものだ」とて、剛氣の道節も腸を絶つおもひである。

この時、「曲者待て」と呼ばはつて樹蔭より躍り出でた一人があつた。えいやと道節に引組んで、しばしは烈しく揉み合つたが、互に無雙の大力、勝負はいつとも分らなかつた。この男は、信乃の古河に赴くを送つた莊助義任が、大塚に引返すとて不思議に道を誤り、此處に、はしなくも濱路と道節との物語を立ち聞きし、信乃がために、村雨を取戻さうと、立ち現れたのである。斯くて、この二人の勇士、祕術を盡して闘つたが、かの義の字の靈玉を納めた莊助が守囊の長紐、道節が太刀の緒に搦みつきて彼方に取られたから、それを取り返さうと手を緩める隙に、道節振りほどいて太刀引き抜くと、莊助も抜き合せて丁々發止、いつかさし出でた十九日の月の明りに、きら／＼とした太刀の光、たゞ太刀の光を見て人を見ない。はげしく斬り結ぶこと小半餉、切先餘つて莊助は腕に淺手を負つたが、事と

もせず、返す刀に道節が肩なる瘤を切り割くと、さつと迸る黒血とともに、瘤の中から飛び出た物がある。はたと莊助が胸に當るのを、地に落さず手に受けとめた。

この時莊助、隙を得て聲振り立て、「大塚信乃が死友犬川莊助義任ぞ。寶刀を返せ」と名乗りかける。道節冷笑ひ、「妹にすら渡さなかつた村雨、なんで汝に與へよう。さあれ汝の武勇侮りがたい。後の大望のためにはばし避くるぞ」と云ふや、火定の坑に飛び込んだと見ると、姿は忽ち消え失せた。莊助今は如何ともすることが出来ない。さるにても、かの道節が創口から飛び出たのは何であらうと、月影にすかして見ると、不思議なことに、信乃と莊助とが持てる孝義一雙の靈玉と寸分たがはぬ玉で、異なるのはたゞ忠と現れた文字なのである。「さては道節、彼もまた我が同盟たる因縁があるのか。この玉と、道節の身に附いて失せた我が玉とを交換すべき時も、村雨の寶刀の信乃に返るべき時も、やがて來なければやむまい」と、莊助ひとり合點しながら、左母二郎が首を切つて傍なる椶に梟け、幹をけづり墨斗の墨でその罪狀を書き記し、そのまゝ路を急いで大塚に歸つた。

さて、大塚なる藝六の邸では、花嫁の行方が知れなくなつたのに、花婿の陣代殿の入り來るを見て、夫婦は心もこゝろならず、あわてた、藝六がいつもの佞辯も、しどろもどろで、強ひてつくれる龜蓀が白粉もの／＼しい皺面の鼻のあたりに、黒々と鍋墨がついた。すゝめた羹の中に東蘂子があり、酌とれば酒にはあらで煮醋である。「煮醋を吞まさうとするのか、嫁なる女はどうしたか」と、宮六責めなじるに、今はかこつける言葉も無く、あつた次第を語つたが、これをまこととしない。藝六、冷汗に身も

溺るゝばかりで、これをせめてもの救ひの綱と、宥めるつもりで出して見せたかの村雨の太刀は、村雨の奇瑞を示さない。躍起となつて打振り打振る中、刀尖柱に當つて、へし曲つた。宮六、眞赤になつて憤り、「膽太いこの老耄め、一度ならず二度ならず、どこまでわれを弄ばうとするのか」とて、抜き閃かす双の稻妻、あびせかけた一撃に、背を斬られて、墓六四ん匍に這ひまはれば、龜篠また肩尖に一太刀得て血潮の泥に尾をひきつゝ、夫婦はわななくと逃げまどうたが、血に狂へる宮六、五倍二追かつては斬り追かけては斬り、寸断々に斬りさいなんだ。婢、小厮等はおそれをなして深く潜み、殺氣郎にみなぎつた折柄、歸り合せたのは、小厮の額藏、即ち犬川莊助義任である。「無道と雖も、主は主だ。主の讐、復さで置くべきか」と、今や血刀拭うて立上つた宮六を、その場去らせず切り捨てた。五倍二には痛手を負はせ、なほも支へる宮六が若黨兩人を切り伏せた。命からかくに逃れ歸つた五倍二がこしらへごとで誣ひたのに、莊助は云ひ解く由もなく、遂に問注所へ引かれて行つたが、莊助が事は後に記すことにしよう。さて心にかゝるのは、古河に行つた信乃が身の上である。

(八) 二勇士、芳流閣上に闘ふ

栗橋の宿で額藏と袂を分つた犬塚信乃は、その日古河に到着し、執權横堀史在村に就いてしかく、と身の素性來歴を告げ、村雨の寶刀を成氏卿に獻じたいと申述べ、旅宿にあつて命を待つて居たが、やがて謁見の時の用意にと、かの寶刀を引き抜いて刃を檢めたところ、似ても似つかぬなまくら刀であつた。こゝに始めて墓六を水中に救つた時、左母二郎に拘り換へられたのを悟り、遺恨後悔、腸を斷つばかりであつたが、今更如何ともなしがたいので、取敢ず在村にこの由を告げようと身支度してあつた折柄、城中より使者來り、一領の時服を進めて、寶刀を携へて登營せよとの命を傳へた。

さすがの信乃も胸打騒ぎ、先づ衣裳を辭して横堀の邸宅に馳せ行つたが、主は既に登營して居らなかつた。いとこの事に、是非無く使に従つて營中に赴いた。豫め在村に事の次第を告げようとしたが、その際無くて成氏の前に召出された。今は詮無く、しかくの旨陳ずれども、在村これを信じない。「こやつ敵方の間者にちがひない、ひつ捕へよ」とあまたの力士をさしまねいた。信乃は在村がみだりに權を弄んで賞罰を己がまゝにし、人を容るゝの量無きを知つて居るので、こゝにおめく虜とならば遂に彼が手に死なう、脱るゝにしくはないと思ひ定め、亂れかゝる力士等を左右に投げ退け、飛鳥の如く身を働かして、ちかくへよせつけず、庭に飛び降り、松の梢によちのぼり、さて脱れ出づべきところがあるかと思渡すに、頭の上に檐をつらねて、要害の物見とおぼしい三層の芳流閣と云へる樓閣がある。進退きはまつた信乃、これ屈竟とよちのぼつた。

登つて見ると、城溝ははてもない大河で流を閣の下に引き、水際に快船をつないだ。これは俗に坂東太郎と唱へて、八州第一の大河である。その下流は葛飾なる行徳の浦曲から、海にそゞう咽喉をなしてゐる。更に後の方を見かへると、こゝの廣庭、彼處の城戸に數百の士卒屯して、射て落さむと弓杖を樹てた。今は脱るゝ方もない。よき敵あらば、登り來よ。組みて討死しよう、夢をふまへて突

立つたのである。成氏ははげしき短氣の大將であるが、「疾く捕へよ」と地だんだ踏んで焦立つた。が人々皆信乃が勢ひにおそれをなし、われむかはうと云ふものも無い。

執權在村、ふと思ひついて、獄中にある犬飼見八信道こそその人であらうと言上した。月來、罪を得て獄中にあつた見八、引出されて、この大役を承つた。見八は、天下にその名を轟かした故人二階松山城介が武藝を許された高弟で、就中捕物拳法は藩中雙びない勇士である。古河の政道明かてなく執權横堀が威を擅にするのを苦々しい事に思ひ、強ひて身の暇を乞うたので、在村の憎みを受け、禁獄せられてあつたが、我が縛の索解けて人にかゝる捕手の役、他の難儀を身の面目にかへて、今更用ゐられむ事願はしくないと思つたが、辭して許されさうもない。君命重く、いや高いかの樓閣は三層である。その二層なる檐の上迄身をかすませて登つて見ると、足下遠く雲近く、照る日はげしく薨を燦いて、波立ちつゞく焰を蹴たて、進む勢ひはさながら虎の翼があるやうである。好き敵來れと信乃、血刀を袴の稜におし拭ひ、高瀬の如き方檣にすつくと立てるのを、「御説だ」と呼びかけて、見八十手を閃かして打つてかゝつた。いづれも萬夫不當の勇士で、共に武藝の達人である。

勾配急なる高閣の屋根をも平地となして、とびちがひ馳せちがひ、てりかゞやく六月の日の中に、宙に浮んで祕術を盡くした、まことに一期の晴業である。かくて兩人半餉ばかり少しもひるまず戦つたが、信乃が疊みかけて撃つ太刀を見八受け流し、かへす十手に眉間をやつと打込むのを、知つたりと受け止めれば、鏝よりほきつと折れて飛んだ。見八得たりと無手と組むのを、信乃引つけて利腕と

り、振倒さうと曳聲合して、しばし揉み合つてゐたが、踏みすべらして、あなやと見る間に、組み合つたまゝころ／＼と轉びて、遙かな眼の下なる大河の中にまつさか様に落ち込んだ。片唾を呑んで酔へるが如く、我を忘れて見入つてゐた成氏・在村、士卒等に至るまで、こゝに俄に騒ぎ立ち、先づ閣内に進み入つて窓より見降すに、水面には何の仔細も無いのみか、日頃漁獵の爲めにとて外面に繋がせ置いた一艘の快船の影も見えないので、さては信乃奴、なほ死なずして逃げ失せたか、捨て置き難いと、水門押し開き、船を出して後を追はしめたが、數里の間には影も見えない。戦國の今日、みだりに兵を他領に入れがたく、追手はその儘に見合せ、別に物頭新織帆太夫敦光を捕手の將とし、夥兵數十名をひきゐて、河下の要地々々を搜索せしめることゝした。

三、四犬士の集合離散

(一) 利根河畔の一犬士

こゝに又下總國行徳なる入江橋の橋詰に旅舎を渡世とする古那屋文五兵衛といふ老人がある。妻は近く身まかり、子どもは唯二人ある。長男は小文吾とて今年二十歳で身長五尺九寸、膂力人にすぐれて武藝を好み、手練名のある武士に劣らない。次は女子で沼蘭といひ今年十九歳、先頃市川の山林房八郎

といへる舟長に嫁いで、大八といふ男兒を設けた。時に文明十年六月二十一日、牛頭天王の祭とて町人浦人の遊び囃す賑ひを外に、文五兵衛は日頃好める釣魚に獨りしづかに耽つてゐた。夏を忘るゝ浦風に、蘆の葉がそよいで夕陽の影をみだすまで、綸を收めずにあつたが、下晡に近い退潮に怪しい放舟たゞよひ來り、澤木にせかれて此方に流れ寄るのを、眉をひそめて見ると、舟の中には二人の武士があり、共に倒れて死んでゐるやうだ。驚き怪しんでつくづく視ると、その一人は茶褐色の麻衣に、縹色の麻袴の股立取つて頭髮を振り亂し、左の肘と右の股とに薄傷を負ひ、目を閉ぢ、齒をくひしばつてゐた。他の一人は細鎌の着込腹巻して籠手臙當を着けたが、左の肩先に淺傷一個所があり、月代の跡長く延び、元結ちぎれて鬢の毛が亂れて顔にかゝつたが、右の頬先に牡丹に似た痣隠れがたく、これは見知つたかの人ではないかと思ひあたるふしがあり、舟に入つて介抱したが、どうしても息吹返さないで、急いで家に歸つて藥を取つて來ようと立上つた時、心慌て、他の一方の素肌の武士の脇腹を強く蹴着けたところ、自然に死活の法に叶つたのであらう、うんと聲して身を起した。文五兵衛即ち我名を名乗つて事の次第を告げ、その頬先に痣のある人は、古河の御所の走卒犬飼見兵衛が一子見入信道なる由を語る。蘇生した武士は即ち犬塚信乃、見入と引組んだまゝ屋根の上から落ちたが、下につながれた舟これを受け、綱手を切つて矢の如く流れを下り、氣絶せる間にこゝには流れついたのである。信乃は事の由しかん／＼と文五兵衛に語り、更に語を進めて、「さらばこの人は正しく、我が遺託を受けて尋ねる糠助が子であらう。この人を死なしてひとり生きるのは心憂い。どのやうにも仕置

せられたい」と云ふ。その潔い言葉に、文五兵衛ほと／＼感じ入り、なほ、見入が貫子なる事、伴小文吾と乳を分つたよしみがあつた、義兄弟の情互に深い事など語るのをきいて糠助が子である事紛れもないので、「私は生きてゐる身でない」とて、信乃は腹かき切らうとしたが、死んだと思つた見入、この時がばと刎ね起きて、「早まられるな」と呼びとどめるのであつた。

先程夢の覺むるが如く、自然に我に還り、兩人が物語を聞いてゐたが、正しく信乃が推測どほり、糠助の子に相違ないことを知つて、「懐しい實の親のことを、なほ聞き度い」といふのである。思ひがけぬ蘇生に、信乃も文五兵衛も愁眉を開いた。さて信乃は、大塚に於ける糠助の生活から、臨終の有様、末期の遺言まで詳しく物語り、「かの感得の玉はなほあらうか」と問へば、見入、肌に着けた守薬から取出して示した。信乃が所持する玉と寸分たがはず、現はれた文字は信の字である。信乃も玉と共に左の腕の痣を示し、玉と痣とを互ひに較べて、こゝに兄弟の義を結んだ。信乃はなほ外に犬川莊助といへる同じ因縁の若者のあることを告げたが、この時、默然として感慨深く、兩人の物語に聴き入つてゐた文五兵衛、はじめて口を開いて、「伴小文吾にも亦感得の玉がある。食初めの祝の腕の中から轉び出たものであるが、同じ形、同じ色、たゞ文字は悌の字である。これをもて悌順の名を與へたが、生れ得て力つよく、八歳の時十五歳なる友を投げ、自分も後に亡つた時、臂を石にうつて得た痣が、不思議にも同じく牡丹の形を成してゐる。これはまだ見入殿にも話さなかつたが、お二人と符節を合はす二つの奇瑞に、さては我子もお二人と同盟の縁があつたのか」といふ。信乃、見入聞いて、

斜めならず喜んだ。

信乃はなほ文五兵衛に向つて、小文吾の事を問ふに、文五兵衛も更に話を進めて、その身は神餘光弘が臣那古七郎由武の弟であること、かの朴平、無垢三の二人が過つて光弘を害した時、七郎は卽座に無垢三を討取り、朴平が手に斃れたこと、自分は年少で多病であつたから。母の古里なるこの行徳に留まり、旅舎を渡世として来たことなどを語り、「町人の群には入つたけれど、武士の血は伴小文吾に傳つたものか、小文吾は誰教へないが武藝に達し、勇名近郷に隠れ無かつた。曩にこの里に柳權犬太と云へる悪漢があつて、暴威をふるひ良民を苦しめたけれど、領主千葉殿の勢ひ衰へ、これを制することが出来ず、ます／＼非道のふるまひに及んだ。小文吾時に十六歳、憤然として彼が許に赴き、あんなに虎狼の如く怖れられた犬太を、狗兒よりもたやすく蹴殺して人々の患をのぞいたのである。

これから人が犬田の小文吾と呼んだのは、犬太の太を田に呼びかへたからであらう。又、近頃鎌倉に大先達念玉・修験道觀得といふ二人の山伏があつて孰れも我慢の悪僧で、先達職の所得を争ひ、官府もこれを決し兼ねたところから、兩人談合の上、昔、惟喬・惟仁兩皇子天位を争ひ給うた時、相撲の勝負で定められた例に依り各自力士を選び、相闘はす事となつた時、小文吾は念玉に頼まれ、市川の里人で小文吾が妹沼蘭が夫なる山林房八は觀得に頼まれた。房八は小文吾より二歳上で二十二歳、身丈五尺八寸で、剛力近國に隠れなく、その面影、失禮ながらこれなる犬塚殿に似通つた優美の若者である。かくて本月十八日より八幡の社頭で相撲があつたが、何れ劣らず採み合ふ事半餉ばかり、終に小文吾の勝となり、所得の争ひも念玉のものとなつて、小文吾の勇名、房八の上に昇つたので、兩人の仲悪くなつた」などと、文五兵衛は我を忘れて息子の自慢話に耽つてゐる折しも、おぼろな夕靄の中から、水際の蘆を掻分けて半身を顯せる者がある。「汝等なんでこんなに膽太いのか、こゝは千葉家の領分で、古河の御所と遠くもないのに、訴へられたら祟があらう、身の危いのを知らないのか」と呼びかけるのである。何者だと三人ひとしく身構へした。

やがてつか／＼と進みよつた男の顔を片明りにすかし見た文五兵衛、「何といふばか者か。まつりの神酒にでも酔つたのか」と罵りながら見ると、今噂した犬田小文吾である。「父の歸りの遅いので、迎へに来て、はしなくも三人の話を立聴きして事の次第がわかり、先づ家に歸つて奴婢を祭禮に出しやり、再びこゝに立歸つたが、我が事を語る父が自慢話の片腹痛く、且つは、かゝる場所での高話は、他聞のおそれがあると思ひ、無禮ではあるが、狂言めかして呼びかけた」と、小文吾は事のわけを話し、用意し來つた兩人の衣服、刀、傷の膏藥まで取り添へて差出した、こまかい心づかひに、二人は大に喜び、手早く着換へて、先づ文五兵衛と打連れて古那屋に赴いた。残つた小文吾は、二人の脱ぎ捨てた血染の衣裳を風呂敷につゝんで背負ひ、河中に進み入つてかの舟を中流に突き放ち、さて立去らうとする折しも、後から刀の鏢を押へて引止めた曲者がある。小文吾は突き倒して急ぎ歸つたが、この曲者は、小文吾が風呂敷包からこぼれ落ちたる麻衣を拾ひ上げて合點しながら、蘆のしげみに消え失せた。

(二) 小文吾と房八

さて、信乃、見八の兩人は文五兵衛に伴はれてその家に到つたが、奴婢は皆居らない、唯一人の泊り客の大先達念玉坊も祭り見に出て行つたので、心を措くべき者無く、別室に呼ばれて、文五兵衛が手づからのもてなしに夕餉の箸をとつたが、やがて小文吾も歸つて来て、物語の花が咲きつゝいた。小文吾はかの感得の玉を示し、信乃、見八のそれと引較べて少しも違はぬのに感嘆し更に父の言ふがまゝに、「無禮をお宥し下さい」とて、衣脱ぎ捨て、素裸となつた。六尺に餘る大男の筋骨あくまで逞しいが、色白くして雪を欺くばかりであるのに、臀のほとりの牡丹花の痣、一しほ鮮かに見える。そこで三人即座に義を結び、見八はその前生涯を葬るといつて、名を現八郎と改め、かの額藏の噂などして共に思慕のおもひを寄せた。然るにその夜子の刻ごろに、戸を叩く者がある。「神輿洗ひの歸るさ、濱邊で行徳人と市川人との鬭争があつて、その中には小文吾が相撲の弟子も房八が弟子も少なくなつてゐるが、双方多くの怪我をさへ出し、和解六かしくなつた。關取早くいつて何とか扱うて下され」といふ。小文吾舌打しながらも、平常男と立てらるゝ身の、拒むべきでないが無禮を謝して出て行つた。そのとき、文五兵衛は紙燃で彼が刀を封じ、血氣にはやつて、刀は抜くやうなことがあつてはならぬと警めた。

さて、夜も更けたので、あとに残れる三人は打臥したが、その時から信乃が手傷、破傷風の悪症に變つて苦惱おびたゞしいので、現八・文五兵衛、いたく心を碎いた。若い男女の血各々五合を混ぜて之に澱げば直に癒えるといふ古那屋家傳の方はあるが、血を得る事たやすく叶ふべきでない。現八は、武藏なる芝浦に破傷風の妙薬あるよしの聞覚えを辿つて、「さらば一走り求めて来よう」と出て行つた。あとで文五兵衛、信乃が苦惱をいたはりながら、小文吾の未だ歸らぬのを待ち侘びてあつたが、店先に聲があつて、「古那屋の檀那はおうちか、莊屋殿からの火急の御用、疾くく」といふ。折悪しとは思つたがいなむことも出来ず、病人を残し置くのを心許なく思ひながら、暫くの間と立出でた。さる程に小文吾は、鬭争の仔細をたゞし、市川なる山林房八の許に和睦の使を遣はしたが、房八は不在で要領を得ない。しばらく預ることゝして、怪我人の始末などに翌日の晩方まで心忙しい時を費したが、お客達の待たれることだらうと、やうやく家路に足を向けた。斯くて栞崎の松並木に來かゝつた時、「小文吾待て」と後より呼びかくる者があるので、きつと振り返ると、山林房八である。越後縮の麻衣に燃えるばかりの緋縮緬の犢鼻褌の前巾を透かさせ、銀の銃輪した一刀を鑑さがりにさして、白手拭の鉢巻、朱の緒の下駄、伊達の扮装したが、色白くして骨柄いやしくない、信乃が面影に似て亦一個の美丈夫である。「これは市川の兄貴であつたか、いたくお待ちしてゐた」と小文吾が昨夜の喧嘩のいきさつを語るを、云はせも果てず冷笑ひ、「その事よ、汝が裁き、はなはだ片手落だ。この房八が一分、どうして立てゝ呉れるのか」と持ちかけた難題、「この間の相撲に負けて、おれの男はすたつた。再び土俵に立つまいと、これ見よ、月代も剃つてしまつた。そのよわみにつけこんで今度の確

執、どこまで踏付けにすることか。忌々しいわい」と喰つてかゝつたが、小文吾とりあはず、言葉優しくなだめたが、房八なか／＼いきまき止まない、袂を捕へて、「おい／＼、おれの一分どうして立て、呉れるのか」としつこく迫るのを、小文吾もて餘し、「然らばどうすれば宜いのか」といふ。「どうすればとは愚か、かうしてくれる」と刃をきらりと抜きかゝるを、「氣でも狂つたのか。酔の餘りか。無分別な亂暴はよしてくれ」とおしとよめる。房八、慙々いきり立ち、「さては逃げるのか、意氣地の無い男だな、長き刀を光らしても、まさかの時には抜くこともできず、見れば紙燃で封じてあるな。そんなに刀が怖ろしくば、俱に拳の碎くる迄撲ち合うて勝負を決しよう」と、肩おしぬき足踏みならず。小文吾流石に腹立つたが、親の戒め、紙燃の封、どんなことでも抜くまいと手をくみ、頭を低れて見かへらない。房八つく／＼見てから／＼と打笑ひ、「いよく卑怯者とわかつたぞ、男ふりは大きうても葉月の橙、見かけばかりで中味のまづい奴、人並に拳で打つは拳のけがれた、それ」と云ひざま、足をとばして小文吾を尻居に蹴すゑ、土足を肩に踏みかけた。小文吾勃然として憤り、見あぐる面色朱をそゝいだが、こゝぞと胸をしむる親のいましめ、紙燃はどんなことがあつても斷るまいと、無念の涙を汗にまぎらし、鬢の毛亂し、顔を背けてひざまづいてゐた。たま／＼樹影より立出でたかの修験者の觀得、満面に笑みながら、扇を颯とおしひらいて、房八を縦にあふぎ横にあふぎで背をなで、「でかした。心地よい。これで此間の相撲の恥も雪いだ」とほめそやす。房八會心の笑を漏らし、「これでこの場は許してやる。しかし云ふべき事は未だ多い。それは今夜行つて云ふからさう思へ」と、修験者もろとも立去つた。小文吾襟を拂うて立上り、「いつもに似ぬ房八の振舞、相撲の恨をかうまでに思つてるのか」と嘆息しつゝ、再び歩を急がすところへ、藁塚のほとりから、捕手の兵八九人、ばらばらと走り出で、のがすまいととり圍んだ。小文吾は驚きながら、赤く花咲いた百日紅を小楯に取り、「こは何事ぞ、人違ひなさるな」といふ。

その時物蔭より現れ出でた一人の武士、土地の莊屋千軒檀内を先に立て、文五兵衛に繩打つて夥子等に引かせつゝ、「これ小文吾、我は古河殿の御内人新織帆太夫敦光である。曲者犬塚信乃を汝が方にかくまふと知り、汝が親文五兵衛を召出して訊ねたところ、その答が甚だ胡亂なので、家捜しするため引いて行くのだ。たま／＼汝に逢つたのは幸だ。親の繩目を救はうと思はゞ、汝疾く／＼先に立つて行き、信乃を搦め取つてまゐれ」と、退引させぬ權柄づくに、小文吾ほと／＼當惑したが、心利いた若者なので、少しも騒がず、「仰せ承りました。しかし某は、昨日の祇園會から濱邊に遊んでずつと宿所にゐないので、事の仔細更にわきまへ申さず。まことに信乃とやらんが居つたら、搦めてまゐるに、何の否應を申さう。されど、かの曲者は、天晴の豪の者であらう。かく多數でとり圍まば、却つて捕逃す事ともならう。三十六計だますに若かず、おん手勢を遠ざけて先づ某にお任せなさらば、巧言もて油斷させ、寢首を搔いてたてまつらう。この義いかゞ」とこしらへいふに、帆太夫、成程と合點し、「さらば汝に任せよう。その曲者の骨法圖はこれだ」とて、一枚の人相書を小文吾に與へ、「よくやれ、見事曲者の首とつて上らば汝の父を許してやる」とて、文五兵衛をひき立て、夥兵どもを後方に、權柄

の肩いからしつゝ立去つた。

小文吾、とぼ／＼と引かれゆく親のうしろ影を、涙に曇る眼で見送り、友と父と孝と義と、いづれをいつれと思案にあまる吐息ついて家にかへれば、現八は在らず、信乃は傷處のなやみに喘ぎつゝあつた。介抱に心をつくすほどに、行燈に灯の入るころとなつた。折から、逗留の客なるかの大先達念玉坊、「昨夜は鹽濱のいさかひを見物して夜を明かし、なほ濱邊の涼しい松の蔭で晝寝して、十分に町で飲食して歸つた」とて、買ひ取つて來た大法螺貝を携へ、上々の機嫌で歸つて來る。

小文吾は求めらるゝまゝに、有合ふ尺八を貸して、念玉を別室に呼び入れ、さてまた思案の腕こまぬいて、心を千々に碎いて在つたが、ふと氣づいて掻いさぐる懷に、かの帆太夫から受取つた信乃が骨法圖の無いのは、どこかへ取落したのであらうと、あたりに立廻つて探してゐる時、「關取居るか」とわめきながら、どか／＼と入り來れるものがある。うるさい事だ何人かと思れば、鹽濱鹹四郎・板抜均太・牛根猛六などと呼ぶるゝ、土地に名うてなあばれもので、小文吾が相撲の弟子である。「何の用か」と問ふと、かの栗崎で小文吾が房八に足蹴にされた一條を聞き知り、土地の名折、己等が恥ぞと、おろかにもいきまき立ち、師弟の縁を絶たうとやつて來たのである。「相手はまさしく妹婿、借財でもあるのかおめ／＼と、踏まれて花の咲くものは路ばたのひるがほばかりだ。あれほどにはづかしめられながら手も足も出ぬ藥罐のゆで章魚、まつかになつて恥知らずめ」などと、口々にだみ聲揚げて云ひ罵りつゝ、絶縁の證據に痛い目見せようと打つてかゝる。小文吾、「あゝやかましい、面倒だ」と、

代る／＼手玉にとつて、框の外に投げ出し、門の戸はたと引寄せて、果てしない思案にくれてゐると、夜はいつか更け渡つて行燈の火が幽かにまた／＼く。折柄いよ／＼吹き澄ました念玉が尺八の音、一高一低のしらべに、そゞろ哀情を動かすのである。小文吾きいて、さすがにたけき心も崩れるばかりであつたが、思ひは同じ別室の病める信乃、かの尺八の音のものがなしさに、胸を斷る心のいたみ身のいたみ、堪へがたいものがあつた。

(三) 房八、義に死す

笛の調と共にます／＼牙え渡る五更の月の影を踏みながら、一挺の輜をあとにして訪ひ來る女がある。四十ぐらゐの年頃であるが、髪を短くした尼姿で、「文五兵衛殿はおうちか」と云ひつゝ入り來れるのを見ると、房八の母の妙眞である。「これは母上、この夜更けにどうして」とあやしむ小文吾を驚かして、輜より下り立ち續いて入り來れるは妹の沼蘭である。縮羅の單衣に緋の繻紵、はでには装つても、さすがにふけた女房風を見せ、泣く子をすかしつゝ禮する様も力無く、下ぐる頭から落ちる簪、とりあぐる手もふるへるのに、小文吾、安からず仔細を問へば、妙眞も打萎れて、「房八は御身を恨むこと深く、飽くまで桶つく料簡から、母の戒め、妻のなげきも顧みず、沼蘭を離別に及んだ。仲人ははや死んで話す人もないので、是非なく、詫を兼ね、嫁を送つて來ました」といふ。小文吾も今はすつかり困つてしまつて、父の不在にかこつけ、兎に角今宵は無理にも妙眞と共に沼蘭を市川に返さう



と、言葉を盡した末、「離縁状が無いので、受けひきがたい」とはねつける。さらばとて妙眞が懐から取出したのを、よく見ると先刻失つた信乃の姿繪である。これはとおどろくのを、妙眞はさうであらうとほゝゑんで、「その犬塚信乃とやらんをかくまふ者があらば、親類縁者まで罪するといふ上よりのきつい嚴命、女房を去る房八をのみ無理とは云ひがたからう。三行半にまさる姿繪の離縁状、かくても受けひかれませぬのか」と詰めよられて、小文吾返す言葉も無く、「さういふことでしたら一先づ預ることにはませう」といふに、妙眞、涙止めあへず、「むごたらしいと思つては下さるな、沼蘭は狭い心から病み煩ひなどせぬように、大八にも風ひかしてくれませぬ」など、心をあとに残して、泣く／＼歸つてゆくのである。あとに、小文吾はたゞ目を閉ぢ、腕をくんで、悵然とした。沼蘭は正體もなく伏し沈んで、たゞすゝり上げるのである。

夜は更けた。折からつか／＼入り来る者がある。誰かと思れば房八である。「何で来たのか」と云へば、「何しにとはなんだ、沼蘭を返した上は、あかの他人だ。此間からのこと、他人になつて云ふ事がある」と、先づ性急の悪罵をあびせ、向臈投げ出して高あぐらし、血を吹くばかりの眼にぐつと睨んだ。小文吾は首を低れてたゞ黙してゐると、房八圖に乗つて、「これ見識つてるか、とくと見よ」と鼻先に突附けるのは、かの夜小文吾が蘆原で曲者と挑み合つた時、風呂敷包の中から取落した血染の麻衣である。「や、や、さては汝であつたのか」と小文吾さすがにうろたへるのを、房八更に嘲笑ひ、「信乃とやらんを疾く出せ。出さなければ踏入つて討とるからさう思へ」と、太刀に手をかけて詰めよるの

である。小文吾、「大事を知られた上は是非に及ばぬ」とかける刀の柄、立たば撃たむと握りつめたる指の汗に、目釘も濕るばかりである。沼蘭は心も心ならず、いきり立つ房八に取纏つて、押しとどめるを房八、「邪魔立無用」と叫びながら、つと立たうとして蹴る爪先狂つて、大八が腋腹にあたり、一聲、立てたまゝ息は絶えた。房八ものともせず、信乃は正しくあの小座敷にと躍り入るを、小文吾立ちふさがり、拳するどく丁とうつ、刃を鏝で受け留めれば、紙撚は遂に斷れたのである。今はこれまでと抜き合せ、太刀風するどく打合ふ中に、沼蘭は身を轉ばして押隔て、「いづれも短慮なこと、しばらくお待ちなされ」と止めるのを、房八苛つて、「さまたげするな」と蹴倒せば、筈は、つしと折れ飛んで鬢ちぎれ、亂れ髪となつた。沼蘭は、必死と房八の足を抱けば踏み返されて、頂の上にきらめく刃、房八が手元狂つて沼蘭が乳の下を切つた。灸所の深痕にしばしも得たはず、あつと叫んで倒れた。これとは驚く敵の隙を、得たりと進む小文吾がきらめかした白刃の電、房八は右の肩先を研りさかれ、後ろにどろりと倒れるのを、小文吾すかさず撃たうとする時、房八聲をふり絞つて、「小文吾待て、云ふ事がある」と支へた。小文吾は血刀を取直し、片膝突いてきつとにらまへ、「この期に及んで云ふ事があるとは何んだ。疾く云へ、聞かう」となじりよる。

房八苦しき息をつぎ、「今迄の無禮をゆるして下され、皆本心からではない。御身に撃たれて、我が本望は達した」といふ。小文吾不審に堪へず、仔細を問ふと、房八は血潮の中にあへぎながら長物語する。それは安房の神餘が昔にさかのぼる。神餘家の姦臣山下柵左衛門定包を除かうとして、却つて

彼の術中に陥り、領主神餘光弘を射殺した柚木朴平は、房八が父の父である。朴平はその際、光弘の近臣那古七郎をも切り伏せ、終に生擒られて刑戮せられたが、朴平の子の房八の父は、少年の頃より房八に教訓し、あつばれ俠名を轟かし、祖父の汚名を雪げよとはげました。房八は柚木の二字を組み變へて山林と名乗り、父の教を身にしめて、男をみがくに餘念なかつたが、縁あつて妻を迎へ、子まで成した沼蘭の父文五兵衛は、那古七郎の弟とわかつたので、その悪因縁を悲しみながらも、文五兵衛、小文吾親子のためには、難あらば命にも代らうと覺悟した折柄、昨夜はからず、かの蘆原で舟の中なる信乃、文五兵衛の物語を聞いてふかく感に打たれ、痣と玉とを有たぬ身は、口惜しくもかの同盟には加はりがたかつたが、容貌の信乃に似たのは天の與へ、かのすぐれた人の命に代り、小文吾父子にふりかゝる難儀を救はうと、この時思ひ定めたのである。かくて、人々の立去つた後、おかれて歸る小文吾に志を語らうとし、咄嗟に言葉もなく引止めたのに、蘆のそよぎにすら心おかるゝ場合とて、小文吾早まつて曲者と誤り、振り拂つて逃げ去つたが、あとに落ち散つた血染の麻衣、他に拾はれなかつたのは、もつけの幸であつた。さてつらくと思ふに、なまじ本心を語らば、義を重んずる小文吾父子も同意しまい。むしろ相撲の勝負より兩人不和の傾きあらうなどといふ世評に乘じ、喧嘩を賣つて、小文吾の手に討たれようと、かの栗崎の一條に及んだ苦肉の計、それもあくまで忍ぶ小文吾が大勇に裏搔かれたので、義を知る母妙眞と打合せ、涙を吞んで飽きも飽かれもせぬ妻を去り、あの姿繪でおびやかし、あくまで小文吾を怒らして、今夜必ず首討たれ、信乃の身代りつとめようとこの始末、相撲に負けたから、生涯土俵を踏むまいといふしるしにはほんの口實、月代を剃つたのは、信乃と紛らはせようとしたのだといふ。さうであつたかと今更に、犇々とうなづかるゝ房八の一言一句に、小文吾はたゞ涙であつた。

しばらくあつて小文吾ふと心づき、沼蘭が刃を犯して身を殺したのも決して徒死でない、壯い男女の血各々五合を合はして用ふるがよいといふ家に傳はる破傷風の奇方、犬塚氏の傷の惱みは、忽ちに救はれようとて、かの念玉坊が置き忘れて傍にあつた法螺貝をとり、迸しりやまぬ二人の鮮血を受け、早く信乃の身にそゝがむと、障子を慌だしく引き開けて小座敷に入つたところ、物に躓き倒れむとして、手に持つた法螺貝を取落した。南無三と叫ぶ小文吾が聲の下に、あつと叫ぶ聲がした。驚いて見ると、いつの間にか障子際まで這ひ出して居た犬塚信乃は、全身唐紅の血潮を浴びて息絶えた。小文吾いよゝ／＼驚きあわてゝ、さまざまに介抱するほどに、信乃は睡りの覺めるやうに、身をふるはして目を開き、ほつと息して起き直つた。傷は見る／＼癒えて、面色俄に鮮かに、奇方の効驗、忽ち目前に現れた。信乃は進み寄つて、「太刀音を聞いてから、心元無いので蹇り出たが、障子の際で力盡き、房八が並び無い俠骨義膽のわけを臥しながら聞いて、感涙に咽んだが、こんな人々の血を自分の惱めるところにそゝがれるのは餘りに勿體なく、辭退しようと思つてゐたところ、小文吾に躓かれて、かくの次第」と語るを聞いて、小文吾始めて胸撫で下ろした。沼蘭は蟲の息ながらに、先程より夫の本心を語るを聞き、疑ひ晴れて、死ぬのを嬉しいとおもつてゐたが、折柄、轉び入つた姑の妙眞、「これ

お沼蘭、かねて事情を告げなかつたのを心強いと恨むであらう、若い身の、かくなりはてる運命を思へばまことにつらいことである。それに大八迄も、かう情なくなつたものか。わこよ、祖母でありますぞ」と、噎せかへつては老の涙にくれたのである。信乃、小文吾、共に斷腸のおもひがある。

信乃は房八が傍に寄り、改めてわが名を名乗つて、感謝の涙とまららないので房八は満足この上無く「犬田殿、早くわが首を討つて帆太夫に渡し、犬塚殿を落して下され」と、深手に屈せず頭を擡ぐる大剛さ。二人もほと／＼感じ入つたが、一方心にかゝるのは、かの大先達念玉のことである。若し今宵の一伍一什を聞き知り、訴へ出もしたら、房八、沼蘭が義烈の最期も、空しく徒死となるであらう。別室の様子をさぐつて、胡亂と見たら斬り捨てようと、二人ひとしく身を起す時、障子の彼方に聲あつて、「人々しばらく待て、安房の國守里見治部大輔義實朝臣創業の功臣金碗八郎孝吉が一子金碗大輔孝徳法師、大坊、又同藩の士で故伏姫君の傳だつた蜷崎十郎照武が長子蜷崎十一郎照文等、こゝにある。今對面して疑念を解かう」と呼びかけて、障子をさつと押開き、並立つて近づくのを見れば、これ別人ならず、大先達念玉坊と修験者觀得である。

念玉は旅に實れた墨染の麻の衣を袂端折り、背に頭陀袋を負ひ、左手に網代笠、右手に錫杖をとつて上座に着いたが、これは、大和尚である。觀得は四方髪なのを元結で結上げ、段々筋の麻衣に精好の野袴、朱鞘の兩刀を横へたが、これは十一郎輝文である。「皆々訝しく思つて下さるな。初から實を告げなかつたのは、思ふ仔細があつたからだ」とて、大の語り出づるのを聞くと、大は仁義禮智

忠信孝悌八顆の靈玉の行方を探るため行脚に出でたが、十一郎輝文が君命によつて賢良勇武の浪人を募るべく關東諸國を忍び歩くに出會ひ、共に犬田・山林兩人の勇力を耳にし、兩人の力量及び人と爲りを試し、眞の勇士ならば、君侯に推舉せむと、山伏に姿をやつして所得の争ひにかこつけて相撲を取らせ、優り劣りのない力と技とを確かめたのである。なほ兩人の性行を見定めようとして、遊山にかこつけ逗留したところ、はからずも、犬田・山林の俠骨義膽から、犬塚・犬飼の素性來歴、及び犬川莊助の身の上の事まで聞きとり、こゝに入顆の靈玉の中の四顆の行方を知つたのである。「唯房八夫婦が非業の死は、世にも哀しいことである」とて和尚も、眼をしばたゝいた。更に、大は伏姫上の事、八房の犬の事、役行者から賜つた珠數の事など、八人の犬士の因縁を残り無く語つて、かの八顆の巨玉の失せた珠數を取出して示したので、信乃・小文吾は己等が玉と痣との由來を知つて、一方ならず感謝し、始めて身の宿命を自覺し得たのである。

(四) 大八蘇生す

大が事こまかに語る話は、臨終の際の房八が耳にも入り、果報拙なく犬士の一人となりえざるを憾むを、大慰めて「そんなに残念がられるな、そなたは犬士でないが、犬士に劣らぬその義烈さは感嘆に堪へない。われはそなたが祖父朴木朴平が主であり、武藝の師であつた金碗八郎が一子である。許され難い朴平の過失、今そなたによつて償はれたのを知り、われ、父に代つてそなたが祖父の罪を許

さう。これを冥途の土産として佛果を得るように」と諭したので、房八きつと見上げ、左手をあげて、大を拜んだ。大その時、大八が亡骸を見て、「死んで時経たこの兒の血色生けるやうなのはいぶかしいことである」とて、抱き上げて脈を見ようとすると、大八忽ち蘇つて、わつと泣くと共に、生れながらに握り詰めた左の拳はじめて開き、一顆の珠現はれ出た。その珠、信乃、小文吾のと異ならない、文字は仁と記された。そればかりかかの房八に蹴られた腋腹に、牡丹の形した痣さへ出て來たのを見た一同は、等しくこの奇特に驚嘆したが、殊に妙眞は飛び立つばかりに喜んで、手負の耳に口を寄せ、「房八も、お沼蘭もこれを見よ、大八は蘇生したぞや。」と稚兒を引き寄せ見せて奇特を語れば、夫婦は苦しき息ながら、互ひに笑顔を見合せたが、沼蘭は遂に息絶えた。大八が生れながらに、右の掌を開かなかつたのは、この靈玉を握つてゐたからであつた。眞平といふ實の名はあつたが、片輪車の大八と人々譚名し、唯大八とのみ呼びならはしてゐたのである。「山林は房八が自ら選んだ苗字で我家の氏は大江、屋號を大江屋と呼ぶも、今思ふと不思議の因縁である」など、妙眞の語るのをきいて、大も頻りに合點してゐたが、「房八は身を殺して仁を成す、すなはち仁字の玉を得た。今眞平は親に代つて犬士の群に入る者なので、眞の字を、おやと訓む親の字に變へ、大江親兵衛仁と名乗るよう」と言ふ。

、大なほ語を次いで、「房八を轉倒すれば、彼の犬の八房となる。沼蘭は即ちいぬである、妙眞の俗名戸山といふのは、伏姫のかくれた富山にも通うてゐる」など、因果を詳かに説き示すので、小文吾も膝を押しすゝめ、「沼蘭が二歳の時、父文五兵衛は入江に網打ち、怪しい光り物を引掛けたと覺えたが、その盛光が消えたので、何でもなかつたのだと思ひ歸つた。然るに翌る日網を干さうとし開いたところ、中から、さら／＼と音して轉び落ちた、その方へ這ひ寄つた沼蘭、つまんで口に入れたのを、これはと驚く隙に呑み下した。今思ふと、それがこの玉であつたのだ」と語るに、人々皆耳をすまして、こも／＼感嘆するのであつた。この時、信乃は房八に向つて、「あなた方御夫婦の血に染められた衣は、長く子孫に傳へて家の寶となさう。又、他日親兵衛殿が世に立たん時は身に換へても助け護り、必ずこの御恩に報いるであらう」と誓へば、房八は喜ぶこと限り無く、「我が願全く足る」とて、小文吾の介錯に、潔く首うたれた。妙眞は兼ての覺悟ながら、今更に新たな涙を覺えるのである。頭はない幼兒の「母さまはどうして起きられぬか、父さまも」など片言交りに言ふのを聽いては、人々、皆斷腸のおもひして、一座打ち濕つて見えたところに、家の外俄かに物騒がしく、投げられる音、叫ぶ聲、檐端近く聞えるので、皆ひとしく驚き立つた中に、小文吾逸早く、飛び出て潜戸を開けると、どりと投げ込む人礫、框に頭を撲たして、うんと息絶え死んだ。何者と見ると、これは宵の程亂暴した鹽濱鹹四郎である。これはといふか中、敵を左右に挟んで、つと内に入り來れるのは犬飼現八である。脇にせる牛根猛六、板扱均太をどうと投げ重ね、膝に敷いて動かさない。「破傷風の藥を求めため芝浦に赴いたが、その家は既になく、失望して歸り、入らうとして立ちきく話に、悲しく嬉しく、すべての事情を知つたのである。この三人の曲者も、同じく忍び聞いたのであらう、蝦蟇のごとく庇間より

這ひ出で、この由、訴へようと云ひ合せてゐるので、かくは成敗した」と、事の次第物語るのである。人々、危いことであつた、と胸撫で下しつゝ、現八が洗勇をほめ合つた。

かくて現八は兩人の曲者を拉ぎ殺したが、間者がなほ来るかも知れない、なか／＼油断なりがたい。もう天明にも近からうと、小文吾は房八の首を持つて、帆太夫を欺くために莊屋の許におもむいた。悲喜哀歡の限りを盡して目まぐるしいほどであつた夜はやうやく明けたが、露ふかく罩めて一寸先きも見えないのは天の與へ、露のはれない間にと、房八夫婦が亡骸を葛籠に收め、信乃、現八これをまもつて船に棹し、市川なる大江屋におもむく。小文吾は莊屋のところへ帆太夫に會ひ、偽首で欺きかへし、父、文五兵衛を受取つて歸つたが、文五兵衛はあまりの激しき悲喜の情に、老の疲れ出で、身を動かすのも苦しいといふので、古那に留め置き、待ち合せるた、大和尚と共に、その夕暮市川に赴いた。土地の人には、房八は鎌倉に所用あつて行き、沼藪は行徳の親許にあると告げ、その夜忍びやかに夫婦を葬つたが、あくる朝、信乃は現八と共に、一度故郷の大塚に歸り、かの犬川莊助に逢つて、つれ來らうとするのを、小文吾もこれを送らうとして三人共に出發した。

犬士の由來かくわかつた上は、信乃も古河に干むるを要しない、現八も古河にとどまるべきでない、小文吾と共に安房に赴くべきだが、八犬士のうち、三人が足りないので、大と共にその在所を尋ね、八人袖を連ねて、召に應ぜむとて、先づ莊助を訪はむとするのである。たゞ、親兵衛仁は、未だ幼少で、古河に程遠くないこの地に、たゞ祖母と共に留まるのは危いからと、先づ十一郎輝文に伴はれて

安房に歸るのがよいといふ議に決した。さて、三人出發しようとするのを、輝文は里見殿の賜物だといつて、三十兩づゝ、五包の黄金を取り出し、三包は三士の路用に、一包はまだ見ない莊助へとて與へ、残る一包は房八夫婦が祠堂の料とした。かくて三人の出て行つた後、人々は或は行徳に、或は市川に集つて打濕りつゝ初七日もすごしたが、信乃、現八を送つて行つた小文吾の歸りの遅いのが心もとないので、大法師は、また旅立つた。

然るに、その、大法師さへ、必ずと約した日がすぎても歸らないので、様々に案じた果は若しや行徳の方に便りがあつたのではないかと、照文の行徳に赴いたあとに、折柄亡き夫婦の二七日なので、妙眞は獨り佛間にあつて、木魚の音も四隣を憚りつゝ、打濕つた讀經の聲に、日脚は横に傾いて、背戸の槐に、秋蟬の鳴きしきる頃である。「おふくろ居るか」と濁聲高く訪ひ來たのを誰かと見れば、眼圓に頬高く、半白の髻に包まれた赭顔むさくろしい五十餘りの老人の、古びたかすり木綿の單衣を片端折し、犢鼻褌のみの華々しいのを、これ見よがしにひけらかしたのは、暴風舵九郎とて、有名のおぶれ者である。つか／＼と進みよつて、どつかと毛脛を投げ出し、團扇とりあげて暑し／＼と衣領押しひらいて煽ぐにそよぐ胸毛は熊に似て、月の輪に似るいれぼくろも無頼の面がまへである。「波にもまれ來たのでもなければ、風に吹かれて來たのでもない。少々相談があつて面出した。房八が鎌倉へ行つたとは誠にやあるまい。このおれがあやしと睨んだ過ぐる夜の密葬。鹹四郎・均太・孟六等の俄かに見えなくなつたのも心得ない。この事莊屋に訴へ出れば迷惑であらう。水心あれば魚心とやら、我

を後夫に迎へれば内聞にしようが、さもなければその分にはおかぬぞ」と脅やかした。妙眞、思はぬ難儀に弱り果て、いろ／＼云ひすかしたが、舵九郎承知しない、好色の本性を發揮して手籠にしようと思ひかゝる。折も折、歸り合せた十一郎輝文、引捕へて投げ出したので、舵九郎はふ／＼の體ながら、眼をむき尻をまくつて尾陋の雜言ほざきちらし逃げ去つた。彼、必ず莊屋に訴へ出るにちがひない、今は一時もこゝに止まるべきでない、と、輝文と妙眞と、輝文の伴ひ歸つた文五兵衛と、急に相談を定め、輝文は妙眞と親兵衛とを伴つて、安房に去り、文五兵衛は船路をとつて大塚に赴き、小文吾等はその趣を傳ふことにし、あとには耳遠い老婆たゞ一人のみを留め置き、位牌、舊記、砂金などを取り纏め、依介といふ忠實な下男を一人つれて、もろともに家を出で町はづれの松林に來かゝつた。

ところへ、かの老惡漢暴風舵九郎は、飽迄も妙眞を手に入れようと、多勢のあふれものを語らひて待ち構へ、勢はげしくうつてかゝるのである。輝文止むなく抜き合せせ、文五兵衛又力の限り防ぎ戦つたが、舵九郎、早く妙眞の手から親兵衛を奪ひとつて「云ふ事を聞かねば斯うする」とて、左手に稚兒を押へ着け、右手に石塊をとりあげ、今にも眉間を打たうとするので、妙眞心も心ならず、輝文も文五兵衛もどうしようと切齒をする折しもあれ、一天俄かに掻き曇り、電光閃き、風砂を卷いて狂ふと見る／＼、叢雲渦を描いて舞ひ下り、親兵衛を引き包んで中天に舞ひあがる。遣らないと争ふ舵九郎の身は宙に翻へつたが、はつたと地に抛げられ、あつと叫んで起きも上らない。見れば髻より鳩尾のほとりまで唯一筋に引き裂かれ、血に染まつて死んだのである。なほも競ひかゝるあふれ者共を斬

り散らした。程なく風収まり雲晴れて、五日の月が幽かにかゝつた。

かくて不思議の難は免れたが、親兵衛を失ひて何樂しみに生きようと、妙眞の嘆くのを、輝文は慰め、「親兵衛既に八犬士の一人である。空しく死するわけはあるまい。思ふにこれは伏姫の神靈の爲すところ、親兵衛は必ず無事に歸るであらう」とき、妙眞首肯いて、一旦惡漢どもに打殺されて不思議によみがへつた依介を従者に、照文・妙眞は安房を指して赴き、文五兵衛は船路をとつて大塚に赴くべく袂を分つた。

(五) 三犬士、一犬士を援く

さて、犬塚信乃・犬飼現八及び犬田小文吾の三犬士は、船で武藏豊島なる神宮河原に着いた。信乃はたばかられて寶刀を奪はれた遺恨を更に新にしては、叔母夫婦に逢ふも憂く、かの辨財天の靈地、瀧川の金剛寺に宿借り、その上にて莊助に逢ふべき便りを求めようと、兩士と共に岸にのぼつたところ、俄かに、後から呼びかける者があつて、「御身は大塚なる莊屋の甥御ではありませぬか」といふ。年頃は五十歳餘、六十になつてゐるかも知れない。袴の單衣着て、手に藻薙鎌を携へた。この土地に久しく漁業で生活する稍半と呼ぶ老人である。なほ重ねて、「大塚の凶變は心苦しい事である。かの騒動を外にしてどこへ行つたのですか?」といら立ちてさゝやく。信乃心得ず、「凶變とは何か」と問ふに、「そんなら御承知でならなかつたのですか」とて、先づ兎も角もと三士を我家に招き、陳代の強婚、濱

路の苦節、臺六・龜篠が横死、額藏が即座の仇討、さては濱路を殺した左母二郎が何者にか殺された事など、くはしく説き聞すに、さすが剛氣の信乃も、たゞ胸つぶれるばかりである。あゝ濱路、泣いて別れを歎いたその聲、その姿、今なほ目の前に在るのを、はや果敢なくなつたかと、鑽石の腸、ちぎるるばかりであつたが、それよりもかの額藏はどうしたのかと、言葉忙しく問ひかけた。「その事です」とて稍平はと太息し、急に言葉をつげないのを、「どうしたのか額藏は」と膝をすゝむるに、稍平愁はしいさまして、「まことにいたはしいのはかの小厮の額藏である、相手が威勢ある陣代と下役とだから、正しくして而も功があり乍ら、冤枉の罪に陥れられて、莊屋夫婦を殺したのも、陣代を殺したのも、その下役を傷けたのも、皆彼がなすところだと、討洩らされた五倍二が、討取られた陣代の弟と心を合せて讒したので、新陣代丁田町之進も、亦同じ穴の狐で、額藏と、額藏の證人なる老僕脊介を責めさいなむこと甚だしく、かくて刑定まり、兩人とも近いうちに首を刎ねられるさうです」と、語り終つて吐息つくのだった。

信乃をはじめ、現八も小文吾も、且つ驚き且つ憤り、「これは一大事だ、救はなければなるまい」と心落ちつかない。小文吾と現八は、「土地の人に見知られぬを幸ひに、まづ二人で大塚に赴き、事のやうすを探つて来よう」と逸つた。しかし、彼等悪役人どもは、信乃をも額藏の同類と告げ、見つけ次第とらへようと轉めいてゐるから、兩人信乃の友と判つたならば甚だ危からうといつて稍平はこれを押止めた。稍平更に三士に勧めて言ふやう、「大塚に行くことは必ず思ひ止まつて下さい。信濃は犬塚殿の古い由縁の地と聞いてみますから、一先づ彼地へ赴かせられてはいかゞ。若しさうならば、自然上野なる荒芽山を通られるだらう。その麓の孤屋に音音といふ老媪が居りますから、それをお訪ね下さい。これは私がしるべのものです。人里遠い住居なので、世を忍ぶにはもつてこいでせう」など、まめまめしく言ふのである。

三士つら／＼この老人を見ると、人品卑しからず、心正しく道念の堅固さ、その面にも現はれた。由緒がある人にちがひないと、信乃はその素性を問うたが、「昔、いさゝか武士の祿を食んだばかりの者、本姓は姥雪、名は世四郎。形の如き下司であつたのを猶ほしくじりがあつてこゝに追退けられたもの」とのみで多くを語らない。さて、船日記の末なる白紙引裂いてすら／＼と認めた一通の手紙を「その老媪のところを訪はれたらば」と信乃に託し、なほ力二郎・尺八とて、不東乍ら義に勇む二人の猶子があるから、捷徑を彼等に送らせようとして、竹法螺とつて呼ばうとしたが、三士、さまではとて押し切つて斷つて、厚く禮を言つて出た。

稍平の忠言も聴くべきであるが、同盟の友異姓の兄弟なる額藏が死をどうして坐視することが出来るやう。三士は先づ瀧の川なる辨財天の堂に參籠と稱して足をとゞめたが、その夜の宵闇にまぎれ、信乃は現八と相携へて大塚の里に入り住んだ邸のあさましい焼跡にゐる時、悲しみ傷む情に堪へない。殊に現八は、こゝが糠助叔父の住んでゐた所だと告げられて、懐しく悲しく、流るゝ涙禁めがたかつた。なほ、信乃によつて厚く葬られたその墓所に跪いては、追慕の思いやますのであつた。さて、そ

の翌日より小文吾と現八とは旅商人に身を賣して大塚の里に入りこみ、いかにもして莊助を救はうと心を砕いたのである。

さて、額藏の莊助は、無實の罪におちいり、日々劇しい拷問に苦しんだが、かの犬山道節が肩の瘤を劈いて我手に入れた忠の字の玉を、頭髻に收め、口に含み、耳に隠して密かに持つて居たしるしに依り、普通の人ならば責め殺されしよう呵責にあひながら、すこしも弱らず、責めらるゝ折には氣絶するが、それが過ぐれば忽ちもとに復るので、役人共は、これは幻術を用ゐるにちがひない。いよく許し難い曲者である」とて遂に白状を待たないで刑に處することゝなつた。大塚の村人の心ある者は、莊助がむじつを知つて、押し切つて赦免を願ひ出でたりしたが、酷吏らは顧みないで、鎌倉の下知に従ひ、巢鴨なる庚申塚でいよく竹槍の極刑に處さうとするのだ。卒川菴八檢分の役で、竹槍を執るは、宮六の弟社平と軍木五倍二である。塚を去る事一反ばかりの棟の木に額藏を釣り下げ、三十餘人の夥兵に四邊を警めさせ、社平・五倍二は左右より竹槍を振りひらめかし、やつとばかりに突き出す。この時遅く、かの時早く、東西の稻塚の蔭から、双方ひとしくひやうと飛び來つた鎗箭があつて、五倍二・社平が肩尖に、一ゆれ揺つて發止と立ち二人はあつと倒れ伏した。菴八等おどろき騒いで、箭に結んだ紙牌を見ると、程遠からぬ王子權現に奉納のしるしがある。なほ幾すぢなく飛び來る神箭に、夥兵等七八人立地に射倒さるゝところへ、東西の稻塚を押し倒して現れ出でた二人の武士がある。犬塚信乃成孝・犬飼現八信道とあからさまに名乗つて、飛鳥の如く躍りかゝる。きつさき鋭き

打物は王子權現奉納の竹槍である。菴八、部下をはげましつゝ、必死となつて防ぎ戦ふところに、後の方に聲高く、「酷吏菴八しばらく待て。犬塚・犬飼同盟の死友、犬田小文吾悌順こゝにある」と名乗つて突立つたので、菴八いよく狼狽する。かくて、混戦する事しばらく、小文吾は菴八を、信乃は五倍二を、現八は社平を、各々竹槍もつて地上に縫ひ止めたので、獄卒夥兵等皆蜘蛛の子を散らすが如く逃げ失せた。

信乃即ち莊助を扶けおろして索を解き、さて手短にこゝに及んだ顛末をもの語り、玉と痣とを同じうする異姓の兄弟、現八と小文吾とを紹介せると、莊助夢かと打ち喜び、たゞ感涙に咽ぶばかりである。さて猶豫すべき時でない、早く戸田川を渡つて隣郡まで退かうと、西北の方に打連れて五六町も走ると、後の方から土煙をあげて追掛けて來る一隊がある。これは、大塚の城兵で、手に鐵砲を携へたので、さすがの犬士も、雨と飛び來る彈丸を凌ぐすべなく、一同こゝで討たれるよと見えたが、俄かに降りそゞぐ夕立は、忽ち火繩の火を消して、天地を揺る雷鳴、眼をくるめかす電に、追手しばらくたじろぐ所に、轟然落雷して、死するもの十餘人である。

かくて四犬士は不思議に難を免れ、戸田の河原についたが、渡るべき船もなく、どうしようも躊躇ふところへ、陣代の丁田町之進、手勢百五六十人を率ゐ、馬を飛ばして追かけ來り、その距離、數間に迫り、四犬士再び危地に陥つた時、漕ぎ寄せた一艘がある。「方々には、早くお乗りめされ」と呼ぶ蓑笠の人を、誰かと見れば神宮の稍平である。四犬士が乗り移ると、逆風を物ともしないで、對岸に

漕ぎ寄せた。猪平は先ほどひそかに三犬士のあとをつけて、莊助を救ふ手段の密談を聞き、必ずこゝに逃れ来るであらうと舟を移して待つてゐたのだ。陣代町之進は血氣に逸る若武者で、手下の勢を叱咤しつゝ、眞先に立つて、さつと水中に馬を乗り入れるのを、猪平遠く見て船中より兵と放つた矢、町之進の乳のほりに立つたが、札よき鎧を着てゐたので、裏搔く迄ではなかつた。猪平そこで二の矢を番へようとする時、忽ち水中より浮き上つた一人の壯夫があつて、熊手を打掛け、町之進を引落して、あれよといふ間に、首を搔いてしまつた。かくてその壯夫は町之進が馬に打乗り、續いて渡り来る敵を盡く熊手に引掛けて水底に打ち沈めたが、岸邊の蘆の中からまた一人の丈夫現れ、長柄の槍をふるつて陸上の兵を突き崩すのであつた。世に眼覺ましいその働き、唯ひとへに命を捨て、四犬士が難に代る覺悟と見えた。

對岸でこの狀を見澄ましてゐた四犬士は齊しく感歎の聲を擧げ、かの二俠士は何人かと怪しむに、猪平打笑みて、「彼等こそ先に告げた力二郎・尺八である。われは年寄つてゐるので、或は力足らないかと助太刀にたのんだところ、血氣の若者、且つは豊島・練馬兩家に縁故があつて、常に報復の志深く、大塚の陣代を憎むこと甚だしいので、かういふ働きをなしたのである」と云ふ。四犬士は「見す／＼討たしてはならぬ。取つて返さう」といふのを、猪平堅く押しとどめ、かくては貴方がたを落さうとして戦ふ彼等の志を無にするものである。彼等も我も俠氣から貴方がたを救ふのではない。世の俊傑と見受けるので生命に換へてお頼みしようとする事があるからだ。それは委託した手紙を荒芽山の麓の老女官言

に届けて下されば自然わかる筈、かうなつては、自分も神宮に歸つて安きを貪り難く、今日を限りの命だといつて、四犬士の止めるのもきかず、ひとり川中に漕ぎ戻し、かねて用意の船底の栓を抜き捨てたので、人もろ共、舟は忽ち水底に没し去つた。四犬士やむなくこの場をすて、猪平の勧めにまかせ、上野なる荒芽山まで赴かうと、打連れて蕨の宿に急いだ。

(六) 道節、單身定正を覘ふ

上野・信濃を目ざして、間道をえらんで急行した四犬士は、黑白も辨じない闇に迷うて、桶川の東南なる雷電山に夜をあかし、こゝで楊梅、棗などを採つて饑を凌ぎつゝ、信乃は一別以來の出來事を語り、且つ照文の告ぐるところに依り、感得せる靈玉の因縁を語りて、かの里見殿恩賜の黄金の一包を莊助に渡せば、莊助また圓塚山にて犬山道節が左母二郎を殺し、濱路と異腹の兄弟の名乗合をなし、村雨の寶劍を取つて去らうとするので、取返さうとして道節と戦ひ、道節が肩の瘤を劈いて忠の字の玉を得た次第を語れば、一同皆感嘆の聲を合せ、切に道節を想ふのである。なほ現八が社平より奪ひとつて、莊助に與へた太刀は、社平が慕六より奪つてほしいまゝに帶した桐一文字の名刀であつたと、信乃が文五衛から得て佩いた兩刀は、莊助が父衛二則任の遺物であつたのを發見した。さて小文吾は信乃・現八を送つて來てからはや十日を経た。「文五兵衛どのを初め、皆がどんなにか待ちかねて居らう、こゝから歸られては」と、三犬士等しく勧めたが、「荒芽山に落着くまでは」と言つ

て、小文吾はうけ入れない。そこで四犬士はその夜桶川に宿り、それより旅の宿りを重ねて、同じ月の六日に、上野國妙義山の妙義神社に參詣し、茶店の遠眼鏡をとつて、恣に遠くを望んでゐる莊助の眼に、麓の總門のあたりを行く一人の武士の姿が映つた。それは犬山道節に似てゐるので、もしかその人ではないかと四犬士の胸はさわいだ。「道節が讐とねらふ管領定正、近頃當國白井に在城すと聞く。道節或はこの地に居らう。廻り合ひたいものだ」とて、四人は相共に山を下つた。

山内顯定と不和で鎌倉を退き、上野國白井に在城せる管領扇谷定正は、昨五日の早朝から狩に出て、六日の申の刻、城外なる松並木に歸途を急がす。紋紗の狩衣に精好の袴、豹皮の行膝、金作の太刀、八分反の武者笠を戴いて奥州驪の太く逞ましき馬に紅の厚ぶさかけ、銀の鞍に紫のたづなはいぐり、近臣五十人ばかりに數多の列卒を隨へて、行列めざましく打たすところへ、一人の浪人の皂靴皮絹の單衣着て編笠深く被つたのが、老松の蔭石に腰かけ、右手にとつた一口の太刀を膝に押立てつゝ、聲ふりたてゝ呼ばはるやう、「世に千里を走る馬がないのではない、唯これを知る伯樂が無いのみである。今も莫耶の劍が無いではない、唯これを知る良將が無いからだ。惜しいことである、わがこの名刀は」と、三度四度繰り返した。

行列の先に立てるもの、これを咎めて、「管領のお通りになるのに無禮であらう」と罵れど、その浪人冷笑つて取合はない。雑兵ども、「狼藉者、打倒せ、搦めとれ」とさわぎ立てる。定正、近く馬を進め、「われ自ら尋ね問はう」と云ふ。浪人は笠をかなぐり捨て、太刀を捧げて馬前に罷り出た。年の頃

は二十餘り、色白く髯青く、眉秀で、眼ほからかに、鼻高く唇丹い美丈夫である。言葉さわやかに、太刀の由來を申すやう、「私は大出太郎と申すもの。病める母が藥餌の代に、傳家の寶刀を賣らうとして、諸侯を歴訪したが、名刀の眞價値を見がたかつたり、敵國の謀者と疑つたりして、買はうとする者が無い。扇谷管領は天晴當代の英主、この名刀の知己と思つて、わざ／＼當地にはまゐつた。またこの刀は持氏卿の祕藏し居る村雨の名刀でござる」といふ。

定正驚いて、「それは天下の寶である。されど證據無くては信じ難い」と疑ふに、浪人口惜しさうな顔で、「そも／＼この太刀の銳さは、陸に犀象を切ることが出來、水には蛟龍を截つことが出来る。唐土の龍泉太阿、我國の鬚切膝丸といったところが、この右に出ることはあるまい。のみならず、村雨の名の示すこの不思議を御覽下さい」と云ふや、するりと抜き放つて振ると、刀尖より迸る水氣は四方に亂れ散つて、あたりは狹霧に包まれた。定正感嘆して、「今は疑ふやうもない村雨の名刀、買ひ取つてつかはさう。こゝへ持ち來れよ」とさしまねいた。

浪人は欣然として身を進め、近臣の取次がうとするのを拒んで、床几のほとりにつと寄るよと見えだが、忽ち定正が胸さきとつてあふのけに突き倒し、しつかと膝下に押伏せて、刀尖をその胸元にさしつけ、天地に響けとばかり聲振りたてた。「定正、たしかに聞け、我は去年の四月十三日、江郷田池袋の戦ひに、一族郎黨こと／＼汝がために滅んだ、練馬平左衛門倍盛が老黨、犬山監物貞知入道道策が一子、犬山道節忠與である。君父の爲に讐を復す。恨みの刃を受けるがよい」とて、定正の驚き怒り

てはね返さうとするのを起しもせず、細頸丁と搔切つた。しばらく呆氣にとられた侍臣等、「すはや稀代の曲者、打ちとれよ」と呼ばはつて四方より打つてかゝるのを、道節、八面に切り立つる縦横無礙の必死の太刀風、血煙水煙濛々と立つて、討たるゝもの數を知らない。數十の敵卒等見るゝ浮足立つて逃げ走るを、「きたなし返せ」と呼びかけつゝ、一町あまり追ふところへ、とある繁つた藪蔭から、どつと鬨の聲を揚げて、顯れ出でた一隊がある、先頭に立つた大將と思しき若武者は、崩黄緘の腹巻に精好の奴袴、白い緞の狩裝束して、きらびやかな打扮したのが、道節を指して冷笑ひ、「愚かである犬山道節、良將は自ら時運に稱ふ神の助けがある。管領がどうして汝が如き瘦浪人に討たれようや。豫てより豊島・練馬の殘黨の隙を伺ふを知り、怪しき行者に姿を變へ、幻術を以て民を惑はし錢を集むる汝が事をも聞き得たので、おびきよせて捕へようと、管領白井に在城すと云ひ觸らして、その實は鎌倉を出ない、今日油斷して汝に討たれたのは、面影の似たところから、汝が謀る手段として假に主君に打扮つた越杉駄一郎遠安だ。かくはかつた自分を誰だと思ふ。管領補佐の一老職、太田左衛門太夫持資入道道灌が長男、薪六郎助友である。汝を討取るはいと易いが、敵ながら惜しい勇士と思はれたので、我が箭先に掛けまい、潔く降參せよ」と呼ばはつた。

道節憤怒の眦を裂き、「猪口才な助友、けがらはしい降參呼ばはり、定正はよし討ち得なかつたとも、打取つた越杉は、父に槍をつけた當の敵、この上は汝を討取つて後、同じき父の讐竈門三寶平を選み討にしよう。雜兵共邪魔すな」と叫ぶや、槍襖を作つて取圍める助友が手勢を前後左右に切り倒し、

なほ助友が射出す手練の箭を二筋ながら切り拂つたが、松枝・妻有等とつて返し、助友に力を添へたから、道節は三寶平に出會はないで、こゝに空しく犬死してはならぬと思ひ直し、一方を切り破つて電光の如く駆け出し、折しも前面から歩んで来る四人の旅人の間に割つて入りいづくともなく落失せた。この四人の旅人は別人ならず、妙義の社頭の遠眼鏡で見た道節を探さうとして来た信乃・現八・莊助・小文吾の四犬士であるが、白井の城兵はこれを道節の助太刀と思ひ、「あれ撃ちとめよ」と罵り合ひ、どつとおめいて突き出す槍の穂先の電光に四犬士云ひ解く隙なく、やむを得ず抜き合せた。城兵等、新兵を加へ、衆を恃んで競ひかゝるので、萬夫不當の四犬士もたやすくは切り抜け得ない。この時既に日は暮れて、六日の月の影仄かに、叢立つ雲に隠されては、案内知らぬ木下闇に、四人は必死と戦つた。道節一旦は遁れたが、四人の旅人がわれ故危難に陥れるを見捨てゝ去ることは義でない、取つて返して敵勢のうしろに廻り、敵の捨てた弓箭と勢子繩とを拾ひ取り、大竹藪の中に入り、數多の竹に繩を結び、その端を集めて引動かしつゝ、鬨を作り、矢繼早に射出す矢に、空矢は一つもなかつたので、それ伏兵だどくづれ立つて走つたから、四犬士やうやく血路を開き得て、荒芽山指して急いだ。

父道灌のあとを繼いださすの助友も、道節が智謀に裏を搔かれて、味方散々の態となり、窮寇を追うてはならぬなどと、苦しい申譯しつゝ、城に引き揚げた。この時藪蔭より顯れた犬山道節は、幽かな月影に、慘憺たる戦の跡を辿りつゝ、散亂せる死骸の中より、我が投げ捨てた越杉駄一郎遠安の首級を拾ひ取つて立ち去らうとするところへ、後から「曲者待て」と呼びとめて、きらりと槍の穂先を突

き出した。身をかはして敵の名乗るのを聞けば、父道策を討取つた龍門三寶平五行かまどとほへいかにすけである。「願ふ敵だ」と道節勇み喜んで戦ひ、苦もなく討ち取つて首を揚げた。道節は遠安が首と五行が首とを腰につけ、悠々として立去つた。

さて、やうやく血路を得て荒芽山指して走つた四犬士の中、犬川莊助義任は庚申塚で三犬士に救はれた恩義をこゝに報いようと、わけても奮闘し、殿となつて且つ戦ひ、且つ走るほどに、いつか三犬士にはぐれて、道を失つた。行けどもく、荒芽山らしい處に着かないばかりでなく、饑渴堪へ難くなつた折柄、とある森蔭に灯影ほかりの漏れるのを、尋ね着けば、人家でなくて、小やかな地藏堂であつたが、見れば佛前に二皿の供物がある。莊助、漫に呼びかけて、「地藏尊々々々、六道能化の教主として餓鬼を救はせ給ふとうけたまはる、餓ゑたる私をお憐み下さい」など戯れつゝ、供物を食べて、飢渴をわすれ、方便無量の佛恩を謝しつゝ、退き出づる時、油つきて燈明の灯が消えた。その時、蟲の音俄にまばらになつて、前面より來る者がある。莊助がじつと打成るとも知らず、堂の側の塔婆の前に、腰なる包みをとりに下して手向けつゝ、しきりに祈念を凝らすのである。莊助、「これは曲者の剝いで來た盜み物を邪神に供養して仕合せを祈るのもあらう。憎き奴ではある」とて、塔婆のうしろから手を伸して、その包みをむづとつかみ、引き入れようとする時、その男、やらないと金剛力こんがうりきで押へた、二人は遂に引組みて上を下にと揉み合つた。莊助が曲者と見たのは、これ犬山道節で、その包みは遠安と五行の首級である。

こゝは荒芽山に程近い田文の地藏堂で、今月卯月の中の三日、君父の一周忌の追善に由縁ゆかりの者の建てた塔婆一基へ、件の首級くびを手向けようとして來るのであつた。さうとは知らぬ莊助、ふかい闇を揺つて戦へるを、闇に透かして打成る一人の老いた旅人がある。これは、道節のうしろについてこゝに來たのであるが、竹の子笠を戴き、肩に二包の荷をかけた。何思つたのか、その旅人は、つと出で、必死と争ふ二人の間に杖をさし入れて押し分けようとしたから、莊助も道節も、驚いて思はず組んだ手を離すはずみに首級の包は、たと地に落ち、同時に老人も突き退けられて肩なる包をとり落した。老人も道節もひとしく包みを掻探ると、形も大きさも相似たので、互に自分のものでないのを拾ひ取るところに、莊助が程をはかつて丁と研りつけた一太刀、ねらひはづれて石塔の稜かどをはたと撃つた。ぱつと散つた石火の光に面を認むる程もなく道節は火遁の術を以て、刹那に影をかき消した。同時に走り去る老人を、敵と思ひつゝ、莊助はどこまでもと追つてゆく。

こゝにまた上野國甘樂郡荒芽山の麓村に音音といふ老いた賤しちの女がある。もとは武藏なる練馬の老臣犬山道策に仕へた、若氣わかけの過失あやまちから同家の若黨姥雪世四郎と通じて懐胎したので、嚴しい家法に觸れて、生命を召されむとしたのを、道節の母の情で助けられ、力二郎・尺八といふ双生兒ふたごを生み、世四郎は身の暇を賜はつたが、音音は道節が乳母にとて留められた。年経て後、二人の子に、曳手ひきて、單節ひとといふ姉妹を嫁に迎へたが、その祝言のあくる日に戦ひ起り、豊島練馬の兩家滅亡したので、音音は二人の嫁をつれて亂軍の中を逃れ出で、いさゝかの由縁ゆかりをたづねてこの山里に落ちて來たのである。

今日は白井に在城せる管領定正が夫役にとて、家に男が無いので、姉の曳手が瘦馬を曳いて出て行つたが、夜に入つても、歸つて来ぬのはどうしたのだと、音音は單節と共に待ちかねてゐると、外面に人のけはひがある。曳手が歸つたのかと立出で、燭をよせれば、曳手にあらで、一人の老いたる旅人である。音音を見るや、「おゝそなたは音音ではないか、われは世四郎の猪平だ」と云ふのを、音音はつくづく見て始めてそれと氣ついたが、折戸をはたと内よりひき立て、「世四郎殿とは縁切つた。猪平といふ翁に訪はるゝ覺え絶えて無い。故主の恩をも送らず二十年餘も経て、敵方の民となるまでに義理に背いた人と知りつゝ、何が楽しくて話し合ふことが出来よう」と唯一徹にいきまいてから、猪平が云ひ解かうとするのを聞き入れようとしな。單節は夫の父と聞くより懐しさをやる方もなく、先づ兎も角もとて、猪平を柴小屋に導き入れ、「物欲しくはありませんか、蚊遣の團扇をさし上げませう。その重さうに見える旅包みを、私にお預け下さい。」など、嫁が深切を、猪平よろこんで、柴小屋に一夜の宿を借りた。

さて、單節は曳手を迎へに出て行つたが、その後、「一寸おきゝしますが、この邊に音音といふ老女のあるのをお知りになりませんか」と門より問ひかけるものがあるので、迎へ入れて見ると、これは犬川莊助である。莊助は信乃等の既にこゝにあらうことを豫期したが、未だ来て居らぬといふので、痛く失望した。音音はまた莊助を敵の間者ではないかと疑つて、試して様子を見ようと、莊助に暫くの留守を頼み、用に出る振りをして小蔭にゐると、かの荒芽の山おろし、窓より風と吹き

入つてふつと燈火を消した。莊助是非なく暗闇に坐つてゐると、「これはまた何といふくらいことだらう、曳手は居らぬか、音音はどうしたのか」と呼びかけつゝ入つて来たのは、犬山道節である。乳母音音のこの佗住居は、彼が世を忍んでひそかに復讐をはかつてゐた處、もとより案内知つたれば、つか／＼とあがつて来て、包みを家廟のほとりの破戸棚に投げ入れ、燧箱などかき探る様子を、闇の中ながらじつと窺つてゐた莊助は、こゝは盜賊の宿ではなからうか、あの老女も實は音音と云ふのではないだらう。我を残して外に出たのは、同類を呼びあつめて害せむ爲めではなかつたらうかなど案じながら、油断なく身構へて居たところ、道節がかい探つた火箸の先に火起り、夜風に煽られてばつと燃えあがる光に、兩人ひとしく面を見合はせた。

驚く道節、訝かる莊助、ひとしく刀を擡取つて、鎗を突き立て、しばらく無言に睨み合つたが、道節の苛つて撃ちかゝらうとするのを、莊助しばしと押し止め、「早まり給ふな、犬山氏」と呼ばれて道節心得ない、「われを知つた御身は誰か」と問はれて、莊助につこと打笑みて、こゝに、かの圓塚山で暗中に争つたのは自分であつたことを告げ、その時、守囊と共に道節に取られた義の字の玉の代りに、道節の肩の瘤を切裂いて忠の字の玉を得た事を物語り、なほ道節の身に牡丹の花の形した痣はあらぬかと問ふに、道節驚いた風で、あなたに切り裂かれた肩の瘤は些かの痛みを覺えない、疵の痕、痣となつて云はるゝ如き形をしてゐると答へ、さて、どうしてこんな不思議を知られるのかと問はれて、莊助即ち長々と説き出す、伏姫が事、仁義禮智忠信孝悌八顆の靈玉の事、犬塚信乃・犬飼現八・犬田

小文吾・大江親兵衛及び莊助自身の來歴。聞いて道節事毎に感嘆するのであつた。殊に村雨の刀を返さないで信乃を窮地に落したを悔み、神宮の猪平が死を悼み、なほ力二郎・尺八には道節が命じて、豪傑の士を求めさせたが、神宮で猪平の世四郎に逢ひ、父子の名乗をなした上、共に力を合せて犬士等に志を運んだものであらうと推測する旨を語り、自分が定正を讐敵と狙ふわけ、今日越杉駄一郎と龜門三寶平とを討取り、二つの首級を、音音が倍盛・道策のために建てた彼の田文の地藏堂なる卒塔婆に供へたが、その折盜賊と誤つてか、我を脅した剛力の士は、あなたであつたかとして、重なる奇遇を喜び、この上は力を併せて、他の三犬士を探り、片時も早く對面しようとして立ち出づるを、先程より物蔭に立聞きして一伍一什を知つた音音は、猪平が自ら舟を沈めて水死したといふ物語に胸潰れ、それでは先程訪れ来たのは幽霊だつたか、それとは知らずにつれなく拒んだ事の口惜しさよと、涙に咽ぶのであつた。

(七) 荒芽山の厄難

こゝに音音は燈しをつけた家廟の前で、一人念佛を唱へてみると、莊役根五平慌たゞしく入り來つて、練馬の殘黨犬山道節及び加擔の者數人、このあたりに隠れて居ると覺えた、心當りあらば訴へ出でよと、巨田薪六郎が下知の趣をふれて來る。それを返してほつと吐息をつくところに、夜は早や更け渡つて、丑の時の鐘が聞える。風のまぎれに馬の鈴音の幽かにするのには、曳手・單節が歸つてくる。

のであらうと耳傾けると、小室節の合唄が、優しく、この深山の夜更けに聞えるのである。「荒芽山、月こそあらめ曇る夜の、あすをまたじの袖の雨、ふる郷遠くひとりぬる、かなしき秋のねざめぞと、風の便りにしらせむ」と、姉がうたへば、「妹待つと、しら井に近き小松原、引かれて外にねの日せし、仇なる夢の手枕、覺むればもとの水莖に、殘んの雪と書かせむ」と妹がうたふ。歌ひ連れつゝ、八重葎茂れる宿の檐下に近づく。曳手が牽ける馬には、病み疲れた二人の旅人を合鞍に乗せた。單節は二つの旅行李を一荷に背負つて右手に松明を振り照らしたが先に進みて急がはしく、鳴子が鳴る戸を押し明け、「阿姑様、唯今歸りました、まだお寝みなさいませんでしたか」と入り來るを見た音音は、よろこんで出迎へたが、彼の二人の旅人を見て、眉を顰め、「何者ぞ」とひそかに問ふのである。曳手は今日不慮の騒ぎ起り女の身のかげひき思ひにまかせず、困り切つてゐた處を、これなるふたりの旅人に救はれ、辛くも劍の下をのがれて無事であつたが、ふたり共途中で急病起りて、草原に打倒れたので、恩ある人を見捨てられず。折よく逢つた出迎への單節とはかり、かくはつれてもどつたといふに、音音は、折がわるいとも思ひ、又、敵方の間者ではなからうかとも案じたが、もしさうであつたら、内へ入れてから方法もあらうと入れてからその旅人を、行燈の火かげに見て、音音は思はず、「や、ゝ」と驚きの叫びをあげた。「そなたは力二郎、そなたは尺八ではないか」と音音の言ふに、二人の旅人も見上げて驚き「これは母君でいらしたか」と、聲は齊しく高かつた。

曳手・單節も驚きよろこび、夫と呼び伏とは呼んだ、婚禮の夜一目見交したまゝ別れたが、餘りの

變り方にそれとも氣づかなかつたのであらう、思ひがけないめぐりあひに、嬉しさ恥かしさ、胸のみしきりに騒がれて、顔うち掩ふ袖より餘る歡びの涙が、袴をうるほした。さて、音音、容を改めてここに來た次第を聞くに、兄弟交々語るやう、「過ぐる年、武藏池袋の戰で、道節君に隨つて、群る敵を切り靡け、一方の血路を開いて落ち延びたが、後、道節君の命により、世の豪傑と交つてこれを味方に引入るゝ役目を引受け、世を忍んで武藏に在るうち、はからず父精平と名乗り合ひ、父子心を合せて、この役目に當つてゐたが、大塚の郷の浪人犬塚信乃こそ天晴の豪傑、その盟友なる犬飼・犬田・犬川なんども亦、これに劣らぬ智勇の士で、何れも道節君の味方に附けたい人々であるを認め、身を捨ててその難を救ひ、これに書を託して荒芽山に來らしめた。それから、兄弟は丁田始め多くの敵を討取り、身も數箇所の手傷を負つたが、四犬士果して荒芽山に來たかどうか心もとなく、且つ母上にも妻にも一目逢ひ度いので、敵の圍みを斬り抜けてやう／＼こゝまでまゐつた」と、手傷に弱つた顔色蒼ざめ、兄一句弟一句、言ひ終つて、ほとつく息は火のやうであつた。

兄弟なほも苦しき言葉をついで、「父なる世四郎の精平と母とが、もとの如く縁につながるやう願ふ」と述ぶるに、音音もあまたゞび歎息して、莊助が話に聞ける精平が水死の事、それとも知らず、宵に幽靈の尋ね來つたのを、つれなくもてなして返したなど物語る。それを聞く弟嫁の單節は、「本當にそれが幽靈だつたのでせうか。竊に告げたい事あつて來たので、しばし入れて下されといはれ、その御有様の痛はしさに、柴置小屋にお隠し申したのです。もし幽靈であつたならば、受取りまゐらば

て戸棚に納れて置いた彼の荷物も消え失せたでせう。尋ねて見ませう」と言つて立上るのを、力二郎、尺八、慌たゞしく引きとゞむるさまの故ありさうである。されど音音はさうと心づかず、自ら戸棚を開けて、かの包を取り出し、結目を解かせたところ、こはいかに、現れ出でたのは血のしたゝれる一雙の斬首である。同時に、後ろに聞える苦惱の聲、燃え上る燐火の光が障子に映るので、再び驚いて見かへると、今迄あつた二人の姿、ふつと消え失せた。音音等は重ね／＼の不思議に、たゞ惘然たるばかりであつたが、若しやと見れば、それは全く知らぬ人の首である。「死んだ人に靈があつても、精平殿の亡き魂が、どうしてこの忌はしいきたない物をもつて來ませう、宵からの事すべて狐狸などの爲せるわざであらう。足跡があらう。尋ねて見よう」などとさわぐ折柄、障子を颯と開いて、入つて來るものがある。何者かと見ると精平である。「憎らしや、この野狐が」と、音音が短刀をもて撃たうとするのを押とゞめ、「暫く待つてくれ、仔細を語らう。われは狐でも、狸でもない、またもとより幽靈でもない。私が持つて來たのはこれなる包みでない、別にある」と言つて、戸棚の中から單節に取り出さした包を指し、「田文の森の塚のほとりで二勇士の争ひを引分けた時、包を落して更に拾ひ取つたが、その節取換つたものに相違無い。疾くそれを解いて見るがよい、さうしたら疑が晴れるだらう」といふに、三人は燭さしよせて披いて見ると、これは、力二郎・尺八が首級で、色こそ變つてゐるが、まざ／＼と今迄在つた面影と異つてゐない。「なんとといふ淺ましいこと」と、曳手・單節は各々夫の首級を膝に載せ、みだれた鬢を掻き上げて、わつとばかり泣き沈むのである。

猪平涙ながらに物語るやう、「私は一旦戸田川に沈んだが、水練が邪魔になつて死ぬことが出来ず、やむなく水を出で、討死せむと思ひ定めて戰場に赴いたところ、早や事が終つた後であつたので、更に我子の生死が確めなくなり、姿を變へて翌る日大塚のほとりに赴いて見た所、丁田が下役仁田山晋吾と云ふ者、勇戦して討死した力二郎・尺八の首を取り、力二郎を信乃、尺八を額藏と稱へて庚申塚の邊に梟し、己が功を誇りつゝあつたが、その夜更けてから忍び行き、獄卒どもを斬つて捨て、二つの首を奪ひ返し、我子兩人の天晴の最後を由縁の者に傳へ、故主の耳にも入れたく、死ぬべき命を長らへて、こゝへは參つたのだ」と言ふ。晋吾は腸を斷つ悲みの中にも、我子が忠義の死をよろこび、且つ猪平の志をよろこんで、これまで誤解してゐた罪を詫びたのである。

さて、かの二人の亡靈が持ち來つた包みは、たしかに單節が受取つて藏つたが、披いて見ると、血に染んだ一双の黒革緘の腹巻、銃彈の裏搔ける痕も六つ七つあり、八花菱の小鏢に腕鎧脛盾をとりそへたのにも、目覺ましかつた奮戦のさま、眼に見るやうで、四人はしばし言葉もなく、凝と見成つてゐたが、猪平、その時つと刀をとつて腹に突立てようとしたが、三人取り縋つて押しとゞめるところに、障子蹴開いて躍り込んだのは、かの莊役の根五平である。「汝等が練馬の殘黨であることは宵のほどから皆聞き知つた」とて、左右に従へた里人らと共にうつてかゝる。猪平ちつとも騒がず、その一人を眞二つに斬つて捨て、晋吾また懐劍をもて一人を刺す。根五平、こりやたまらぬと逃げ出づるところに、奥の方より矢撃諸共打出した銃鏡、ぐさと背を貫いた。銃鏡の主を誰かと思れば道節である。

莊助もろとも立出でたが、背戸から歸り來つて、奥に潜みながら、この場の物語洩れなく聞き取つたと言つて、共に感歎の聲を合せた。自分が犬士の一人である事から、猪平が本名姥雪世四郎と云ふのは、俗に犬は雪のをばとやら、犬に因める名詮自稱、世四郎は犬塚氏の飼犬與四郎と同音である。又、力二尺八の四字を組み換へれば、里見の愛犬八房の二字となること、宿因の中にも明かであることを語り、さて、改めて、道節亡父に代つて世四郎の勘氣を許し、晋吾と天下晴れての婚姻を取結ばせる。酒は幸に道節に侷めようと貯へ置いたものである。肴には鬻敵駄一郎、三寶平が首である。かういふところへ、「わかやぐや、雪の白髪も打解けて、もとの色なる相生の松、年古りて今日あひ生の松こそ目出度けれ」とうたひ連れつゝ立出で、ひとしく席に着いたのは、これも道節といつしか奥の間につどひて、ひそかに様子を聞いてゐた信乃・莊助・現八・小文吾である。皆猪平に向つて、「恩人命恙なく、われ等も無事で、はからずもこゝで再會したのは目出度い」とて、犬士こゝになかうどとなり、悲喜交々の夜は明けた。初秋の風涼しく吹き、朝餌を求むる群雀が垣根に降りて、千代々々と鳴くのも心あるやうだ。

さて五犬士は、討手の寄せぬ間に、こゝを去らうとし後の事を話しあふ。道節は他の諸犬士と共にまだ巡り逢はぬ他の二犬士を探し、八犬士そろつた上、里見殿をたすけて定正を討ち取らうといふ議に意見一致し、これより手分けして遍歴の旅に上ることゝなつたが、小文吾は一旦は行徳に歸らねばならぬ身である。世四郎夫婦と曳手・單節との隠家に行徳こそ打つてつけなので、小文吾すなはちこ

れを伴つて歸る事となり、早速旅装をととのへ、共に頭髻を剪り放つて尼となつた。曳手と單節とを馬の合鞍にかきのせ、力二郎・尺八の首をも行徳に葬るべく、二人に護らせて鞍の上に着け、皆ひとしく立出でようとす時、「御説である」と言つて、柴垣の蔭から走り出た一隊がある。

五犬士齊しく抜き連れてまたゝく間に斬つて捨てたが、はるかに聞ゆる陣鉦太鼓は、大軍この山を取り巻くと覺えた。「面倒の事だ、又しても無益の殺生しなければならぬか」と、五犬士戦の用意をするところに、猪平・音音の老夫婦は、力二郎・尺八が片身の腹巻投げ掛け、腕鎧鉢巻かひひしく扮装ちて出來り、さて、「我等兩人、こゝで一さゝへ致しますから、疾くこの場を立ちのいて下され」と促したが、五犬士承知しない、押問答に時移り、寄手は間近く寄せて來たので、道節考へて、老夫婦を望みにまかせて家に留め置き、五犬士は裏手の山邊に潛み、不意に起つて横合から敵を驅け破らうとはかり、曳手・單節を乗せた馬を、小文吾預つて、手分けを定めて敵をむかへた。かくて猪平、音音の老夫婦は、圓竹の弓に細竹を削つた征矢を番へ、近づく敵五七人を射倒し、刀を振り閃かして、大軍の中に切つて入り、馬を先頭にすゝめて、「巨田助友こゝにある」と名乗つて出るのを、一撃ちに討ち取らうと競ひ進んだ。

一方、五犬士は時分は好しと現はれ出で、横合より敵の不意を襲はうとしたが、思ひもかけぬ蛆蔭から、どつと喚いて馳せかゝる一手の敵兵、眞先なる大將の甲冑美々しく装つたのが、これも「巨田助友こゝにある」と名乗つた。五犬士これはと驚きつゝも、勢鋭く斬りまくれば、うしろに、鬨の聲

起り、こゝにも一隊の伏勢あつて、同じ扮装の寄手の大將、面影さへ少しも違はぬのが、「逆賊道節ぞこ退くな。巨田薪六郎助友こゝにある」と呼ばはつた。さては計られたか、ぬかつたと思ひながらも五犬士勇氣益々加はり、敵に屈せず、奮撃突戰、秘術を盡して戦つたが、彼の孤屋の方に俄かに猛火起り、山風炎を吹き飛ばして、樹木を焦がし草を焼き、四邊は見る／＼火の渦となり、黒烟さか巻き添はつて目の前も辨じない。さすがの五犬士も、焦熱の苦み凌ぎ難く、道節が火遁の術も、卑怯の業ぞとてすでに封じた。今は天命と覺悟したところへ、信乃ふと心づきて、腰なる村雨の太刀引抜き、力の限り打振れば、寶刀の奇特あやまたず、刀尖よりほとばしる水氣遠近に亂れ散り、夕立の如く降りそゞいで、忽ち四邊の火を打消したので、犬士やうやく危難をまぬがれ、なほも邪魔なす敵兵を斬り拂ひつゝ、各々別れ／＼に落ち失せた。

さるほどに犬田小文吾の預かつた曳手・單節を乗せた馬は焰に驚いたのであらう。敵の雜兵らを蹄に飛ばし旋風の如くかけ去つたので、小文吾驚いて、逃さじと追つてゆくと、落人を剥ぎとらうと待つてゐた野武士の一群、馬を目がけて鳥銃を放つた。馬は重傷に斃れたが、その時怪むべし、ふたつの陰火、何處からともなく閃いて來て、斃れた馬の頭のほとりに留まつたと見ると、馬はむつくと起上り、流星の如く、馳せいで、あれよと見る間に行方を知らない。追ひすがり來てこのさまを見た小文吾、事の不思議に驚きながらも、なほ慕うて馳せ行くのを、馬を逸したかの野武士等ばら／＼と左右から亂れかゝる。小文吾は例の怪力で、片はしから、取つては投げ取つては投げて、さてひたすら

に走つてゆくほどに、その日は暮れた。

四、小文吾と毛野

(一) 小文吾、猪を搏てうちにす

小文吾はあまり走つたので、痛くも疲れ、その夜はとある草の屋に明かし、なほ馬の行方を尋ねまはる事三四日に及んだが、來るとも知らず、武藏淺草寺に程近い田圃のほとりにさしかゝる。秋の日斜に笠にさし、夕陽遠近を染めて、隅田の河原に風立つては、楊柳の葉のみだれ散るのもの淋しい。水長く遠く流れて、幾群の雁の聲、雲に入つて還らない。蕭條とした村里、見渡す稻田さら／＼と風にそよぐのである。さすらひの身、旅愁そゞろにとゞめがたく、あの川一つ越せば、下總のふるさと、父や妙眞をばや、大聖の、どんなに待つであらうかと懐かしいが、預かつた曳手・單節を失つて、おめ／＼と行徳に歸ることは出来ない。かの陰火の不思議は目のあたりに見た、兩女が上、よもつゝがはあるまじと思ふが、さりとして尋ねずに止むべきでない、どちらに向つて歩まうかとたゆたひながら、打沈んでゐるところに、と見れば前面の藁をつんだ蔭から、大きな野猪の傷ついたらしいのが、忽ち駈出で、路傍の石地藏を衝き倒し、草木を踏み靡かし砂を卷いて颯風の如く進んで來るのである。

左右はすべて深田なので、避け隠るゝところないを見て取つた小文吾、乃ち兩手を開いて、拳を固めて眉間のあたりを丁々と撃つた。八犬士何れも萬夫不當の勇士であるが、腕の力の絶倫なのは小文吾が随一である。さすがに猛き手負猪も、小文吾が鐵の拳に打ちひしがれ、腦骨碎け、眼の球飛び出で、血を吐いて死んだのである。

さて、一町ばかり行つて、月影にすかして見ると、獵人風の四十男、長身の短槍を握つたまゝ、仰向に反つて倒れてゐる、このわたりの獵夫が、かの猪の牙にかゝつたのであらうとて、小文吾は、藥を取り出して與へさま／＼に介抱する程に、やうやく息を吹きかへした。「それがしはこのわたりなる阿佐谷の民で鷗尻並四郎と申すもの。近頃野猪が出て田畑を荒し、百姓の迷惑おびたゞしいのであるが、いたく年古りた猛獸で、松脂をもて固めたる皮膚は鳥銃の丸も徹さない、村長からの布令でこの野猪を討ち取つたものがあつたら三貫文の褒美を與へようとのこと、それがし、若い時から獵を好んで、腕にいさゝか覺えのあるのを恃み、望んでこれに向つたところ、牙に掛けられて刎ね飛ばされ、御覽の如きありさま」と物語り、深く再生の恩を謝し、「命を拾つたのみか三貫文の賞にありつき、且つ肉を鬻ぎ、皮を賣らば、一貫文のまうけがあるので、併せて四貫の徳、皆おん身の賜」と、慾に輝く目つきの抜目なく、じつと見詰めたのは、小文吾が脱ぎ棄てた菅笠の上に、藥を取出だすとして披けた財布を漏れて見える、三百兩の黄金の包みである。

さて、並四郎、「日も暮れた御恩返しごうざしの寸志、今宵のお宿を仕りませう。いまだ御承知なさいません

でせうが、この邊は皆石濱なる千葉殿の領分で、敵よりの間者の用心とて、他郷の人を泊めるにはいとむつかしい作法があります、まして一人旅の人の宿をするものはありません、某、村長に告げて便宜を計りませう。」などと忠實ぶつて勧めるので、小文吾心進まぬながら、之を承知したので、並四郎これ／＼と宿所を教へ、「私はこの旨を村長に届けて後より行きませう。一足先へ」とて、證據に燈籠を小文吾に渡した。小文吾は村はづれなる榎樹のほとりに、燈火のかすかに漏るゝ家をそれと尋ねあて、留守する並四郎が妻船蟲に、かく／＼と次第を告げて、かの燈籠を示すと、船蟲すこしも疑はず、行水よ、夕食よ、蚊遣火よと、べら／＼しやべり乍ら、そら／＼しいもてなしぶりである。

小文吾つく／＼と船蟲の姿ものごしを見たが、齡は三十を六つ七つも越えたらう、物の言ひ方からいろ／＼の振舞男のやうであるが、容貌はさして醜くない、無造作に束ねた洗ひ髪に黄楊の横櫛さし折々釵をぬいて額髪を搔く癖がある。男帯の古びたのを腋の下に結び下げ、禪のみ綺麗で、單衣の袖も身幅もいと廣く長いのは、夫と共に着るためであらう。夫婦のものゝ様子と云ひ、住居の風と云ひ、農夫にあらず、商人にあらず、さて獵人も見え、俠客のたぐひか、さもなければ袁彦道のもがらかとも思はれるが、心得ぬはさほどの茅屋とも見えぬに、奥の間の壁三尺ばかり落ちくづれて、骨も無くなつてゐるので、外面より戸を推かけてふさげてある事である。それはともかく、あるじの留守に人妻と對つて居るくらゐ心苦しいものはない。初心の小文吾、竊に困りぬいてゐると、船蟲、酒杯を取りてしきりに強ひるのである。とかくするほどに、夜ははや亥の刻になるが、並四郎未だ還

らない、主が歸らないからと言つて、小文吾の臥床に入るを拒むを、船蟲笑つて、「物堅い方ではある、並四郎はあの野猪の褒美錢得たら、友達あつめて、酒飲み明かすであらう。お待ちになるに及ばぬこと」と、形ばかりの奥の間に、繼はぎの古蚊帳を釣り、小文吾を臥させたのである。

小文吾は蚤と蚊とに責められて、睡りがたく、庭の蟲の聲や、障子に響く茶立蟲の音の耳につくの目がさえて、過ぎ來し方行末の事などいろ／＼思ひつゞけたが、夜更けるまゝ、さすがに秋の身に沁むを覺えて小横引被つたが、いつまどろんだのだらうか、俄かに胸打騒いで驚き覺めると、行燈の灯は消えて、はつきりとは見えないが、かの壁のくづれに推し當てた戸は失せ、その外に朦朧と亘んだ人影！「人影がある、さては盜賊？」と思ひつゞも些とも騒がず忍び起き、臥したる形をそのまま、脱出でた跡に旅包を入れ置き、壁に身を寄せ窺ふと、果して入り來る一人の曲者、しばらくためらつてから、きつと肯いて、腰刀抜くより早く、颯の釣緒を切り落し、小横の上に延びかゝつて、かの旅包をぐつと刺す。その刀の光を目當に小文吾すかさず躍りかゝり、拔手鋭く丁と研れば、盜人の首は脆くも下に落ちころがつた。「やあ内儀、起き出でられよ、盜人を撃ちとめた、あかりを見せて下され」と小文吾聲高く呼び立てたが、船蟲はか／＼しくこたへず、出ても來ないので、小文吾障子引き開け、さし來る灯影で見ると、盜人と思つたのは主並四郎である。

小文吾あまりの事に、唯惘然たるばかりだつたが、船蟲さめ／＼と打泣きて、「犬田さまとやらいふお客人、これは私の夫ではございますが、慾に迷つて恩をあだに、おん身の寢首をかゝうとした罰は

觀面、こゝにおん身に討たれたのは、せめてもの罪滅ぼし、恨めしいとは少しも思ひませぬ」とて、さて訴ふるやう、「並四郎もとより善からぬ男で、この家に婿に來た身をも顧みず、自分の放蕩の代に田畑をも賣りつくし、その他さまざまの悪事を働くを、見兼ねて諫めるのをちつとも聞き入れず、今宵も私の寢入つて知らぬ間に、うら口よりこつそり歸つて、こんな大それた事に及んだのです。この上は上に訴へ出で、おきてに任すべきであるが、先祖代々莊屋の役までも勤めて來た家名を汚すとは心苦しい。どうぞ隱密にお計らひ下され」といふ。小文吾、うなづいて、そのまゝ立ち去らうとするのを、船蟲、恩にむくゆるしるしだといつて、先祖相傳の寶と祕藏してゐる古金襴の囊に納めた一管の尺八を贈らうといふ。小文吾迷惑ながら、受けなければ裏切ると疑はれようかと、假にこれを受け、さて船蟲が並四郎頓死の體にこしらへようと、菩提所に行つて歸るのを待ち合せ、香奠などさへ與へて立出でた。

(二) 小文吾、石濱に抑留せらる

小文吾は牛島の方へ渡らうと河原を指して赴く程に、どうしたのか、また新しき草鞋の緒ふつと切れた。結び合せようとうづくまつた折柄、うしろに窺ふ捕手の夥兵等、「捕つた」とかくる聲より早く、をどりかゝつてはたと蹴倒し、のしかゝつて組まうとするのを、小文吾伏しながら、手足を働かして逃げ飛ばし、蹴飛ばし、霎時はげしく戦つたが、大勢重なり合つてうかかゝるので、小文吾遂に道れがたく舞々と搦められてしまつた。

小文吾更にその故を解せず、「何といふ亂暴なことだ」と聲ふり立て、問ふところに、進み出でた捕人の頭、朱鞘の兩刀いかめしくさしたのが「我こそは千葉家の眼代畑上語路五郎高成だ。昨夜並四郎を斬り殺したのは汝であらう、汝が千葉家の重寶たる嵐山の名笛を所持するを、並四郎に看破され、後難をおそれて彼を斬り殺したと、並四郎が妻船蟲の訴へによつて明かである」といふ。小文吾はじめて知る毒婦の奸計、憎さも憎しと縛られた拳握りしめつゝ、言葉つまびらかに昨夜の次第を陳べたが、語路五郎まことにしない。折からいつの間にか木蔭に隠れてこの状を打戍つて居た船蟲、語路五郎が前に走り出で、跪いて涙含む様もしをらしく、「お役人様、あのぬすびとが言葉に迷はされてはいけません。口は重寶なものであります。論より證據その包の中には必ずかの笛がありません。虚實をご覽なされませ」といふ。語路五郎そこで小文吾が旅包を披いたところ、出たのは笛でなく、一尺あまりの粗朶の燃えさしである。これはと、意外におどろく語路五郎、殊に船蟲は呆氣にとられて、面をしかめたり、頭を搔いたり、且つ驚き且つ惑ふ様、黄檗を舐めた啞もこんなかと笑止である。小文吾は船蟲が強ひて與へようとする志は諒とするが、これを受けがたいので、假に受けて、ひそかに粗朶とすりかへ、笛を戸棚の中に残し置いたと語るを聞いて、語路五郎忽ち疑ひ解け、なほ念の爲め夥兵を遣はして、船蟲方を取調べさせたところ、「その尺八髓かに在つた」とて持ち歸つた。船蟲は小文吾に裏搔かれ、無念の形相凄しく、隠し持つた魚切庵丁逆手に抜き閃かし「夫の敵」と叫びつ

つ、女に似氣ない手練の早業、慌てる夥兵等を突き拂ひ、小文吾目蒐けて突いてかゝるに、小文吾は縛められ乍らもひらりと身をかはし、蹴倒して足下に踏まへ、夥兵等に繩かけさせた。

語路五郎、小文吾の寃を知つて恥入つてゐるところへ、今の手並のすぐれたのを見て尊敬の情が湧き起つたので、小文吾が辭し去らうとするのを押留め、「これは正しくあらし山の名笛、主君千葉殿の年を重ねて行方を求めわびたもの、今手に入るも全く貴殿の功である。かゝる功ある人を去らしめては、某が手落とならうから」とて、連りに引き留める折柄、領主千葉介自胤、獵の途にこのところを通りかゝり、語路五郎、事の次第を言上し、かの名笛を上つたので、自胤おどろき喜ぶこと大方ならず、「われ弱冠の頃あやまつて、小篠・落葉の兩刀と共にこの重代の寶器を失つてから、日夜心を傷めて、穿鑿怠りなかつたが、今日はしなくもわが手にかへつて、年來の愁眉はじめて開いた。かの犬田小文吾とやらは稀代の勇士と見える、若し浪人であつたら召しかゝへたいものである、厚くもてなしてつれて參り、馬加大記に告げ知らせ、彼より聞え上げさせよ」と、語路五郎に命じて立去つた。小文吾今は辭しがたく、長臣馬加大記常武の、語路五郎に命を傳ふるまゝに、城中に召されたが、一方船蟲亦常武の命によつて、その夜は村長のところへ預け置かれ、翌日獄舎に繋がるゝ事となつたが、その夜曲者があつて、村長を襲うて船蟲を奪ひ去つた。

さて石濱の城中には、長臣馬加大記威權をほし、にして、領主自胤は有れども無きが如きありさまであるが、語路五郎、小文吾を伴ひ來るや、大記、小文吾を別室に憩はせ置き、先づ語路五郎を

召して、一伍一什を聞いた。聞き終りて云ふやう、「その並四郎とやら、小文吾を殺さうとしたは事實だらうが、くだんの笛の失せたのは、昨日今日の事ではなく、必ずしも並四郎を賊と定むべきでない。それはとにかく、これ等の由を逸早くわれ等に告げないで、中途に主君に聞え上げ、かの笛をも直に主君に差出した事、甚だその分に過ぎた振舞で、不埒である。われを嘲るのか」と色を變へて罵るのである。語路五郎、恐懼に堪へず、冷汗に身を濡らすばかりだつたが、更に重ねての落度と云ふのは、かの船蟲をその夜何者にか奪ひ去られた事である。斯くて語路五郎は大記が怒りに觸れ、遂に禁獄せられたが、後間もなく牢死した。さて、千葉介自胤は、小文吾を召し抱へたい旨、屢々大記に語つたが、大記却つて悪様に言ひなしてこれを拒み、遂には「敵國の間者と見える、殺すべきでせう」など云ふので、自胤はいたく惑うて、「さらば、汝に預け置かう。よきに計らへ」とて、小文吾を大記に預け置くことゝなつた。

石濱の城に引き留められた小文吾は、その後何の沙汰も無く、手持無沙汰に日を消したが、第三日に至り「大記對面する」との使に依り、導かれて奥まつた小書院に行くと、大記傲然として上座に坐し、數名の武士の大内刀を佩いたのを左右にし、禮をも返さず、睨めつけるのである。小文吾、解しがたく思ひながらも、抑留せらるゝこと甚だ迷惑である由を申したところ、大記、「主君自胤の嫌疑おん身が上にかゝり、某再三諫むれども肯かれない、是非無」次第と答へて、さて、「そのうちに主君の疑ひも晴れるであらうから、なほ暫く逗留されよ」とて、僕にいひつけて邸内の離家に案内せしめ

た。二間に九尺の數寄屋で、とり圍んだ泉石のさまといひ、井桁のほとりに萩咲き亂れ、夕日に高い松の梢に秋蟬が鳴いてゐるのも風情がある。

小文吾、なほよく見廻すに、此處三方は築垣で南面に折戸があるが、外から堅く鎖したので、あれども無きに等しく、囚へて放つまいとずるのか、かの折戸押し破るとも、城門の堅めは脱することは出来ない。つくづく身の不運を歎きつゝ、目を重ねるほどに、秋逝き、冬去り、明くれば、文明十一年の春も彌生となつた。庭にもえたわか草、草の香を吹く春風にも思ひは遠く誘はれて、かの四犬士のことや、曳手・單節のことを思ひ、心はたゞ苛立つのみである。

さて、庭の草取り掃除などに通ひ来る僕のうちに、品七と呼ぶ翁がある。縁先に腰かけ、小文吾がつれづれの相手に、澁茶駈りつゝ、世間話に興ずるまでに馴染んだが、或日、小文吾の顔を見て、「いたく苦勞をしたまふ故にや、この頃めつきりと顔の色悪くなられた」などいひ、小文吾を慰めむとて、他に不運の人の例を引いて物語るうちに、はしなく犬塚信乃の噂が出た。小文吾、騒ぐ胸を押し鎮め、「その信乃とやらんが名は我も聞き知つてゐる、翁が知人でもか」と問へば、品七、「否、知人といふではないが、かの大塚の里人糠助といふ者には先代から由縁がある」と答へるので、同盟の友犬飼現八は父と知りあひの人であつたかと、小文吾そゞろに懐しく、なほ四方八方の物語に耽るうち、品七、「高い聲では云はれぬが、こゝの出頭馬加殿は、大へん腹のわるい人である」と、問ひもしないのに、ふと言ひ出して、小文吾に促されると、「おん身言葉寡く、憤み深い人と思ふので、話しても、仔細は無

からう」とて、徐ろに説き出す長物語、その次第をかいつまんで記せば、十五六年以前の事である。馬加大記常武は、自分一人權勢をほしいままにしようとして、門地相並ぶ千葉家の老臣、粟飯原首胤度、籠山逸東太縁連の兩人を除かうとはかり、縁連が徒に勇を好んで思慮の浅きにつけ入つて、彼をして胤度を殺さしめ、縁連をも讒言で陥れ、俸祿を捨て、逐電するの已む無きに至らしめ、又、胤度が古河なる成氏卿への進物としようとして自胤より預けられた嵐山の名笛と小笹・落葉の兩刀をば、人をして奪はしめた上、主君の命と稱して、胤度の長男夢之助といふ花の蕾の美少年にも腹切らせ、あまつさへ、胤度が妻稻城、及び五歳なる女兒をも殺して、なほ足れりとしないうで、胤度の妾の調布といふのが、相模國足柄郡大阪の山里にあつて生んだと聞こえた子をも求めて、殺さうとしたが、これのみは行方知れずになつたので、心に懸りながらも、是非無くそのまゝにさし措いた。

また、かの嵐山の名笛と小笹・落葉の兩刀とを、常武が内意によりて盗み取つたのは、かの破落戸鷗尻並四郎の所行であること疑ひない。刀は他に賣つてしまつたが、笛はあまりに由縁ありさうなので買ひ取らうと云ふものもなく、十五六年の昔より今日まで秘め置いたのである。船蟲が途中で消えて無くなつたのも、かの大記が人をして奪はしめたのであらう。それを口實として語路五郎を罪に死なしたのは語路五郎によつて舊惡の露顯を恐れたからであること、疑ひないと、品七の説くところ頗るくはしい。さて、如何にして品七が斯く精しく常武の祕密を知つたかと云ふと、大記が腹心の扈從で狙渡増松と呼ぶるゝものがあるが、大記の惡事に仕へて、その功頗る多いのにも拘らず、賞の少な

つたのに失望し、恨みの餘り右の次第を他に漏らしたので、今では誰知らぬ者もないといふのである。しかし、人盛んにして天に勝つとはこの事、皆大記が權勢に恐れをなして、これを領主に告ぐるもの無く、かの増松も大記がために人知れず毒殺されたとの事である。かく語り終つて、品七は聲をひそめ、「かういふわけだから御身も朝夕の食物に注意して、油断してはなりませんぞ」と、いとも忠實さうに囁やくのだ。小文吾、はじめて知るのではないが、想つた以上の大記の奸惡、たゞ嘆息するのみであつたが、品七が最後の言葉に思ひ合はする一條がある。それは、この日頃食後にはかに腹痛の堪へ難い事屢々あつたが、貯への薬も無いので、曾て莊助より聞いた例に倣ひ、かの感得の靈玉を取出して、或は口に含み、或は腹に押當て、不思議に苦痛を忘れて來たが、狙渡と同じ非運を免れ來つたのも、靈玉の奇特に依ることをふかく感じた。

やがて春過ぎ夏は來たが、かの品七の姿がたえて見えぬのはどうしたのだらうかと、或日僕に彼が消息を問ふと、「過ぎし月、こゝへ庭掃除に來た翌る日、食あたりで、にはかに血を吐いて死んだ」と云ふ。さては、品七が我への長物語、聞く人あつて大記に密訴したため、かの増松と運命を同じうしたのであらう、「我に毒の用心をすゝめたかの老人、却つて毒に中てられたか」と、小文吾はこの後いよく萬事に注意し、殊に食前には必ずかの靈玉を口にふくむのを忘れなかつた。

(一) 女田樂旦開野

馬加大記常武は、どうにかして小文吾をなきものにしようとして、毒を用ゐる事何十回にも及んだが、その験がないので、「彼奴いよく尋常の者でない、神仙不死の術を得て、生れつき鐵石の身かも知れない」と、心中大方ならず小文吾を怖れたが、翻つて思ふやう、「彼はまことに天晴の人物である、これを敵とする事甚だ不得策である。かの享徳の例に倣つて、自胤に腹切らせ、我が子鞍彌吾常尙を當城の主となさうといふ年來の大望も、自胤には鎌倉兩管領の後楯があるので、事なか／＼容易でない、思ひ返して徒に年月を経たが、かの小文吾を腹心につければ、十萬の味方を得たるにも勝らう」とこゝに懷柔のもくろみを定め、折を待つてゐると、このほど鎌倉より數名の女田樂が城下に來たのである。大記いたく聲色を嗜み、優娼歌舞を愛すること、人に超えたので、早速聘んで、その技を觀、酒宴に興を添へた。一夕、老僕を小文吾のところへやつて、「一盞を侷めたいから來るよう」と申入れ、白章の紋染抜いた黒の袴一具、取揃へて贈つた。

小文吾、おもひがけ無い大記が懇ろぶりに、これには仔細のあること、考へたが、「欺し討ちにでもしようといふのだらう、此期に及んで何を臆することがあらう」と、潔く觀念し、贈られた衣服を着して、導かれるまゝに奥座敷に通ると、大記自ら恭しく出迎へ、手をとつて上座に推し据ゑなどし、下にも置かぬ款待ぶりである。なほ、妻戸牧、一子鞍彌吾、七つばかりになる女の子まで紹介して、恭敬その限りを盡くすので、小文吾油断せず、その爲すところを窺つて居た。さうかうしてゐるうちに日は暮れて、ともし連ねた銀燭星の如く、女童等がとり運ぶ珍味佳肴、杯盤善美を極めた。酒やう

やくなげ關なはになつて、馬加家の四天王とて、渡邊綱平、卜部季六、白井貞九郎、坂田金平太など、鬚いかめしき荒男ども座ににじり出て、得意になつて名乗るのである。「頼光のそれをも欺くばかりの天晴の御器量とお見受けする」などと小文吾が讚めると、圖に乗つて、「残念乍ら、まだ腕を切るべき鬼女にも逢はず、土蜘蛛などの化け物も出て來ない。野飼の牛に心をつくるが、鬼童丸もかくれて居ない。生野の道は遠いので、大江の山も遙かで」と、臺詞もどきの廣言に、大記、さすがに傍痛く思つたのか、荒立つ男共を叱りつけて座を退け、卜部季六をのみ留め置き、かねて次の間に侍らせ置いた女田樂をさしまねいた。齡は二八ばかりであらうか、摺箔縫箔した六尺袖の表衣に雑色の下襲あきねにして露を含める花の顔かほ、風になびく柳の腰のなよくと、進み出で、座の末にかしこまつた。大記の命ずるまゝに、季六、酔に任せてだみ聲高く、「東西々々、敬つて告げたまつる、罷出でた少女子は、薪樵たきぎる鎌倉下り、名は且開野あき野と呼ぶるもの、當所へは初度の見參、咲きも揃はない初花に降り注ぐ雨の足拍子、扇の風の手毎のひまに、いさゝかあやまつことがあつても、それはおほ目に御覽下さるようになどと節をかしく述べをれば、縁側に並んで居る數多の少女らは、大小の鼓に横笛の音を競はせた。

且開野あき野しづかに立上つて、「峯の白雲谷の水、源遠く來て見れば、げに玉銚たまはこのみちとせに、實なるてふ桃の林かな。」と唄ひ出でた、かの山路の桃の一曲、霓の衣の袖軽く、かざせる桃の花はな釵かんざしに、光照り添ふふ燭もの、影を亂して舞ひ終つたのである。さて、一曲を舞ひ終つて、はうびの品肩にかけて退ける

頃には四月末のみじか夜既に明けちかきに、小文吾辭して退かうとするのを、大記しきりに押留め、窓邊に導いて、「有名な臨糸亭の曉の景色を觀て下さい」といふ。小文吾、辭退しがたく、側に置いた腰刀を取つて立たうとすると、白銀で造つた桃花の釵、いつの間にか落ちかゝつて、刀の緒にはさまつた。訝かつて、「何人が落したのだらう」とはした女等に問ふと、「あの且開野がものですよ」といふ。何氣なくとり捨て、大記の後にしたがつて行くと、大記、高欄おほしほの端に出て、うす白む曉に浮ぶ遠近の景色を賞してゐる。臨江亭また對牛樓とも云ふ名の如く、前面に相對する牛島、白銀の夢を敷いたやうな隅田川の水に伏し、彼方かなたにけむる柳島は、雨を含んでほの青く見える。

朝の光に輝いて點々と浮べる帆船のさまざま面白く、立ち續く村々の朝煙に、鎌田・浮田・行徳の浦も目の下に望み心は恍とするのである。大記、小文吾が肩をたゝいて、「犬田殿、あれあの船をこらんなさい。帆をあげて走るもあり、又、水際につながれたのもある。今のおん身も丁度あの繫つながれた舟のやうなもの。又君は船、臣は水と聞くが、水よく舟を浮べるが、時あつて舟を覆くつす事もあるもの」と徐ろに説き出でた心中の密謀、「おん身を推して軍師としよう。事成つた曉は葛西半郡かさいはんぐんをとらせよう。承知されぬかな」と、他事も無いやうに囁いた。小文吾、聞くより容かたちを改め、「これはまた思ひがけないことを承ります」と、面おもてを冒して順逆じゆんぎやくの理を説いたので、大記心中怒りをなしたが、忽ちにつこつこと打笑ひ、「云はるゝ趣道理にかなつてゐる、われも亦さう思ふのである。今の言葉は戯れで、御身を試みたまでのこと、思ふにまして憑たのもしい一言、心にかけて下さるな」と打ち消し言ひくるめ

て退いた。

さて小文吾は自分の室にかへり、縁に立出で、口嗽がむと淨水盥に立寄る程に、笥の水を傳うて一葉の木葉が流れ来た、何氣無くとりあげて見ると、その葉の裏に書いた文字がある。

わけ入りし葉絶えたる麓路に

流れも出でよ谷川の桃

と讀まれた。昨夕酒宴の席上で、「あの桃源の俳優になつた且開野がわざ」とは、谷川の桃の文字にも知られる。わが腰刀に簪を挿んだのも意あつてのわざであらう。これまた大記が我を誘はうとする計策と思へば心安くない。昨夜の直言は彼を憤らせたことだらう。この返しをしないでは止むまい、それより小文吾一しほ用心して自ら護るのである。

かくて十日ばかり経た、をりからの五月雨に、檐の玉水の音もものうく、日頃の疲れが出たのであらう、うたゝ寢を呼び醒まされて、つと見ると、雨はやんで雲間の月の光さやかに、障子に人の影がうつるのである。「すは曲者ッ」と身を撞ぐる此時遅く、あつと叫ぶ聲して、人のたふれる音がした。小文吾驚いて、障子を開けて見ると、手に双を持つたまゝ仰ぬけに斃れたのである。その頂のあたりより、血の流れるのをよく見ると、かの桃の花の銀の簪を盆の窪の眞中より吭まで打ち込んだのである。さて、何者ぞと見ると、大記が股肱の若黨、卜部季六である。事の次第、大方推されたが、不思議の少女であるよなど思ひつゝ、屍をかくしたりしてゐると、月は忽ち雲にかくれて、朧となつた松

の梢を、する／＼と傳うて此方に堀を乗り越ゆる曲者がある。夜目にも分るばかり頼被りの手拭の端をくはへたのが、ひらりと庭に降り立つて、忍び足によつて来るのを、小文吾待ち構へて、きらりと引抜く刀の下を右によけ左に避けつゝ、「犬田ぬし、私です、早まつて怪我をなさるな」といふ聲聞くと女子である。「さういふのは誰だ」と透かして見ると、かの且開野である。「且開野であつたか、夜更けてから何で来たのか」と詰られて、「何で来たとは、つれ無うございます」としなだれかゝるのを、「みだりがはしい。我を誑かさうとしてか」と、小文吾屹となる。「誑かすとは情なうございます。この花簪を血に染めたのは誰のためだとおぼしめます。盡す誠のかなはなければ、疾く／＼殺して下さい」と死を辭せぬ覺悟の體に、大記がまはしものでないことは、全く明かである。小文吾「どうしようといふのか」と問へば、「疾く／＼連れて逃げて下さいまし」といふ。「逃げられるものならば、誘はるゝを待たうや」と小文吾のなげくのを、且開野、「それは手段があるので。私この二十日あまり馬加殿に留められて、内外の事よく知つて居ります。出入に切符がありますが、これが手に入らば出づるも、入るもいと易いこと。あすの夜は必ずその切符をもつてまゐりませう。一しよに逃げて下さい」といふ。小文吾、喜んで、明夜を約して且開野を返したのである。

(四) 對牛樓に毛野、讐を塵にす

翌れば五月十五日、この日は朝より雨降りそゝいで、未の比から霽つた。この日は一子鞍彌吾が誕

生日なので、大記は人々を集へて、賀筵を開き、主客歡を盡すこと午の刻より子の刻に及んだが、小文吾は旅の装束整へ、ひとり殘燈に對して、ひたすら且開野の來るのを待つてゐた。時に母屋の方に當つて、頻りに人の騒ぐ聲がする。小文吾耳を欬て、「且開野事成らず、見咎められて捕はれたのか」と、心もとなく胸ときめかす程も無く、築垣飛び越えて、飛鳥の如く跳り入つた者がある。誰かと見れば且開野である。おどろの如く髪振り亂し衣に鮮血を染め、右手には晃々たる刃を持つたが、「犬田ぬしく、どんなに待ちかねて居られたでせう。辛うじて約束の切符が手に入りました。これごらんさい」と縁に投げ出すのを見れば、思ひがけない馬加大記常武が首である。

驚き尋ぬる小文吾を、且開野打見て、莞爾と笑みて申すやう、「あやしみたまふも道理。わが身はもとより女でない。すぎし寛正六年冬十一月、馬加常武が奸計の讒訴に陥れられて、籠山逸東太縁連に撃たれた千葉家の老黨、粟飯原首胤度が遺兒で、犬坂毛野胤智とて、二年母の胎にあり、幸に敵の刃を免れ、相模足柄の里に生れたもの。母は千葉家の聞えを憚つて、女の子と偽り、流浪して女田樂の群に入つたが、十三の時、母が末期の遺言で、我身の素性及び父が横死の事を知り、此に於て先づ石濱なる常武を討ちて後、行方をくらました縁連を尋ね討たうと、それより一圖に讐討に心を傾くる事三年、田樂を學び、諸般の武藝を鍛へ鍊つた甲斐があつて、簪の銚銀、あやまたずおん身の刺客を斃すまでになつた。今宵、鞍彌吾の誕生の祝とて、かの對牛樓の宴に召されたのが絶好の機會と、客散り盡くして、大記親子主従の彼方此方に酔ひ臥すのを見て、先づ大記が枕邊に突立つて、大聲に名乗りを

擧げ、一刀のもとに首打落し、驚き覺めて討ちかゝる鞍彌吾をも其場を去らず斬つて捨て、さて渡邊綱平・白井貞九郎・坂田金平太などの面々をも片端より斬り殺し、大記が妻戸牧、女兒鈴子に至るまで、敵の片割皆残り無く斃し盡くし、さて、大記が血を袂にひたして筆に代へ、かの樓上の壁の面に、

爲父兄一鑿讐。爲舊主鋤奸。自今而後。知君之爲君。勿使二孺葛復倒四絹。

文明十一年己亥夏五月十六日曉天。粟飯原首胤度遺腹子犬坂毛野胤智十五歳書。

と書き留め、さてこの首を掲げて來たのである」と言葉せはしく物語るのである。

小文吾、すつかり感心してしまつて「世に珍らしきわかものである」と、言葉もなく見成つた。毛野なほ言葉を繼ぎて申すやう、「色に事寄せ、おん身に交りを求めたのは、あたら豪傑を非業の死に遭はせむ事を恐れてある。それがし馬加の許に在る間、夜毎に臥床を抜け出で、城の要害、堀の深淺を十分に究め、逃がれ去るべき所をも定め置いた」といふのをきゝて、小文吾益々感嘆し、導かるるまゝに走り出た。毛野は先づ築垣の外に出で、錠を振ち切り諸折戸のとびらを開いて小文吾を出し、城の搦手の東の土手に到り、豫め用意した太い麻繩の端に鐵丸を着けたのを濠の彼方に抛つと、水際

の太い柳の幹に三捲四捲搦みついて、引結べるやうになつた。即ち繩の此方の端をこの岸の松に結び付け、小文吾を自分の背に負うて、その繩の橋をば走るが如く渡り了せたのは、田樂の遊技に鍛へた離れ業、人間業とは見えないのである。さて、逃げむとする時、城中俄かに物騒がしく、太鼓の音の鳴り響くは、人數を集むるらしいのである。二人は先づ墨田の流を彼方に渡り、岸に走つて渡を求め

だが、生憎あはれ繋つないだ舟も無い。夜はやうやうに明け放れて、後に迫る人馬の聲、二人が進退すすたこゝに谷まると見えたところに、千住の方から流れのまに／＼漕ぎ下つた柴舟がある、二人は天の佑たすけと手を擧げて頻りに呼んだが、舟夫舟を寄せようとしな。一町ばかりは岸に添うて追ひかけたが、毛野苛いらだ立つて、ひらりと身を躍らし、かの舟に飛び入つた。舟夫を膝下に踏み据ゑ、漕ぎ戻さうと軀を推したが、箭よりも早い出水でみづの勢ひ、進退思ふに任せないで、舟は見る／＼川下遠く流された。

小文吾、乃ち諸肌脱もろはだぎ、ざんぶと水中に飛び入つたが、濁流高くをどつて、拔手のすゝみ自在ならずどうしやうとまどふとじろに、大平駄の船一艘漕ぎ下るのである。小文吾すなはちその舷に手をかけ、ひらりと乗り移れば、舟子共おどろき騒いでもる聲ふり立て、「この竊盜奴ぬすびとが朝ばたらきに、米を盗み取らうとするのか、括つてしまへ」と罵りつゝ、うちかゝる軀からだ權の眞中を、小文吾むんづと掴んで奪ひとり、眞甲に振あげて撃ち挫がうと睨まへた時、その腕にとりすがつた舟長の、あわてた聲を戦はして、「古那屋の若旦那、しばらくお怒りを鎮めて下さい」といふ。何人かと見れば別人でない、豫て相識る大江屋の僕依介である。小文吾これはと打ちよろこび、いそがはしく事の次第を告げて、毛野が乗つた柴舟のあとを追はしめたが、因縁未だ熟さないものであらう、品川沖の見ゆる所迄漕ぎ下つたが、かの船は遂に見えない。是非無く思ひ諦めて、依介が「是非に告ぐべき事がある」と言ひつゝ、船子共の前を憚る様子ようすの訝かしきまゝ、本意ならねどその乞ひに任せて、市川に赴いた。

さて、大江屋に赴き小座敷に導かれて待つほどに、どうしたのか、妙眞の聲もせず、大八の姿も見

えないで出て来て茶をすゝめなどし、もてなす依介の主顔おもてがほなのも心得ない。依介の徐ろに語り出でたのは、かの暴風舵九郎がこと、親兵衛が神隠しとなつたこと、妙眞も文五兵衛も安房に赴いて、里見殿の扶持を受くるに至つた事、行徳の古那屋は住む人も無くなつて人に賣渡した事、大江屋の跡目はこの依介に譲られて、妙眞の姪の水滲みぞといふのを妻合めあはされた事、聞くに驚かるゝ事のみであるが、さて、もう一つ申上げにくい事があるといつて、涙ながらに語り出でたのは安房の文五兵衛が、今年二月十五日に、老病で眠るが如く逝去した事である。さて依介は、小文吾に渡しくれよとて、文五兵衛より預けられた百兩の金を取出すに、小文吾は猛き心にも、悲しみの涙とゞめあへず、歸つて見れば家もなく、親も無く、あゝ、あの慈愛深い父上は、とう／＼再び歸らぬ人となつたのかと思ふに、痛恨胸をとざして、天になげき地に哭くのである。

小文吾はこれより幾日かを大江屋に滞留して、父の喪に籠り、菩提寺の香華料、依介への禮金等、残るところなくすませたのである。「安房におもむいて、文五兵衛様の墓に詣で、里見の殿様に御禮を申しあげ、又、ひとり他郷に取りのこされて、心細くあかしくらさるゝ妙眞さまをなぐさめて下され」と依介がすゝめても、「八犬士そろつた上でなければ、ひとりかの地におもむくは不義である。且つ曳手・單節のゆくへもわからない今日では」とて、小文吾は更に旅装を新たにし、行方定めないさすらひの旅に出たのである。

五、現八と大角

(一) 赤城山の冤鬼

かの荒芽山の厄難で、友とはぐれた犬飼現八信道は、深山に道を失ひ、一旦信濃路に分け入つたが、人々の消息絶えて知れないので、曳手・單節を伴つて行徳に歸つたはずの犬田小文吾を訪はうとし、引き返して、その月の末に行徳に着いたが、古那屋は空屋となつて、勿論小文吾も歸つてゐない。文五兵衛は市川の妙眞と共に安房に赴き、親兵衛は神隠しに遭つたなど、近隣の人々の語るを聞き望を失つて、その夜出船に便りを求めて、江戸に赴いたが、なほも心の遺つた信濃路を指し、日かず重ねて、岐蘇の御坂も過ぎ、あふみの湖邊に夕波千鳥を聞いて、京都にのぼつたが、應仁此方の兵火のあとをうけていたく荒れ廢れたが、さすがに残るむかしのさまもなつかしく、文學武藝の師の門戸を張るものも少くない。現八こゝに暫しとどまつて、擊劍柔術を人に教へ、かたぐ、尋ねる人のうはさを心にかけてあつたが、三年はいつしか過ぎて文明十二年となつた。再び東に向つて旅立ち、近江路から中山道を下り、日を経て上野なる逢坂の里まで來た。こゝから荒芽山へは程遠くないので、行つて過ぎし窮厄のあとを忍び、忠臣孝子義姑節婦の跡をとぶらつたが、更に下野に志して、前に過ぎた路を

行き、再び逢坂まで取つて返して高崎川を渡り、前橋を過ぎ、下野足尾の里に來た。

秋の日なほ高く、五六里は未だ行かれようといふころ、憩うた里端れの一茶店の壁に、一挺の鳥銃と六七張の半弓とをかけたのを、怪しんで問へば、「これより行手の庚申山の麓に、妖怪出で、人を惱ます故、旅客のために備へ置くので、鳥銃は主人が旅客に頼まれ、路案内に用ふるもの、弓箭は旅客の求めに應じ、護身のために賣り渡すもの」といふ。妖怪と聞いて現八あざ笑ひ、「そんな事のあらう筈がないと云ひ消すのを、主人、眼を睜つて、「おん身は他郷の方で、事の次第をお知りにならないから、疑はるゝのもむりはないが」とて、次の如く語り出した。

「庚申山第一の石門たる胎内くゞりから、奥の院までは、七百年間人の到る者無く、且つ、年經る山猫住んで變化自在であるといふ傳説があつたが、こゝに、山下なる赤岩といふ土地の郷士に赤岩一角武遠といふ武藝の達人があつて、先年この山の奥を窺めようと思ひ立ち、家族親戚門弟等がひたすらに止めるのを耳にもかけず、どこまでもと山深く入つて、その日は遂に歸らなくなつた。されば、赤岩一家をはじめ里人等皆騒ぎ出し、翌る日驅り催された一隊五六十人、手に手に弓箭・鳥銃・竹槍などを掲げ、かの庚申山に攀ぢ登り、終日溪々山々を尋ね歩いたが、一角の行方更に知れない。絶望して引き返し、かの胎内くゞりを出ようとする時、一角、ふいと岩の間から現はれ來つた。人々、中に圍んで、その無事を祝しつゝ、さてあつた次第を問ふと、一角、かの石門の奥の奇勝を説くこと甚だ詳かで、さて、あやまつて足踏みすべらし谷の底に陥つたが、路無き路を攀ぢ登つて、やうやう今歸

途に就いたところだと語る。人々且つ喜び、且つその剛膽を賞めそやしつゝ、共に伴つて歸つたが、これより一角が庚申山探検談は人々が話題として取沙汰され、一角が武名は近隣に高くなつた。これは、寛正五年多十月の事だから、今より十七年の昔なのである。さて、其頃から一角の後妻の窓井といふのが、みごもつて男子を産んだのを、一角喜ぶことかぎりなく、牙二郎と名づけてたゞならず寵愛し、先妻の産んだ角太郎といふ總領をいたく憎んで折々は手荒い折檻をさへ加ふるのを見兼ねて角太郎が實母の兄で、近郷なる犬村に住める犬村蟹守儀清といふ郷士が、六歳の時から養子に貰ひ受けた。この角太郎至つて孝心ふかく、しかも天性頗る非凡で、長ずるまゝに文武兩道の達人となつたが、十八歳の時、蟹守の娘雛衣と結婚した。さてその後犬村の養父母も亡くなり、又、一角の後妻の窓井も世を去つたが、一角は窓井無き後、妾を置けども、何れも長く辛抱せず、幾人と無くとりかへた後、武藏の方より流れ來た船蟲といふ女が落着いて、終に正妻にのぼせられて二年を経た。然るにこの船蟲極めて善からぬ女で、一角をそゝのかし、赤岩・犬村兩家を一に合せて犬村家の財産を奪はうとはかり、角太郎夫婦を赤岩方に招いて共に暮したが、船蟲は、みごもつた雛衣に、岳父一角の胤を宿したなどあらぬ事を云ひかけて難癖つけ、親の命とあらば火水をも辭せぬ角太郎の孝順をよき事にして、無残や生木を裂いて、雛衣を離別させ、さて、次には角太郎をも勘當して、うまゝと犬村家の財産を横領した。氣の毒なのは角太郎である。世をあぢき無く思うたのであらう、赤岩村と犬村との間なる返壁といふところに草庵をむすび、號は半俗で、その行ひは法師も及ばないと、かしこより來て云ふ者もある。私は獵人であつたころから、いたく肉を嗜むかの一角どのを花客としてしたしく出入するゆゑ、かく一家の事洩れ無く分つたのである。」

と、精しく物語るに、現八も思はず耳を傾け、「ほんとにさまざまの浮世ではある」と、嗟嘆久しかつたのであるが、さらばこゝまで來た甲斐に、我も一度はかの山にのぼらうと、かの圓竹の半弓に獵矢兩條添へたのを買ひ取り、主人の「山路で日が暮れるであらうから、今日は思ひとまるように」と切にいふのを振り切つて、山を目指して立出た。

かくて登ること二里餘り、峠をさして急いだが、道に迷ひでもしたのだらう、行けども行けども嶺村にはつかない。頃は九月初めの日脚短く、既に暮れ果て、深山の闇、漆よりも濃いのである。さすがの現八も弱り果てたが、なほ幾十町走つてゆくと、思ひがけ無くも、大石門のそばまで來た。この時入り残つた七月の月が雲を出でて、山の峽になほ幽かな光を洩らしてゐるのを辿つてうかゞふと、これは先に茶店の主の話に聞いた胎内くゞりといふのに似てゐる。「これはくゞり、迷ひも迷つたものだ」と且つ驚き且つあきれつゝ、是非なく、「今宵はこゝにあかして、翌朝里に下らう」と心を定め、かの石門のそばに腰を下したが、深山の夜氣寒く眠れないので、弓箭をかたへに引きつけて、なほ更くる夜を成つてゐると、月は忽ち入り果て、再びふかい闇となつた。

かゞやける星の光を仰ぎつゝ、丑滿の刻と思はるゝ頃、東の方より、ひらめきながら飛び來る二つの光がある、「天狗火か、鬼火か、待つてみた」とばかり弓押取つて、樹立を盾にうかゞふと、その火

は、次第に此方に揺れ來り、近づくまゝに大きくなり、あたりを照らすこと炬火に異ならない。瞳を凝らしてよく視ると、これは妖怪の眼の耀くのである。面は古りたる虎のごとく、口は左右の耳まで裂けて、鮮血を盛れる盆より赤く、眞白な牙は劍を倒さに植ゑたやうで、幾千根もあらう長い髯は、雪に閉ぢた柳の糸が、風にみだれて戦ぐにも似てゐる。しかしその形は宛ら人に異ならない。腰には兩口の大刀を横へ栗毛の駒に騎つたが、その馬亦頗る變つた形で全身すべて枯木の如く、處々に苔むして、四足は樹の枝、その尾は芒である。なほ左右に従ふ怪物があるが。一つはその面藍より青く、一つはその色赭石のやうである。さて妖怪主従は、何事か語りあひ、或は高く笑ひなどして、徐々と此方に来るのを、きつと見定めた現八は、する／＼とその樹の梢に攀ぢのぼり、かの圓竹の弓に箭をつがへ、兵と射ると、ねらひあやまたず、かの馬上の妖怪は左の眼を深く射られ、どうと馬より落ちた。と、左右の怪物は、一方は主を背に負ひ、一方は馬を牽いて、もと來た方へ逃げ失せた。

現八思ふやう、あのころ、經た妖怪が、一箭ぐらゐで脆く死なうや、眷屬同類を驅りあつめて襲ひくること必定である。居所を換へて彼奴等を惑はすに如くはないと、なほ山深く分け入ると、月は入つたがあやしく牙えまさる星の光朧夜よりも明るく、音に聞く石門、燈籠石、洪鐘石など聳え列なる奇巖怪石のすがたが夜目にもそれと知られる。目まぐるしいばかりの難所を、難なく飛び越え攀ぢ登つて、はや奥の院も近からうと思はるゝところまでも進んで行つた。然るに、怪しや、行手の岩室の中、とぼ／＼と火を焚いて居るものがある。こゝにも妖怪がゐるのかと、現八きつと身構へし、弓

に箭を番へようとする時、岩室の中からかほせい聲で、「私は怪しいものでなく、もとより妖怪ではない。あなたが今宵、私の讐を討つて下されたよろこびを申さうとて、こゝに久しく待つてゐた」といふ。現八、妖怪が我を誘ひ寄せようとするかと容易く心を許さなかつたが、「なほお頼み申したい事もあり、どうぞこちらへ」と切に乞ふので、弓矢を捨て、かの岩室の中に入つた。

岩室の人は、歡び迎へて柴折つて焚いたりするが、燃えあがる火かげによく見ると、齡は三十をこしても居らう、形體骨立ち、顔色蒼ざめ、縹色の仁田山紬に龜甲形の紋つけた小袖の、幾月日の風雨に海松の如くたれたのを着てゐるが、そのさま何となくこの世の人とも見えない。「一體御身は何人か」と怪み問ふ現八が言葉に答へていふやう、「語るも苦しい過ぎ來し方をかぞへると、十七年になります。長々しい間の事を心靜かにお聞き下さい。さきにあなたが射落した妖怪は、胎内くぶりのほとりに住んでゐる山猫の化けたものです。幾百年を経て、大きな犢にひとしく、猛きこと虎を凌ぎ、神通自在なので、一山萬獸の王となり、此處の山の神、土地の神をまで奴僕なづかの如くこき使ふのである。かの二人の従者と見えたのは山の神と土地の神で、乗つた馬は木精です。さて、かの山猫を何故に私の讐と申すかといふに、はづかし乍ら私はこれ生きた人間でない、かの山猫のために噛み殺された、この山麓赤岩村の郷士、赤岩一角武遠と呼ぶ者の亡魂であります。寛政五年のはじめ、血氣の勇に任せて、この山の奥の院を探らうと分け入つたところ、石橋のほとりで、あの山猫に噛み殺されましたが、私の後妻の窓井の容色に想をかけたかの山猫、私が貌と變じ、尋ね來つた里人をたばかつて里に下り、そ

れより全く私に化けおほせて、窓井に牙二郎といふ子を生ませましたが、窓井は妖獸のため精氣を吸ひ盡くされて死んでしまひました。その後數多の妾を置きましたか、皆妖氣に冒されて、或は死し、或は食ひ殺された中に、近頃來た船蟲といふ妾のみは、邪智逞しく慾深く、行ひ汚れた淫婦なので、同氣相求めて恙なく、遂に本妻にさへ据ゑられました。あはれむべきはせがれ角太郎及び媳雖衣で、父の仇なる妖獸をそれと知る由も無いので、如何なる苛酷の待遇を受けても、曾て孝道を失ひません。妖獸の餌食とならうとした事もいく度だつたでせう。しかも角太郎の身には神佛の加護がある上、感得の瑞玉を所持するので、毒牙にもかけがたいのでした。しかし、執念ぶかく絡はるわざはひの、なほ數多いなやみに我子夫婦を哭かせようとするのでせう。願ふはわが子を助けて、かの妖獸の害をのぞき、かたきを討たして下され」と、頼むのである。

現八かの茶店の主に聞けると思ひ合せ、「さてはあなたがその赤岩殿にてあつたのか」と、事の不思議にしばしは言葉も無かつたが、「仰せのこと承りました。必ず、あなたの本意を遂げさせ申しませう」と誓つたので、一角が靈、喜ぶ事大方ならず、「あなたは我兒と宿縁があります、必ず扶けて下され」と念を押して、さて、差出せる證據の兩種の品を見れば、一は短刀、一は鬮、短刀は山猫と鬮つたもの、鬮はおのれの遺骨である。かうしてゐるうちに星落ちて東の山の端が白んだので、一角「今は時が來ました。幽明道を異にしてゐるので、久しくこゝにお話しすることは出来ない、さらば」とばかり、曉の光に影を消した。現八、「犬村角太郎こそ、同じく靈玉を所持する人、まさしく、八犬士の一人だ」と思ふと、心勇んで曉かけて山を下るのである。

(二) 節 婦 雛 衣

現八はその明け方に山を下り、その日の巳の刻ばかりに返壁の里の犬村角太郎が庵をおとづれた。柴垣の此方から先づ内の様子を覗ふと、樸材の柱萱の檐、二間の竹縁、三尺の持佛棚、これより奥は見えないが膝を容るゝに過ぎないほどであらう。蝸牛は壁にぬめりを遺し、こほろぎは軒の落葉の下になつてゐる。年のほどは二十一二とおぼしく、色白く唇紅に、眉秀で、居丈高いわか者の、月代のあと黒く延びた髪を藁でうしろに結び下げ、身には薄鼠色の袴の衣唯一領着て、黒い輪袈裟を掛けたが、片折戸の方を正面とし、新藁の圓座に結迦趺座し、頂には菩提樹の珠數を掛け、口には青松の葉を含んで、合掌、觀念の眼を閉ぢてゐた。前なる机には、經文五六卷、小やかな鐸一つ、青磁の香爐より立ちのぼる煙は、人の命に思ひくらべて、修行してゐるのであらう。この人こそ犬村禮儀であることを知るや、現八柴の戸を敲いて、「卒爾ですが、私は犬飼現八信道と申し、犬村ぬしに用事あつて參つたもの。こゝを開けて下さい」とおとなうたが、裡なる人は無言の行と覺しく、ちつと瞑目せるまゝ動かない。「行が終るのを待つて再び訪はう」と、かたへに退いて待つてゐると、日はいつしか晝近くなつた。かういふところに、前面から、身なりの賤しくない、容色あでやかな、年若い女がしをしをと歩み來り、かの枝折戸に身をよせかけて、裾にまつはる萩桔梗の露をわが涙と見てさめくと

泣くのは、角太郎が娘雛衣である。

しばらく唯泣いてゐたが、やうやく思ひ返してか、幾度となくおし拭ふ涙を袖にをさめえず、眞白く細い手をあげて、ほとくと戸をうち敲き、「我が夫、こゝを開けて下さらぬか」と、二度三度訪なうたが、内にいらへの聲もしない。「あまりつれ無のお心」と、泣き崩れる身を戸によせて、袖打ちかへし、搔口説きくつて怨みごと言ふのを聞くと、父の忌中で臥床を共にせぬに、腹の膨れたのは、かくし男の胤であらうとの濡衣を着せられたが、神懸けてさういふ覺えがありませんねば、異なる病を受けたのでもありません。死んで證明を立てる覺悟を極めました。暫し許して言葉を交して下さいといふのである。繰返し繰返したが、内なる人のうけこたへは更にならない。遂にはすゝり上げ、轉び伏して泣き入つたが、やがて涙ををさめ身を起し、ふかい覺悟を見て立ち去つてゆく後姿を思ふと、角太郎亦木石でないから、合掌の拳ゆらめき、口にくはへた松の葉もこゑ立て、靡くが如く、斷腸の色現れたが、たちまち思ひかへしたのか音もしない。

現八は雛衣が若しや淵川に身を投げでもしないと、心許無さに後追ひ行かうとする時、草庵の中に聲あつて、「犬飼氏とやらお待ち下さい、庵主唯今解行した。どうぞこちらへ」と呼ばはるに、振り向いて見れば、角太郎は早や庭下駄を穿いて立出で、柴の戸のかけがねを外して、いざと再びうながした。現八は、雛衣の事が氣にかゝるが、今更辭みもならず、引かるゝまゝに座に通じ、初對面の挨拶をする。現八は、先づ身の素性來歴より、不慮の厄難に逢ひ、別々となつた異性の兄弟を尋ねて諸國

を巡る次第を述べ、主人が文武にすぐれ、且つ孝心ふかい人であるのを聞き、高名を慕うて訪ね來た由も告げたが、昨夜庚申山での一條は、かの幽靈の戒めもあり、しばらくこれを胸に秘めたのである。

一見、意氣相投じた角太郎は喜ぶこと甚だしく、「昨夜夢に七頭の巨犬を見、その中一頭の近く走り來たのが、いとしいまゝに抱いたところ、我身も共に犬となつたと覺えたが、これこそ、あなたに訪はれる前兆だつたのです。あなたが犬飼氏で、私が犬村氏を冒せるも、不思議な縁である」など語る現八、すなはち膝押し進め、「それは正夢にちがひない。私の義兄弟等は、犬塚信乃成孝・犬川莊助義任・犬山道節忠興・犬田小文吾悌順・大江親兵衛仁、これに私を加へて六人ですが、その外に同因果の人で未だ逢はない二人がある筈です」と告げる。角太郎これを聞いて、心頻りに動けるさまで、その因果とはどういふのかと問へど、現八は語るに早いと言つて答へず、「主人は感得の靈玉を持つてはるませんか、もしやその靈玉に禮の一字が現はれてはるませぬか」と問ひかけられて、角太郎驚き、「どうしてそれを知られるか。實はある瑞玉を年來祕藏して居るもの」といひつゝまた嘆息し、その玉に就いて語り出でた。

「私が生れた時、母正香は痘瘡癩疹のまじなひに、加賀の白山權現社頭の粒石を取り寄せたが、それは石ならで禮の字の現はれた玉だつたから、母は私の護身囊に納れて置きました。すると三歳の時、脾胃で命危かつた時、かの玉を水に浸し、その水を吞ませたところ鍼灸藥餌も更に驗無かつた病立地に本復したといふ不思議がありました。それより病ある毎にその靈玉の水を用ゐますが、効驗誠に神のや

うで、先頃、妻雛衣ひなぎぬにはかに激しい腹痛に犯され、百薬しるしがなかつたので、試みにかの玉を浸ひした水を服のませたところ、繼母その玉を見ようとして、雛衣が持てる茶碗を搔取らうとしたから、雛衣慌てふためいて、あやまつて水もろ共にかの玉を嘔下のひくだしたのです。雛衣が夫に近づかないで懐胎のさまがあるのは、それからの事」と語り終つて、また太息をついた。現八はじめて雛衣が懐胎の事情を知り、雛衣が柴の戸の外から情を訴へたのを立ち聞きしたことを告げ、「さらば何故に、罪無きことを知りながら、その死に赴くのを留めなかつたか」と詰ると、角太郎の答にも、その理由がある。たとひ雛衣わが底意を知らないで、我を恨んで死なうとしても、瑞玉すいぎよく今なほ腹に在る以上、水に入るとも溺れず、火に入るとも焼かれることがないといふのである。

かくて、兩人は、澁茶汲みかはしつゝ、文武の物語、それからそれと盡きない。現八は、角太郎が博識多才と、その流るゝごとき辯舌とに、ひたすら感じ入つたが、二人が話半ばに、戸外に數多の人のけはひがした。門前に昇かきすゑられた轎かこから、立出でたのは別人ならず、赤岩あかいは一角武遠たけとほが妾上りの妻、角太郎が繼母の船蟲である。角太郎は、折悪いと現八を紙門かみまの彼方の次の間に避けさせ、恭しく出で迎ふれば、船蟲、鷹揚たかやうに上座につき、しばしあちこち見廻し、疊む扇を側において、膝をすゝめ、「角太、秋も早やなかばを過ぎて、朝夕身に沁む風をつめたいのに恙も無いこと、何よりのよろこびです。親子口舌くせうのまぢがひから、かう引き別れて居るので、安否を問はうよしも無く、胸苦しき知らぬ世間の人は、あの鬼のやうな繼母まははが、いびり出したなどと云ひます、とかくにくまれ役やくは私たちで

す。」などかこち顔なのも、しら／＼しい。今日の船蟲がさま、いつもにも似ず、又をかくす笑顔で、いろ／＼と角太郎を慰めるのである。

さて父一角が昨夜初心の弟子達に弓を教へるとて、稽古矢けいこやの刎ね返つたのを左の眼に受け、痛み甚だしいふ事を語つて角太郎を驚かし、そのための今朝の神詣の道すがら、ゆくりなくも行き逢つたとて、縁えんのほとりに待つてゐた角太郎、雛衣、婚姻の媒人なつかうどなる氷六ひようろくといふ老人を、座に呼び入れた。氷六、律儀の禿頭うちたゝきながら、船蟲の言葉を繼いで、「媒人なつかうどとて雛衣様をお預り申しましたか、打沈んでばかり居られるのを、傍そばに見る眼もいと苦しく、今日はまた、雛衣さまのお歸りの遅きに村のあちこち探し廻つた揚句、犬村川のほとりで、あはや身投げしようとなされるのを、危くもお救ひ申して、連れかへる途中、はからずも赤岩の奥様に逢ひ、仰せらるゝまゝに、雛衣さまをおつれ申した」といふ。船蟲仔細らしく、「思へばかうまで相慕ふ仲を、たとへいかなる過失あやまちがあつても、別れさせるは不憫ふびんである。一角殿の手傷平癒の祈願のため、私より一角どのゝ心をなだめ、二人が仲をもとにもどして、相添はせようと、雛衣をも氷六どのをもつれて來ました。もとの鞆たもとにをさまつて下さい」とて、角太郎が答をも待たず、門に着けた轎から、雛衣を招きよせれば、「さあこちらへ」と氷六は、憂うれにやつれた雨中の花の、力なげに打ち萎れた雛衣を、角太郎が前に扶け來つた。船蟲兩人を見くらべ、「雛衣、けふよりもこの夫婦めとこ中、波風なみかぜ立たずくらすがい、うれしいか、ほゝゝ」とばかり、晴れやかに笑つて、再び轎のりものを急がせて、宿所へ歸つたのである。

この船蟲、曾て犬田小文吾をはかつて、却つて囚はれの身となり、畑上語路五郎に搦めとられて石濱の城に引かれる途中、千葉の奸臣馬加大記常武がたすけにより、遁れてこの邊を流浪するうち、赤岩一角が妾となつたのだが、彼は最も角太郎を忌みはぐかり、同じ兄弟ながら、かの奸邪の痴者牙二郎と同氣相求め、又、一角とも心を合せて、角太郎夫婦を迫害すること甚しく、事毎につらく當る日頃のつれなさはうつて代つた今日のとりなしに、角太郎合點行かず、「これには仔細があらう」と打案じたのである。

別室で始終の様子を聞いてゐた現八、同じく不審をいだいて頭をかしげてゐたが、現八、「もし私にお任せ下さらば、赤岩に赴いて、ことの虚實を探りませう」といふ。赤岩には、一角が武藝の弟子に玉阪飛伴太・月義團吾・八黨東太・佐足潑太郎など一騎當千とも云ふべき輩がある、心ざまも亦ねぢけたので、若しや争ひを生じて現八の身に過ちもあらうかと恐れた角太郎、雛衣はこもぐく押とどめたが、義に勇む現八、その言葉に従はず、夕餐の馳走をも斷つて、忙しく卓鞋穿き締め、明日は必ず歸つて來ますから、吉報をお待ち下されと、赤岩指して赴いた。

(三) 現八、赤岩に勇を揮ふ

さて、日も早や西に沈む頃、現八は赤岩の莊に辿りつき、里人に尋ねて、一角が宿所に赴いた。いかにも嚴めしい構へで、南面に衡門があり、年ふりた赤松、傘の如く門を掩ひ、枝をまじへた庭樹夕

日をふくんで、梢を傳ふ小鳥の聲しきりである。庭の彼方に、木刀の音、かけ聲など幽かに聞える。現八は夕日に笠を傾けつゝ、塙のほとりにイミ、裡面より、人の出るのを待つてゐた。

かゝるところに、四十ばかりの一人の武士が、旅装いかめしく、緞子に天鷲絨の縁とつた野袴に長い朱鞘の兩刀を横たへ、蠟塗の篋を捧げ、槍を持ち、鎧櫃を擔ふあまたの従者を従へて來たが、その濃い眉の下の圓眼で、ぎろりと現八を一瞥し又一瞥しつゝ、一角が邸の衡門を入つて行つた。現八は、深くも心にも止めなかつたが、これなん、籠山逸東太縁連で、今から十七八年前、寛正乙酉の冬の頃、栗飯原首胤度を斬り殺したが大記常武の術中に陥つて、やむなく逐電するに至り、縁を求めて一角方に便り來り、こゝで武藝を鍛鍊して、遂には弟子頭に昇進し、代稽古をなすやうになつた。こゝに越後春日山の城主長尾判官景春、越後・上野兩國を切り靡けて立たうとする志があつて、頻りに賣を招き士を聘する折柄、赤岩一角武遠が、武藝關左にならぶ者無いと聞き、禮を厚うして招聘したが、一角辭して代りに縁連を推挙した。それで縁連は長尾家に仕へたが、これは七八年以前の事である。

近頃、上野白井城を取つた景春が、城内に井戸を鑿つたところ、土中から一口の短刀が出た、木の柄で鞘も木地であるが、その木は皆木天蓼と思はれた。或は故管領持氏卿の所藏した村雨丸ではなからうか、いづれにせよ、由緒ある名刀と覺えたが、縁連が師赤岩は古刀の鑒定をもよくすると聞くので、下野に赴き、問うてまゐれとの君命を蒙り、縁連今日しもこれを持參したのである。折柄一角は、矢傷の疼痛をもとせせず、白練を頭に絞ねて傷所を押し包み、三四重重ねた裯に坐り、曲糸に肱

を持たして弟子等が試合を見てゐたが、來意を聞いて打ちうなづき、「もし村雨丸であつたら、打振る刀尖きりさきに露したる不思議を見せよう。生憎あいにくの傷、一眼の鑿定かんていは覺束無いが、日の暮れぬ間に先づ見せよ」といふ。縁連ゆかり心得て刀の箱の紐をとく時、中より立ち上る一道の白氣はくきがあつて、ちら／＼と一角が坐邊まわりに靡いて消え失せたのを、縁連はじめ何人も氣づかなかつたのである。

さて、縁連その箱の蓋をとると、こはいかに、裏には袋のみでかの短刀は消え失せてあつた。縁連面色土の如く、これは／＼と慌てまどふのも笑止である。されど、一角はさまで驚かず、縁連を慰めて云ふやう、「これより立ち歸つて、一角眼病のため鑑定し難いので、暫く預り置くと申したと聞え上げ、當分の罪を免れるがよい。その間に穿鑿したら、短刀の行方ゆくへも判明しよう。なまじひこゝで詮議立てせば、事公おまけになつて却つて悪るからう」といふに、縁連纒かに色を直したが心は未だ安くない。そのうちに月見・玉坂・八黨やまたう・佗足きつたりなんどの面々めんめん、つどひよつて縁連と久瀾きうらんを叙し、且つなくさめて氣をとり直させ、言葉やうやく晴れやかに、四方八方よもやまの話の花咲く頃、燭ともしほもまた明るくかゞやき、賑やかな夜宴は開かれた。

その時縁連、ふと夕暮に見た門前の浪人について語り出でたところ、酒が廻れば氣が立つて、腕自慢の門生の面々、「面白い／＼、こちへつれて來て鬪つてやらう」と、月養つきまの團吾だんごころ／＼と走りて、現八を迎ひに出た。現八、團吾に導かれて、その席末に跪き、つゝまじやかに名宣なりをあげ、招待かたじけなきよしを申す。一角、やをら會釋あしやくして、逸東太・牙二郎を初めとして弟子どもを紹介したが、

現八、一角が眼の矢傷をきつと見て、「これこそ、昨夜放つた一矢だ、憎き妖獸まじやくよな」と、心ひそかに決するところがあつて、かの門生共がしきりに勝負をいどむのを、現八敢ていなまず、木刀しなばとつて道場みちばに降りたち、まづ飛伴太ひげんた・東太とうたをたゞき伏せ、續いて左右より打ちかゝる潑太郎・團吾の二人をも、何の苦もなく打倒した。これを觀た籠山逸東太、いや、小續なりと思つたのか、「眞劍勝負」と立ち上る。現八、莞爾にこと打笑ひ、木刀のまゝ立合ひ、數合撃ち合つた後、得ものを投げ捨てゝえいやつと引組んだ。縁連は六尺有餘の大男、膂力ちから萬人にすぐれたが、現八はこれ坂東無双の手だれなので、敵の剛きを柔かに受けて空しく力を費させ、機を窺つてやつと聲を掛くるや、朽ち木を抜く如く抱へ上げ、どつとばかりに捻ぢ伏せた。最前よりの有様に牙を噛んでゐた牙二郎今は怵おそへかね、刀提ひきげ身を起すを一角とゞめて動かさず、自ら柄しほねをはづして現八を上座にすゝめ、扇を開いて煽ぎ立て／＼、「思ふにました犬飼どの、いにしへの八幡太郎、九郎判官もいかで及ばう」などゝ言葉を極めて賞めはやす老獐さかさ。

さて、試合了つてから再び宴は張られ、深更に至り、現八は、寢間に案内され、枕に就いたが、かのまなこの傷といひ、その高弟等がいたく我に懲らされたのを怒る色無きさまといひ、いよ／＼庚申かうしん山の妖獸まじやくの化けたのに相違無いと合點したから、今宵は眠らずに用心しようと心を定めたが、ついと／＼と我にもあらず假睡まどろんで、かの護身囊まもりぶくろの中なる瑞玉の碎けるやうな音のしたのに驚いて覺めた。覺めて眼を開けば、枕もとの灯消えてまつくら闇である、護身囊まもりぶくろをさぐるに、玉にかはりはないの

で、「さては夢であつたか。或は我が危いのを神靈の告ぐるのではあるまいか」と、心安からず、ひそかに起き出で、縁側の障子をあけて見ると、外には物多く並べ置いて、走り出でようとする際につまづかせようとのたくみがあつた。なほ庭に立出で、見ると、足をすくはうとする麻繩は張り渡され、庭口の板戸のくぐりにも固い錠がある。現八これを振り切つて再び内に入り、十分身支度した上、障子も雨戸も縁側の物ももとの如く爲して庭に降り、樹立に身を潜めて活劇のはじまるのを待つて居たのは大膽不敵と云ふ外はないのである。

かくて丑満の鐘かうくと響くのを合圖に、忍び近づく八人の曲者がある。奥の方より牙二郎・飛伴太、次の間より東太・團吾・潑太郎。戶外には、縁連とその僕尾江内墓内、八人三隊に別れて、出口をきり塞ぎ、聲高く競ひかゝり、「盗びとが入つた、とく撃ち留めよ」と叫ぶや、三方より現八が室に亂入し、枯野の芒のごとくみだれ突けど、よぎは藻腕の殻であつた。「さては逃げたのか、遠くは行くまい。追ひかけよ」と犇めき競へば、縁側に置いたる小桶、搥鉢、火鉢、立白に躓くやら、庭に張つた繩に足をすくはるゝやら、我と我が謀に陥つて一方ならぬ騒ぎ方である。現八得たりと躍り出で、まづ墓内と尾江内とをつるべ撃ちに斬つて落す。「やゝ、敵こゝにある」と呼び交して競ひかかる六人の太刀は、田毎の月の波のやうにうねりにきらめくにも似たのである。現八、交るゝ渡り合ひ、遂に飛伴太・潑太郎を斬つて落し、なほ牙二郎・東太・團吾と渡り合ひながら、縁に立つて矢繼早に射出す縁連が鐵を避けつゝ、隙を見てかの錠を振り切つて藩戸の外に出で、ありあふ大石を手

早く起して戸に押當て、血刀押しぬぐうて鞆に納むるより早く、飛鳥の如く返壁に走りかへり、角太郎が草庵に入ると、夜はほのゝくと明けはなれた。

(四) 靈玉、妖獸を斃す

こゝに、返壁の里の角太郎・雛衣は、現八が上を案じつゝ夜どほし寝もせず、待ち明かしてあつたところ、現八が喘ぎ／＼、折戸押し開けて歸り來れるを、打見れば満身血潮を浴びてゐた。驚き問ふ夫婦に、あつた次第を話し、「程無く追手掛り、主人夫婦もまきぞへにされよう。委細は再會の節にお話しませう。先つお暇申す」と言ひ掛けて、立上らうとするのを、角太郎慌だしく押し止め、「喜憂禍福を共にしてこそ刎頸の交りではないか。たとひ赤岩から追手がかゝつて、家捜ししようとかわがうとも、自分がかうしてある上は、何んでおめ／＼と渡しませうや。手段をつくして、その上で脱がれ難い場合は、天命でどうにもならぬ、共に死ぬまでのこと」といふ。現八、その義に感じ、再び辭むやうなく、言はるゝまゝ戸棚にかくれて息を殺してゐると、縁連・牙二郎、若黨僕を従へて、がや／＼と入り來つて「縁連が主君から預り來つた短刀の盜賊、犬飼現八が確かにこの家に逃げ込むのを見た。家捜しする」といきまくのを、角太郎、「これは理不盡である」と立ち塞がつて通させない。縁連・牙二郎「刀にかけても」と攫ぐところに、何時の間にか、庭先に昇き据ゑられた二挺の轡がある。裡から高く呼びかけて、「牙二郎、はやつてはならぬ。逸東太も大人氣無い。しばらく待て」といふのは、

赤岩一角が聲である。縷の長絹、朱髹の兩刀、威儀いかめしい一角につゞいて、綾の袷に白無垢を重ねて、装ひ美々しい船蟲も共に立ち出で、上座に坐るのである。さて、一角、縁連を顧み、「犬飼どのを短刀の賊となす事甚だしく早合點である。代つて篤と穿鑿するから、この場は愚老に任せられ、おん身は疾く赤岩へ歸られよ」といふ。縁連、一言の威に壓されて、返す言葉も無く、不精無精に引きさがつた。一角乃ち角太郎夫婦を呼び近づけ、言はうとしつゝ、しばらく言はず、久しく嘆息して後、容を改めて申すやう、「麒麟も老いては驚馬に及ばずといふ、子供の目にはさこそわれを老耄れたと見えもしよう。僅のこの行き違ひから、勘當すること、もとより本意でない。老いてはあすの日もたのまれぬ身の、二人の子供を持ちながら、一人は不和といふこと、何と心苦しいことであらう」など、打萎れたさま、いつもの人とは見えない。「さて今日來たのは別儀でない。夫婦の勘當を許さうとする爲」といふに、角太郎も雛衣も夢かとはかり喜びつゝ、愁の眉を擧げたが、船蟲は、用意した偏提を轡の中より持つて來させ、よろこびの盃一めぐり、長閑な酒宴となつたところに、一角言葉を改めて、「われ夫婦に望むところあるが、承知してくれるだらうか」と云ふ。角太郎、「何でも、我等の力で出来ることなら、決して否みは申しません」と答ふ。一角やをら申すやうは「わがこの眼の傷を癒す妙薬には、百年土中に埋れた木天蓼の細末に、四月以上の胎兒の生膽とその母の心臓の血とを取つて練り合せて用ふるのをよしとすと聞く。幸ひ、木天蓼は手に入つたが、手に入りがたい他の二品、まげて御身夫婦に求むるぞ」といふ。あまりのことに、角太郎も雛衣も、呆れて顔を見合せるばかりで

しばし答へも無かつたが、船蟲は携へ來つた壺をとんと兩人が中に据ゑ、「角太郎よ、雛衣よ、難きを爲すのが孝行である。が、痛ましいことである。いかなる前世の業報でかゝる親子と生れ娘となつたであらう」など、空涙こぼすのである。

牙二郎目をしばたゝき、「母上、そんなにおなげきなさるにも當りますまい。小の蟲を殺すとも大の蟲を助けよといひます。兄貴も嫂御もよくあきらめて歡んで居られたのですから」と愁嘆の面を作つた。角太郎、「いなむによしない父上の御所望、唯自分が上だけならば、身は八割にもせられよう、雛衣はわが養家の嫡女で、恩義ある伯父の愛娘であるから、その義はかりは許して下さい」と押し切つて云へば、一角打腹立ち「何事でも承知すると誓つた舌の根の未だかわかぬのに、言葉を蹴すとは奇怪千萬である。一眼を失つては生きる甲斐が無い。益なき生命の惜しくもない」と衣領押し開き、双を腹に突き立てようとする。船蟲・牙二郎、左右より押しとどめつゝ、うらめしさうに二人を見返し、「親を死なしても、御身たちは何とも思はぬか」といと悪々しげに詰るのである。角太郎は思案に暮れ、太息つくばかりである。雛衣は胸つぶれ、たゞ伏沈んであつたが、このときつと首をあげ、「私ほもう覺悟をきめました。死ななければ證しがたい私の腹の怪しき病、唯今切り裂いて人々の疑ひを晴しませう」とて、一角が差出した木天蓼の短刀を受け取り「脆い女の腕にはいさぎよく死を遂げむこと、心もとなくありますが、私も武士の妻であります、なんでおくれませうや。父母おん二方には松竹の御壽命長くいらつしやいまし、名残は盡きぬわが夫には、無量のこの思ひをお察し下さいまし」とて、

きらりと抜き放つ、又の光に顔見合せた角太郎、膝に涙はあられとたばしるのである。
 「早うせぬか」と一角がいら立つ聲に、雛衣はぐさとばかり、刀先深く乳の下に突立て、ひきめぐらせば、さつとほとぼしる鮮血と共に、飛び出した一個の靈玉、勢さながら鳥銃の火蓋を切つたやうで、前面に坐した一角が胸骨はたと打ち砕いたので、しばしもたまらずあと叫んで、長絹長袴の手足を張つて打倒れた。船蟲・牙二郎驚き怒り「さては夫婦心を合はして、非道にも親を害したな。そこを動くな」と呼びかけて、等しく刃を抜き連れて、角太郎に撃つてかゝる。角太郎これと争ふ心無く、「早まり給ふな、云ふ事がある」と又の下を掻いくるとき、右の腕に薄傷を負ひ、いとも危く見えた。その時、戸棚の襖の間から、丁と打ち出す銃鏡！ 牙二郎が乳の下を貫いた。同時に現八、ふすま蹴開いて躍り出で、逃げむとする船蟲が利手を捕つてどうと抛てば、船蟲は脇腹を火鉢の稜に打たれ、灰にまみれて斃れた。

角太郎勃然として憤り、「頼みもせぬに無益なる助太刀、我に親と弟とを害する罪を負はせようとか、交友の義も今はこれまで」と、戒刀をひきぬいて斬つてかゝる。現八素早くかいくより、角太郎が臂をしつかと抑へ、懐よりとり出す鬪體に、したゝる二の腕の血潮を受け止めれば、げに争はれぬ親子の明證、血は一滴も下にこぼれないで、ことごとく鬪體に吸ひ込まること、沙地に水をそぐやうである。現八、聲をふりたて、「はやまり給ふな犬村ぬし、打仆された一角は御邊がまことの親でない。この鬪體こそまことの父君、赤岩一角武遠大人の白骨と知らぬか」といふ。角太郎思ひがけ

なき不思議を見て、疑ひつゝも勢挫け、折しく膝に戒刀の柄押立て、油断しない。「心得がたい犬飼どの、わが父をわが父でないといはるゝ事いかなるわけか」ときつと問ふ。現八すなはち、庚申山で妖獸の眼を射た事から、一角の亡靈に逢つた次第を落も無く物語り、大角を助け亡き父君の讐を討たせむと苦心した一伍一什を告げた上、雛衣が腹から出で、擬一角を打たふした靈玉の事に語り及ぼし、里見家の事、伏姫八房が事、仁義禮智忠信孝悌八行の玉に合ふ八犬士の事、牡丹の花の形した痣の事、犬塚・犬川・犬山・犬田・大江等同因果の士の事、離合集散のあらましをも、ついでに述べ了つて鬪體と共に、一角の幽靈より受取つた、かの形見の短刀を差出せば、角太郎は始めて夢の覺めたやうで、且つ驚き、且つ恥ぢ、且つ嘆き、感涙泉の溢るゝ如くである。

さて兩人は、先づ雛衣を抱き起したが、夢現の間に現八が物語を聞き、喜びに禁へず、微笑と共に息絶えたので、共に悲歎の涙に暮れつゝ、その遺骸を取片寄せようとする折しも、牙二郎息吹返し、身を起しつゝ、銃鏡を抜きとり、現八が胸先目がけて投げ返せば、現八透かさず脇差の柄で丁と受けとめる。牙二郎たけつて斬つてかゝるのを、角太郎、軽くあしらつて首打落しつ。さて、首を失つた牙二郎の軀の、擬一角が伏した上に落ち重なる時、親子の氣の自然に通ずるところがあつたか、死んだと見えた擬一角は、忽ちうめく聲震動して、障子襖も裂くる如く、双手を張つて身を起すと見れば、はじめに異なる奇怪の相貌、現八が庚申山の闇で見たる妖獸とすこしも違はず、つぶれ残つた一眼で四邊を睨まへ、吐く息濛々と狭霧のやうである。

角太郎は、現入諸共、太刀先するどく打つてかゝり、窓の格子を打破つて逃げ去らうとするのを、追ひ迫り、腰の番をばらりずんと切り下げた。さすがの妖怪も、たまらずどうと落つるを、しかと押へて動かさない。鏢もとほれと、吭のあたりを刺貫けば、遂に息は絶えたが、角太郎かの父の形見の短刀で更にとゞめを刺したところ、奇なる哉禮字の靈玉、その瘡口から顯はれた。角太郎、今更の如く靈玉の靈驗を感謝して、押し戴いてをさめたが、この時かの船蟲の姿の見えぬに心づき、追かけて引摺つて来ようと、現入あわただしく馳せ出でようとする時、「しばらく待ちたまへ」と抑へつゝ、庭先に現はれたのは、かの籠山逸東太縁連である。見れば、逸東太は、かの船蟲を太刀の下緒でいましめ、きり／＼と引き立てた。縁連は平蜘蛛の如くひれふして土も凹むばかりに額をすりつけ、一角を妖怪と知らないで、二士を苦しめた過失を謝し、「歸つて主君に申譯の證據に、この女と木天蓼の短刀とを乞ひたい」といふに、二士はその恥を知らぬを冷笑ひつゝ、これを許した。なほ、雛衣の胎を得むがため一時の策として、雛衣を復縁せしめたこと、その眼傷の奇方として、胎児のみでも効ありと聞いてかくは計らつたが、偶々縁連の手より木天蓼を得たので、いよくその望み抑へがたく、雛衣に死を迫つたことなど、船蟲はのこらず白状し、「世に女子と生れては、好きもわるきも夫のために、心をつくすもの、夫の指圖いなみがたいので」など、あつかましく辯解するのである。

さて、村人を初めとして、一角が弟子ども呼び集め、この由を告げようとするところへ、月養團吾、入黨東太の二人參つて、昨夜現入に討たれた飛伴太・澁太郎が首であるといつて捧げたのを見れば、

これ年古る猫と貂である。これはかの妖獸の眷族で、猫は飛伴太と呼ばれ貂は澁太郎と呼ばれ、擬一角と共に人間に在ること久しかつたが、昨夜現入に斬り立てられ、深痕を負つて、逃げて深山に隠れようとするのを、自分等相謀つて、刺殺して參つたと云ふ。その兩人も實は人間でなく、庚申山の麓なる土地の神と山の神である。神通かの妖獸に及ばないので、心ならずも驅り使はれ、内弟子の群に入つて團吾・東太と呼ばれたのである。今、犬飼・犬村兩豪傑がたすけによつて怨敵亡び、我等再び舊巢に安堵するに至つたこと、感謝警ふるに物無いと禮を述べつゝ、別れを告げて外に出たと見ると、忽ち二片の雲となり、庚申山のかたに飛び去つた。かゝる中に牙二郎が死骸も、半人半猫の異相を呈した。兩人は、集ひ寄れる村人に、しか／＼とありし次第を語り、妖獸が死骸をその場に燻き捨てさせた。さて角太郎は、村人の止むるをも諭し退けて、赤岩・犬村兩家の田畑家庫を賣りしるなし、すべて六百五十金を得、その大部分を兩家の祠堂金・回向料、返璧の草庵の保存料、貧民救恤金などに宛て、残れる二百金を兩人の路用となし、翌る春の如月半ばに、打伴れて同盟の諸犬士を尋ねべく、はて知らぬ旅路にのぼつた。

この時から角太郎は、名を大角と改め、靈玉の文字をとつて禮儀と名乗るに至つた。なほ、旅立つ前、現入と共に庚申山に登り、山氣肌に冷たいかの岩室のほとりに立つて、懷舊の涙とゞめあへず、「くれ竹の世に亡き親の渡りけむ迹をみやまの雲の棧橋」の一首の哀しい歌を岩壁の面に誌しつけ、亡父を弔つて去るに忍びなかつた。

船蟲を乞ひ得て白井を指してかへつた籠山逸東太縁連は、ゆき／＼て信濃國沓掛の驛に來たが、その夜船蟲は縛めを脱して逃げ失せた。その次第はどうかといふに、縁連は、墓内・尾江内の二僕を失ひ、監視の人数を缺いたので、宿に就く毎に、船蟲をわが臥床の柱につなぎ置き、臥しながらこれを監視してゐたが、この夜、山間の驛は月寒く風悲しいので、旅のあはれは加はり、夜の更けて眠りえないのにつけ込んだ船蟲は、人をたらず淫婦の本性を發揮して、縁連をたぶらかし、その際にかの短刀のみならず、路銀三十兩をも偷みとつて逐電した。縁連、躰を噬んだが及ばない。今は白井にかへつて申譯しやうもなく、乃ち思案をかへて、五十子の城に赴き、主である長尾を恨むわけあつて降参すと申入れて、巧みに扇谷定正にとり入り、遂に老臣の次に位する出頭の權臣となつたのである。

六、流浪の信乃

(一) 死んだ濱路と生ける濱路

現八と大角とがつれだつて旅に出た。同じ年の十月の末、甲斐の國の富野穴山の麓路の穂すゝきが、夕の風にざわめく中を、孤影さびしくたどり行く一人の旅人がある。夕風の一吹ごとに闇の色こく、晚鴉飛び行く方に夕焼の色もうすれた。時に一發の銃聲が起り、その旅人に中つたのであらう、身を翻

して、はたと斃れた。しばらくして手なる鳥銃で芒押分け現はれ出でた狩裝束の一人の武士、年四十ばかり、眼圓に色淺黒く、髯頰をうづめたのが、一人の僕を従へて、かの斃れた旅人の側に來て見るや驚きの色が顔に現はれた。「しなした。鹿と思つたが」とて、僕を顧みて途方に暮れた體であつたが、旅人の兩刀の表装見事なのを見るや、莞爾と笑みて、「毒を喰はゞ皿迄だ」とてそれを奪ひ取らうとした。僕もまた「路銀をたくさん持つてゐるだらう」とて、探りとらうと手をかけた時、その斃れた屍、むつくと起き上るや、その腕とつてずてんどうと投げ飛ばした。武士、大に駭いて、鳥銃ひらめかして打つてかゝるのを、旅人すかさず足をあげて、脇腹を蹴つた。蹴られて二三歩のけぞつたが、刀を抜いて死物狂に斬つてかゝる。旅人抜き合せうち合ふ事二太刀三太刀に及んだが、やがてその太刀を打ち落し、起ち上つてをどりかゝれる僕を返す刀に「うちうてば、主從轉びかさなり、「お許し下され」とふるへてゐる。

旅人は怒氣を含んで、「わが身恙なかつたが、仇ならば誘きよせようとして虚死したのを、それとも知らず、睡れる虎の髯を曳く鼠にも似たしれものではある。誤つて撃つたのは許しもされようが、物を奪はうとしたのは、奇怪である。斬つて捨てる。覺悟せよ」とて、ふりあぐる太刀の下に、躍り入つて「しばらく待つて」と、とどめるものがある。裁着をはき、藤柄の短刀を帯びた五十ばかりの老人が、旅人の袖をおさへ慌たゞしく申すやう、「御旅人しばらくお待ち下さい。わたくしは當國猿石の村長で、四六城木工作と申すもの、唯今山林を廻つて、偶然こゝに來合したのです。おん腹立はまことに御

尤もながら、これなるはわたくしが年來識り合ひの仁でございませう、まげてお許し下さるよう」と只管に打ちわぶるさま、甚だ老實に見えたので、旅人さらばとて刀を鞘にをさめた。かの武士主従も、拜謝しつゝ、身内のいたみ撫でさすつて、はふくの體で逃げ去つた。

やがて老人は旅人に向ひ、「唯今の御手並、ひたすら感服しました。武者修業の御方とお見受けするが、今宵の御宿を仕り度く、おいとひなくば、御名を名乗つて下さらずや」といふ。旅人は「喜んで、御深切かたじけなく存ずる、宿かるつてもござらねば、御言葉に甘えて、今宵御厄介に成りませう。私は武藏の浪人で、犬塚信乃成孝と申すもの、尋ねる人があつて、所々流浪致しをります」といふ。誠にこの旅人こそ、犬塚信乃成孝であるのだ。荒芽山の危難で、友と離れた信乃は、再び人々にめぐり合はうと、信濃より越後に入り、出羽陸奥にまでも赴き、路銀盡くれば、到るところに滞在して、文學武藝を人に教へ、その得たる束脩を、更に路銀にあて、遊歴しつゝ、浪々の中に、はやくも三歳をすぎし、いづこへゆくあても無く、こゝにさすらひ來たのである。さて、その武士は何者と問へば、「國守の家臣、泡雪奈四郎秋實と呼ばれて、山林あづかりの職にあるもの、殺生を好んで、暇ある毎に狩りくらし、狩り暮れては、私の家を宿とするに、別懇の間柄、見過し難くて執りなしたのですが、早速の御承知、ありがたい」と、木工作は繰返して、禮を云ふのであつた。それから、猿石の宿所に案内した。女房夏引、その他家族のものを引き合せなどして、一方ならず款待した、饗應に更けて、その夜は思はぬ宿に身を横たへ、明日は早く出で行かうと用意したが、俄に雪降り出で、あくる朝もなほやまず、

野も山も降りうづめて門出でがたいところから、木工作頻りに逗留をすゝめたので、急ぐ旅でないから、その日はそこに留まつたが、雪はその翌日もその翌々日も降り止まないで、信乃はおぼえずこの家で日を重ねた。

この家の女房夏引は後妻であらう。年は三十四五ばかり、容貌も醜くない。又十六ばかりの娘が唯一人ある。うちつけには、よくも見ないが、顔は彌生の櫻の花に似て、雨をいとひ風を恨む風情がある。姿は秋の夜の新月にも優して、雲に掩はれ霞に消さるゝなげきがあるやうだ。常に奥ふかく居つて掻き鳴らす筑紫琴の調は妙である。名を濱路と云ふのであらう、父母がかう呼ぶと涼しい聲でしとやかに答へるのを、紙門越に聞く毎に、信乃は同じ名の亡き妻の事を思つて、斷腸のおもひされるのである。繼母夏引にはしたなく叱りのゝしられても、一言の逆らひもせず、あくまで柔しい心ばへのかの大塚の娘にも似るのである。木工作が前の妻は名を麻苗と呼ばれたが、四年ばかり前、時疫で身まかり、乳母の夏引をそのまま後妻となしたのであるが、この女、裏表ある善からぬ女で、とかく濱路に辛くあたるのみか、かの山林管領泡雪奈四郎と密通して、木工作が柚木見に行き、山小屋に明かす夜などは、山のしらべとか遊獵とかにかこつけて來る奈四郎を引入れ、不義の快樂に耽るのである。されど、好人物の木工作はすこしも覺らなかつた。慧敏しい濱路は、これを知つてゐるが、口に出してはいはず、唯淺ましい事に思つて、小さい胸をいためるのであつた。

されば、夏引が濱路をけむたく思ふこと一通りでなく、奈四郎と相談の上、遠ざけるにしくはない

と領主の奥に仕へさせようとしたが、一粒種の愛娘を、木工作どうして手ばなさう。さうかうしてゐるうちに、信乃といふ逗留の客さへ出来て、人目のしげくなつた上、信乃を恐れて、奈四郎のおとづれがなくなつたので、夏引は不義の逢瀬を堰かれて、ひとり甚しくいらだつのであつた。さうして、たゞ濱路のみあたりちらした。しかも木工作が強ひて信乃を留めるのはどうかと云ふに、その骨法といひ擧止といひ人に優れたのを見て、賢を愛し、士を重んずる領主にすゝめて、濱路が犂となし、我が家名を揚げようと思ふのであつたが、奈四郎が讒にあつて妨げられむことを恐れ、彼以上の上役に推擧の傳手を求めつゝあるのであつた。事にかこつけ言葉を設けて頻りにひき留むる懇切さに、信乃は迷惑に感じながらも、すげなくふり捨てがたく、逗留日を重ねたが、その宵々の徒然に、孤燈のもと、目についた太平記の闕本など繕いて、ふと五犬士の上、亡き濱路がことに及び、しきりに感慨にふけつてゐるのであつたが、折柄、背後の方に来る人あつて、足音もせず近づくの、誰ぞと問へば、「濱路でございます」といふ。

信乃きつと見て、「おん身は主人の娘御、何故に小夜更けてひとりこゝへは來られたのですか」と詰る。濱路首をふつて、「いゝえ、私はあるじの娘ではありません。おん身と二世を契つた濱路であるのをお忘れになつたのですか」とて、あやしむ信乃に告ぐるやう、「こゝなるあるじの娘の名が私と同じのみか、御身と結ばれた宿因があるので、かたちを借りて申すのです。私がために生涯妻を娶るまいと宣はれた御心のほど、忝くよろこばしくはありますが、そのお言葉のやうに長く私をお忘れな

ければ、この少女を私と思つて縁を結んで下さい。よしやこの事で、災禍が下ることがあつても、それは幸福の基となりませう。されば前途を急がないで、こゝに逗留せられよ」と臆する色もなく、言葉あきらかに述べるのに、信乃不思議に打たれて、打成つてゐたが、その言葉つきも顔容も亡き濱路に生きうつしである。さりながらおのれの宿意を告げむとて、他の娘に濡衣を着するやうなことがあつてはならぬと、その不心得を戒める信乃が言葉に、「いつに變らぬ心強いことよ」と袖打ちかへして怨むなど、ありしその夜の濱路とすこしも異ならない。

かゝるところへ、隔の紙門がらりと引き開け、「いたづら者見出した、皆々起きよ」と呼ばはつたのは、かの龜篠ではなく夏引である。信乃のあわたゞしく言ひ解かうとするのを、不義者不義者と騒ぎ立てる聲に、應と答へる小厮の出来介、寝衣のまゝの幘鼻褌帯に、麴棒引提げ走つて来て、かねて濱路に思ひをかけても叶はぬ戀の遺恨、しかへしはこの時と、胸のほのほの未だ冷えぬ火鉢にはたとつまづいて、炭團の火をぶちまけるなど、狼藉この上ない。かくて出来介なほも聲ふり立て、「ふてくしい女盗人め、捨てゝは措かれぬ」とわめき散らすのである。

その時、木工作入り來り、夏引、出来介等を叱りこらし、さて、茫然として夢の覺めたやうなる濱路の様子と、信乃が明かに告ぐるところに依つて、却つて喜びをなし、「果して然らばそは却つて吾等親子の仕合せ」と、こゝに胸中をひらいて語り出づるやう、「私はもと信濃國の住人、蓼科太郎市と呼ばれたものゝ獨り子であります。親太郎市は井丹三直秀どのに仕へたが、直秀ぬし春王・安王兩公達

の御味方にまゐり、嘉吉元年夏、結城落城の際に血戦して討死したみぎり、太郎市も深痕ながら信濃に馳かせへり、訓を私にのこし割腹して果てた。その時はなほ總角であつた。結城の殘黨と指されて故郷の住居出来なくなり、母は早や亡くなつたが、母方の伯父のこの地に在るのをたよつて来て、遂に伯父の女麻苗を配はせられて、その家を繼いだのです。しかし齡四十路に至つてなほ子が無いので、神佛に念じなどしてゐると、或日の事山獵に出で、黒驪山のほとりでいと大なる鴛を撃ちとめたが、其處から一町あまり距つた梢に、小兒の泣き聲したのを怪み、尋ね行つて見ると、二三歳ばかりの小兒が、老樹の叉に挟まれて聲喚るゝまで叫んで居るのです。きつとあの鴛にさらはれたのであらうと、抱き卸して見ると、七寶の摺箔に篠龍膽の紋章つけた袖長い袷衣を着たのは貴い人の息女でもあらうと抱き歸つて妻に見せると、こは天の與へ給うたのだらうと、喜ぶ事かぎりなく、そのまゝそだて、今日に及んだのが、この濱路です。はじめ異なる名をつけたが、顔を背けて答へない。不思議の事に思つて居たところ、こゝより一里ばかりの所に濱路と呼ぶ市場があり、召使らがそこから物を買つて来る毎に、多くの口に濱路の地名の繰返されるのを、子は自分と呼ばれると思ふらしく、その方を見返つてこゝちよささうにいらへるので、この子の名は濱路と呼ぶのであらうと、それからさう呼び慣はしたのであります。かゝる次第で、私は後を繼がせる子も無いので、あなたの器量を見込み、便りを求めて、守にすゝめ、御内人になしてから、娘の婚に迎へたいと、切に思つてゐたのを、未だ言ひ出す折を得なかつたのです、どうか私のこゝろを隣んで婚姻しては下さらぬか」と、眞心色に現はしていふのである。

信乃は聞き了つて感に堪へず、「お身が井丹三どのに仕へた、あの忠義の老黨のお子であつたか。今更何をつゝまう、私の母は丹三どのの娘であります」と、素性を語るをきゝ、木工作且つ驚き且つ喜び、「これはまた思ひがけないこと、さらばおん身は私の爲にも主筋である、これは／＼」と暫くはことばもなかつた。さて、改めて濱路が婿にと請ふ事切であつたが、信乃は、「異性の兄弟を尋ねて居る身の、この事果てない中は、我身の縁談などおもひも寄らない。亡き妻の告げもあること、縁盡きなければ、必ず娶りませうが、今からしかと約束は爲しがたい」と、金鐵よりも堅い大丈夫の一言に木工作再び強ひがたく、「これから多籠りの季節なので、年改まるまで逗留なさるよう」と請はれるまに、信乃は辭みもえなかつた。

(二) 偽の堯元と眞の堯元

木工作は、どうにかして信乃をながく留め置かうと思ひ、それには、領主に薦める外ないと思つたが、かの泡雪奈四郎を除いては、官邊に傳手が無いので、奈四郎と信乃とを和睦せしめねば、萬事に都合が悪いと考へ、程近い城下なる泡雪のところへ尋ね行きて、先日、信乃に於ては、毫も意に介してゐない、一夕會合して、あらためて友情を結ばれたと思ふといふことを告げ、切にその來訪を乞うたのである。奈四郎これを聞き、さては木工作、信乃とはかり、我に恥辱を與へようと企んだも

のと思ひ憐み、さういふ考へならば、信乃をはじめ木工作一家を塵みこころしにして、遠く走らうと覺悟を定め、媼内・蝸内の二僕を隨へて訪づれて來た。媼内はかの日、奈四郎と共に信乃に打ち懲らされたものである。然るに、木工作にはそんなたくらみの見えぬのみか、信乃も殊の外禮讓れいぎやうを守つて過ぐる日に似ぬ物柔らかにふるまつたので、奈四郎案あんに相違して、折角の力瘤も空しく抜けたのである。されど、飽まで佞奸邪智のしれものなので、再び思案をかへ、宴えん闌らんにして席を立ち、人目をぬすむ小座敷に、夏引とのひそく話、問ひつ、答へつ、笑み交かはしなどして、その夜は歸つたのである。

それより兩三日經つて、奈四郎より蝸内を使とし、先日饗應の禮のしるしとて一壺の葡萄酒ぶどうかんを贈り來り、今日明日に是非おいでを待つとの書面さへ添へたのである。木工作喜んで、かへる使のあとから續くやうにして、早速泡雪をおとなうたところ、奈四郎いつもにまさる款待で、下にも置かずもてなしたが、宴たけなはになつてから、人を遠ざけ、言葉を改めてひそかに語るやうは、「御曹子信綱君未だ御子ましまさぬに由り、見目好く素性賤しからぬそ、ばめを求めてみられる。それがし、御身の娘御濱路の、容色心ばへ兩つながら申分無きに思ひ及び、ひそかに私が姪と申して言上したところ、御感淺からず、疾く出すようにとの御詔である。氏なくして玉の輿とはほんたうにこのこと、やがて世嗣の君を産まば、その身の榮華は申すまでもなく、おん身もまた國守の外戚となるであらう。如何に木工作殿、願うてもなき出世ではあらぬか」といふ。木工作聞くより色を變へ、「こは何事を仰せられるのです、たとへ國守でも何でも、妾風情にあげるのには眞平まっぺらです。殊にかの濱路は既に信乃に許嫁とせし者、今更變更出來ませぬ」と、粗樸剛直の老人とて、一言のもとに刎ねつけたのである。奈四郎が言ふ事もとより偽りで、唯濱路を遠ざけようとする策であるが、手痛き斷りに焦立つて、「既に言上に及んだ上である。かくては自分の一分立たない」とて言葉を盡していろくと言ひすかしたが、木工作何といつても聽かない、「他人の娘を自分の物のやうな顔して、要らぬ推舉、近頃以て迷惑である。私は數にも足らぬ匹夫ながら、一人娘の色をもて名利を獲ようなどは、すこしも思はない」と、言葉荒く罵りつゝ、席を蹴立て、かへつたのである。

奈四郎憤怒やる方無く、手熟れた鐵砲をとり、木工作の門を出づる後姿狙ねらひ定めて打出した兩銃ふたつぜまに、あはれや木工作は、血煙と共に打ち斃れ、そのまゝ息は絶えた。濱路をはじめ木工作の家の人々は主のかへりの遅いのを案じ、泡雪のところへ使を走せて問ひ合したが、とうに歸つたとの事に、いたく騒ぎ立ち、人を八方に遣りて行方を求めたが、かにもく知れない。濱路は心痛のあまり、胸のつかへはげしく、絶え入るばかり打臥した。信乃も心を碎き、いろく搜索に手を盡し、夏引もさすがに心なやましく、案じるところへ、裏口よりこそくと訪へる奈四郎の僕媼内、どさくさまぎれに夏引を呼び寄せ、手早く一通の書を渡した。これは、「火急に密談し度い事があるので、石和のほとりの指月院まで来てくれるように」といふ奈四郎よりの手紙である。夏引すなはち、「躑躅が崎の賣卜師うらふしに夫の行方を判じて貰つて來る」といつて、いそがはしく家を出た。

めざす指月院といふのは、石和の郷のはづれにある小さな禪寺であるが、住持の老僧は近頃なくな

つて、後住の法師は道徳のきこえ高く、活菩薩とて里人にあがめられてゐるが、檀那とて無い貧寺なので、住持は日毎托鉢たくはつに出て、在院の日が稀だから、晝は無住に異ならず、參詣の人もまれで院中常にひっそりとしてゐた。寺の門前の一茶店に、今朝から待つて居た奈四郎は、夏引の來るのを見ると、ほゝゑみながら、物も言はで先に立てば、夏引も頭巾深く、後について寺に入った。奈四郎は歛で日蔭の雪の凍れるを碎いてゐた留守居の寺男に、「院主に逢ひ度いから、歸るまで待たせてくれ」とて、本堂のかたへの一室に案内させ、さて首尾よしと紙門を閉たて、夏引と額をつき合せて、まづ木工の剛情、とても濱路を斥けがたいのを知つたから、腹立たしいまゝ撃ち殺したと告げるので、夏引さすがに胸つぶれたが、もとより淫婦の彼女、却つて都合よくはないかといふ奈四郎に同意しておぼえず笑壺に入るのであつた。奈四郎、更に言葉を繼ぎ、「木工を殺したのは信乃が仕業のやうにこしらへ、隠し置いたかの木工が死骸はひそかにその家の脊戸のほとりの雪の中に埋めて、わざと、日ならず手足の現はるゝやうになし、又、信乃を欺いて、土藏の裡に封じ込めた上、その刀に犬猫などの血を塗り置き、目代にしかゝと訴へ出づるがよい。そして濱路は信乃と密通の罪ありといつて、宿場女に賣らば後腹あとばらが痛むまい、天晴妙計であらうが」と説くのを聞いて、夏引はひたすら感嘆し、「おん身は何といふ智者であらう、世に頼母しい方である」とほめ止まないのである。傍に人の無ければ、誰聞く者も無いと思つたのであらう、夏引はなほ、「濱路は木工が實の娘でなく、鶯にさらはれて來た捨兒である」など、問はずがたりに語り出で、罎たん内に持つて來させた酒肴を開いて、佛前をも

はぐからず、淫酒にたはれつくしたのである。

さて夏引はこの密會から歸ると、先づ濱路を餌として出來介を釣り、奸計の味方に引き入れ、これをたすけとして、奈四郎より與へられた方策はかりごとの準備抜目なく取り計らつた。それより四五日たつた或夜、南風強く吹いて、積つた雪大方消えたが、四六城よろぎの家の脊戸のほとりなる活大根いけだいこんの穴から、死人の脚が現はれ出たので、全家の大騒動となり、やがてそれを掘り出して見たところ、疑ひも無く木工が遺骸なきがらで、鮮血花の如く雪を染めたのである。濱路のなげきは云ふまでもなく、夏引も巧みに泣顔なみごころつくり、信乃亦愁はしげにその非業の死を痛むのである。「察するに且那の讐敵かたきは家の内にあるとおもはれます。お家さま油断なざるな」と、尻目に信乃を睨む出來介の眼の意味ありげなのを、それとも心づかず、信乃は共に死骸の始末など了つたが、夏引は目代甘利兵衛あまのり ひろゆゑ元もとに訴へ出で、から、信乃は目代に馳走の用意の器具とり出す役とて、出來介を伴ひ土藏に入った。

然るに、外より俄に出來介を呼ぶ夏引の聲がして、出來介ひとり慌だしく出て行く途端に、土藏の戸は外より固く鎖された。信乃何事ぞといぶかるころへ、出來介から「と笑ひ、「且那を殺した不敵の罪人、新後家さまのはかりごとで、うま／＼庫の中にとりこめたぞ」との、しり、夏引も共に聲を合はせてあざ笑ふのである。さては、術中に墮ち入つたかと後悔したが及ばない。こゝに、八代一郡の新目代甘利兵衛あまのり ひろゆゑ元もとは、肚甲はらまきに野裝束のいでたちゆゝしく究竟くつきりの夥兵四五名と篋輿はんだを吊らせた雜兵ひやく二人前後に従へて入り來り、先づ木工が死骸なきがらを檢あつためてその鐵砲てつぱう創なるに眉をひそめ、次には信乃

が木工作を刺したといふ短刀は、出来介が鶏の血をぬつたのを見て首をかしげ、さて、堯元自ら信乃を呼びて藏を出させたので、信乃は、「私に犯せる罪はありません、皆つくりごとでございます」と云ひつゝ、ふと堯元の顔を見るや、驚いて口をつぐんだ。堯元稀なる名目代とおぼしく、信乃の刀を預つたのみで繩を打たず、又調べる用があるといつて濱路を呼び出して復輿に打ちのせ、更に濱路が木工作に拾はれた折着て居たといふ、摺箔の衣をも出させ、なほ出来介を呼び据ゑて、「木工作が痲は太刀傷でなく鐵砲傷である、又信乃が短刀の血も鮮かで數日前に塗つたものとも思はれない」といふ、星を指した一言を残し、「者共急げ」と下知のもと、大風の過ぎたやうに出て行つた。

かゝるところへ、目代に訴へに赴いた夏引が歸つて来て、「堯元様お出であるぞ。皆とく出で、お迎へ申すよう」といふ。出来介驚いて、ありし次第を語ると、夏引も動顛し、しきりに出来介の失策を罵るのである。堯元怒れる聲を振立て、「夏引静まるがよい、胡亂の争ひ、われみづから糾明しよう」とて、先づ出来介に事の始終を語らせて後、「察するところその人たちは、信乃が冤をよく知つた俠者であるか、さもなければ信乃と交厚い友人でもあるか、夏引が訴へ申す條も甚だ胡亂である。先づ木工作が亡骸を見せよ」とて、逐一檢分に及んだが、やがて怒りの聲ふりたて、「とくこの曲者等を縛めよ」とて、出来介、夏引の兩人に犇々と繩うたせた。兩人驚き陳ぜむとするを、堯元言はせも果てず、きびしく打ち懲して訊問に及んだので、出来介遂に包みがたく、陰謀の顛末を悉く白状した。すなはち兩人を追立てさせて躑躅が丘にかへつた。

信乃をつれ去つた偽堯元は、一たい何人であらう。これは犬山道節忠典である。信乃は其前に呼び出され、冤の由を陳ぜむとし、ふと見あぐれば、これ夢寐にも忘れない盟友であつたので、且つおどろき且つ喜び、策のあるところを推して、多く辯ぜず、そのまゝ引立てられて、こゝに虎口を脱したのである。さて、道節が信乃を伴ひ行つたのは、かの石和の指月院である。更になほ意外なのは、この寺の住職なる老僧こそ別人ならぬ金碗、大入道で、登崎十一郎照文も亦こゝにある。信乃は何事も皆夢かとはかり打驚き、ことのよしをたづねるのであつたが、大と照文と、別々に犬士の行方を尋ねて諸國をめぐつて居たが、大はしばらくこの寺に錫をとどむる中、ゆくりなくも先住の死にあひ、その遺託により、假に寺を預つて居たところ、照文が六七名の夥兵を旅若黨に打扮たして來れるに逢ひ、又犬山・犬川の二犬士もはからずこゝに宿を乞うたので、皆々一先づこゝを根據と定め、代るく諸國を廻つては又こゝに歸り來る事となし、今年は莊助が旅行の順番とて、如月の頃、立ち出でたのである。

此度、道節が信乃を奪つた奇計の由來如何といふに、かの奈四郎・夏引の姦夫姦婦、この寺の晝に人無きを覗ひ、佛前をも憚らぬ逢曳にさゝやきかはした悪計の次第を、聞く人なしと思ひの外、その日念成といふ雜僧の、足の靴を踏み腫して托鉢を休み、日向の縁側に虱とりつゝ、聞くともなしに聞いて、由々しい事に思ひ、天性の強記、一句をも忘れず、そのまゝ、大に告げたので、一伍一什皆その知るところとなり、道節と語り合つて、たくみにはかり了せたのである、信乃聞くより感に堪へなかつた

が、なほ、濱路をも供につれて来た所以いかにいふに、これも念成の漏れ聞いたところで、木工作の娘濱路實は木工作の子でなく、鷲にさらはれて来た捨子であるが、その折七寶を摺箔にして笹龍膽の紋章つけた桂衣を着けてゐたといふ事を聞き、それは應仁二年の秋の頃、御行方分からなくなつた里見義成公の第五の御娘濱路姫に在すことを知つたので、すなはちかうはからつたのである。そこで信乃・道節、その他一同は、臣として改めて濱路姫に拜謁し、それより善後の策につき、種々はかり合つたが、結局、皆々此處に在つて、武田家よりの沙汰を待つこととした、

然るところ、領主武田信昌はあつばれ名君で、この次第を聞くや、鷹狩にかこつけ、甘利堯元以下を随へて親ら指月院に來り、道節等が家臣の名を偽つた罪を責めないのみか、却つて自家の政治行届かず、奈四郎の如き奸吏を出したことを恥ぢ謝し、事無く落着いたのである。こゝに於て、大はもとの如く指月院に留まつて莊助の歸るを待つことにし、信乃・道節は濱路姫を途中まで送りながら莊助がめぐつてゐる筈の武藏・下總・常陸・陸奥・出羽・越後・信濃の七箇國に旅することとし、照文は夥兵七人の中三人を、大のところに殘して、犬士等の集合の便をはかり、その他を隨へ、濱路姫を守護して、安房に歸ることとし、早速部署を定めて、それらの行動に就いた。なほ、かの毒婦夏引と奈四郎の僕堀内とは首を斬られ、出來介は脊を一百杖打たれて國境から外に放逐せられ、奈四郎とその僕堀内とは風を喰つて逐電したが、途中堀内は奈四郎を欺き殺し、その金を奪うて逃げ失せた。

七、越路・信濃路

(一) 小文吾、猛牛と闘ふ

こゝにまた犬田小文吾悌順は、犬坂毛野に逢はうとして鎌倉に赴いたが、毛野はすでにその地に居らない。行方をもとめて伊豆に渡るとて、下田船に乗つたが、いそぐ船路に風荒れて、船は伊豆の大島に漂ひ着いた。こゝで兩三月破船を繕つてからやうやく纜を解いたが、また悪風に吹き流され、三宅島に押し流されたのである。罪無くして見る配所の月も、さびしさを誘はれるのみで、磯山おろしの音はしても、風の便り絶え果て、島に在る事一年に餘つたが、たま／＼暴風を避けて寄つた浪速にゆく船に便を得て、これに便乗し、漸く浪速津に着くことを得た。さて、航海の疲れを有馬の温泉に治し、なほ奈良・堺などに保養して、その年を暮らした。次の年の春より北陸道に遊ぶ事また一年。石濱の厄難解けて鎌倉に赴いてから、四年後の三月下旬、(濱路姫の安房へ歸つた年の翌年)越後の國刈羽郡小千谷の郷に旅したが、その主といふのは鯛聲源八と呼ばれ、小男ながら、角力の上手で、今は止めて名を石龜屋次團太と改め、旅店を渡世にし、ところの若もの等に頭領と立てられて、近郷に聞えた俠客である。次團太は小文吾の立派な體格をほめた／＼へて、好める角力の道をかたるのである

が、小文吾ももとより好む技であつた。さて、小文吾の出發しようとするのを次團太、商賣氣離れて押しとどめ、「當國古志郡に、近く鬪牛の神事があるので、是非それを見物して行かれない」と切に勧めるまゝに、小文吾も急ぐでもない旅であり、さういふ集まる場所で、兄弟等の便を聞くこともあらうかと思つて、その意に任せたのである。

さて頃は文明十四年 壬寅の春四月、春風、雪を吹き溶いて、野邊の草が青み出さうとする頃、いよ／＼その日とはなつたが、當日、次團太は俄に我が里人と川口人との争ひを押鎮めなければならぬ事となり、本意でないが鮫守磯九郎と呼べる相撲の弟子に、代つて小文吾を案内させた。千曲川を渡り、相川といふ山村を経て、鹽谷・木澤兩村の境なる凹んだ廣場に至ると、早くも集うた老若男女、この日を晴と装つて、潮の如くさわぎ立て、紅白の幔幕張り渡した場内には、もう／＼と牛の高聲する。磯九郎は正面の小高いところに華筵を敷いて小文吾を坐らせ、自分のかたはらに従つて、携へ來た酒肴をすゝめ、くはしく事の次第を説き示す。所かはれば品かはる、世にもめづらしい催しではあると、小文吾そゞろに興に入り、熱心に見てゐると、いよ／＼時刻となつて、目ざましい鬪牛の技がはじまつた。

先づ東西より一頭づゝの牛を出し、何村の何兵衛、何村の何右衛門と、飼ひ主の名を呼び上げ、取り組ませる事、角力とすこしも異ならない。又東西の牛力士七八十名控へてゐるが、いづれも屈竟の若ものであり、或は紺染、或は花田の山夾衣に、紅纈纈などの手甲といふいでたちで、それ／＼美を競うてゐる。これは牛を引出したり引入れたり、激しい鬪の中に割つて入つて牛を引分けたり或は暴

れ牛をとどめたりするので、角力ならば行司の役である。なほこの外に牛裁判といふ者があつて、勝負の争ひを裁くといふ四本柱の役もするのである。かくて、鬪牛の取組も數十番に及び、木澤村なる幹之助と蓬村なる蓬三郎、鹽谷村なる辛之助と小栗山村なる判官八など、次第にとり進んで、さて今日の結びと聞えた逃入村の角連次と蟲龜村の須本太、きこえる一双の猛牛で、角連次は四尺六寸の黒牛、須本太は丈四尺七八寸に餘り、その母牛が龍の精を受けて孕んだと傳へられ、全身の斑毛龍の鱗の如く、眼は赤銅の鈴、蹄は鋼鐵の磐、角は烏犀を欺き、形は象駝に敵すべく見える、人々皆聲を呑み、腕を固めてうちまもるのであるが、小文吾またこれは觀物だと息を凝らす。引き出された兩牛は、互に敵手をきつと見て、しばし呼吸を揃るやうで、頭を低め脊を立て、半時ばかり睨み合つた。やがて機合するや等しく飛びかゝつた。角と角とを搦み合つては、互に猛き呻きと共に、大地を蹴立て、押し合ひ突き合つた。血走る眼は炎の如く、全身熱汗に濡れて、湯を浴びたやうである。

さて、組合はしては振りほどき、振りほどいては又組合はす四つの角の相撃つ音高くして拍子をたがへない、三反ばかり押されては又黒旋風をなしてどつと押返すのである。力士等も亦縦横にはせちがひ、手をあげ、手をひらいて、各々氣勢を資くるほどに、角連次はやゝ疲れて既に危く見えたので、力士等走りかゝつて引き分けようとする。角連次、その隙に逃れむとするのを、須本太脱さないと追駆け、力士等押へようとする、益々たけりたつて、當るもの皆角を突きかけて投げ飛ばし、人垣を破つて驀地に走り出た。老弱男女あれよあれよと逃げ惑ひ、出茶屋酒店は床几葎簀を踏み潰され、場

の内外大海嘯のやうに騒ぎ立つのである。小文吾すこしも驚かず、岡の下の小松の傍に立つて、群衆に押し隔てられた磯九郎を待つてゐると、暴れに暴れた須本太、小文吾の方を目がけて突き進んで来る。小文吾、ひらりと身をかはし、左右の手で角をしつかと捕へて止めるのである。須本太、四つの蹄が土に食ひ入るまで、満身の力を出して押せば、小文吾满面朱をそぐ、えいやつと抑へる。兩者の力平衡して、大磐石の地を抽けるが如く、かの烏獲が奔牛の尾を引き止めたのもかくやと思はれるまで、まことに立派な見物である。

人々驚き惘れ、片唾を呑んで打ち成つてゐるが、小文吾暫らく牛を疲らして後、えいと一聲叫ぶと共に腕を捻つて、やつと抛てば、さすがの猛牛、すてんどうと地響うつて倒れた。見るものあつと揚ぐる感嘆の聲、しばしは鳴りもやまなかつた。その時、牛力士等走り寄り、力を黻せて四足を捉へ口笛鳴らして引き起した。牛は身ふるひしつゝ立上つたが、小文吾を見て恐れをなしたのか、二足三足あとじさりして、牽かれるまゝにおめくゝと立ち去つた。さるほどに牛力士・牛裁判・牛の主等小文吾の前に進み出で、言葉を極めて謝禮を申述べた後、「どういふ御仁でせうか、おなのり下さい」といふ。小文吾の答へを待たないで、さし出た磯九郎が、「おれがお客」と誇りがほに吹聴するのをかしい。

牛の主須本太郎は「幾千人の老弱男女が幸ひに怪我もせず、無事にをさまつたのは、全くあなたの力です。その歡びを申し度く、今宵のお宿をいたし度い」と申出で、辭さうとする小文吾を、強ひてその家に招じ、物乏しい田舎ながら、心をつくす馳走の數々、下にも置かずもてなした末、縮麻織五

六反と永樂錢十貫文とを、謝禮のしるしに出したが、小文吾、「その儀無用」と、たつて辭退したので、磯九郎、「これはあまりの無慾といふもの、この珍重のおくりものを貰はないで歸る事がありませうか、これはわたくしにお任せ下さい。今より小千谷へもつて還つて哥々に見せて羨ませよう」と、すつかり酒に酔つてしまつて、手をふり足をふつてわめきながら、布と錢とをしよつて、ひとり先づ立ち出でたのは、既に日の暮れた後である。

小文吾はなほ主のもてなしに杯を重ねたが、酔ひどれの財物を持つて夜行くのは、途中盜難甚だ心もとなしと、「もし過ちがあつたら。次團太にも申譯無い」と、主の留めるのをふり切つて、磯九郎のあとを追つて立出でた。生酔のもつた卑劣の本性、磯九郎、背負つた財物にいゝ氣持になつて正眞の十貫文の中で駄賃が幾文など、胸算用しながら、ひたすら道を急いで、二里ばかり來ると酔は覺めた。路傍に荷を下し、月を見上げつゝ汗を拭つてゐると、忽ち人の叫ぶ聲がして、「助けて下さい。助けて」と呼びかけた。磯九郎駭いてあたりを見廻したが、人影もない。狐狸などのたぶらかすのだらうとかいふと、又頻りに呼ぶ聲がする。よく尋ねると、聲は正しく殘雪の白い彼方の樹の下より起るのであつた。雪窖の中に人が居るのかと、窺ひよつたところが、「過つて落ちて、のぼれないで困つてゐます、助けて下さい」と悲しさうに請ふのはまさしく女の聲である。磯九郎ありあふ枴とりあげて窖にさし入れ、「これにすがつてあがつて來なさい」といへば、「ありがたいこと」と、その枴を中より急に引いたので、磯九郎はたちまちもんどり打つて窖に落ちた。中なる女は匕首を閃かして、磯九郎に斬

つてかかる。

磯九郎、だまされたかと思ひつゝ、屈しないで争ふところへ來合せた人があつて、突込む手練の竹槍に、磯九郎は脇腹をぐさと貫かれた。中の女隙さずとぐめの一太刀刺し、血にぬめる竹槍握んでをどり上る。「うまいく。」「しかし骨を折らされた」と二人の賊はほゝゑみ合ひながら、かの錢と布とを擔いで立去らうとする時、遙かに小提灯きらめき、ゆくての方より來るのは石龜屋次團太で、けふの鬪牛に、須本太牛大暴に暴れて見物に怪我多かつたと聞いて、小文吾の上心もとなく、夜みちを迎ひに來たのである。二人の賊の影を認めるとひとしく、「曲者ツ」と呼びとめる、かの曲者忽ち手練のあて身をくはせ、次團太あつと倒れたので、賊夫婦は仕合せよしと、再び笑ひ合ひながら、月かげのおぼろの中に消え去つた。この賊婦は、赤岩の毒婦船蟲である。さきに船蟲は信濃の沓掛の里で籠山逸東太縁連をだまして、かの木天蓼の短刀と三十金とをぬすみとり、片破月の雲間に隠れた間にと逐電し、この越路までもさまよつて來て、金倉山の麓路にかゝつた時、おひはぎにあつて金を奪はれようとし、かの木天蓼の短刀をひらめかして戦つたが、力及ばず、遂にのこらず奪はれた。かの賊、船蟲の女に似氣ない不敵さに感じ、同惡相求めて夫婦となり、この邊の山賊の頭と仰がるゝに至つたのである。而して、その夫なるは童子格子酒顛童子と喚びなした一所不住の兇賊であるが、小千谷と塚の山の間なる廢寺を假の宿と定め、遠近に出没して人々を苦しめたが、今宵磯九郎が錢をしよつて來るのを素早くも嗅ぎつけ、かく計つたのである。

小文吾は獨り須本太郎が家を出でて、磯九郎が後を追つて來たが、路に一人の倒れた者のあるのを月の光に次團太と認めて、一方ならず驚き呼び活かして、事の次第を尋ね、近き雪窖の中に横つてゐる磯九郎が死骸をもとめ得た。折から、夜道を僕らひきつれ小文吾の後よりいきせき來る須本太郎も來り會し、皆この思ひがけない不幸に心を傷め、磯九郎が死骸を擔うて蟲龜村に歸つた。

(二) 莊助と船蟲と

小文吾はじめ賊の何者であるか知るよしも無いので、それ〴〵土地の法に随つて届出を濟まし、磯九郎をあつく葬つたが、小文吾はこれ等の事にかゝりあつて、思はずも次團太方に日をかさねる中、眼中俄かに痛みを覺えたが、だんく甚だしくなり、果ては物を見ること全く叶はなくなつた。これは、さき頃風波に漂はされて大島・三宅島に長く滞在した折、潮風に晒され、熟れぬ魚肉を食つた祟でもあらうか。次團太は心をいたむること夥だしく、醫師よ薬よと費用をいとはず治療に力を盡したので、五月に入つて痛みは全く去つたが、暫く眼を開いて物を見ようとする、再び舊に反るので、盲目同様に引籠つて日をくらしした。眼の病は肩の凝より起るといふので、按摩がよからうと、或夜、笛吹き行く警女を呼び入れ、肩の凝を揉ませたところ、指さき骨にこたへて、疼痛次第に堪へ難くなつたので、「もう少しくゆるくしてくれ」と聲かけたが、同時に胸あやしく騒いで、吭を〴〵と告げる聲が、どこともなく聞えた。小文吾深く疑ひ惑ひ、「しばらく按摩を止めよ」といふと女は俄かに小文吾が襟

引摺みて、吭を搔かうと抜きひらめかした刃の光に、痛める眼も覺えず開いて、透かさず利腕を抑へ、肩越にどうと投げ出す物音に、駭いて走せ來つた次團太、早速に繩とつて、起しもやらずひつくつた、そしてよく見ると、四十ばかりの女で、瞽女とはにせで、兩眼さまざまく血を噴いた。走り來つた人々「何者だ」とさわぐのである。小文吾もわれを附け狙ふ曲者、誰だらうと考へてゐるうちに、その聲が、かの船蟲によく似てゐたので、次團太に語ると、次團太答きびしく拷問し、苦痛に堪へかねて女の自白するのをきけば「仰せの通り私は船蟲です。夫のかたき籠山逸東太と云ふものを附け狙ふうち、こゝなる客人のあまりに彼の仇に似たので、誤つての狼藉、許して下さい」と、飽迄白々しいのであつた。これはかの鬪牛の目小文吾を人ごみの中に見たので、前夫並四郎が爲に讐を報いようと思ひ立ち、小文吾が石龜屋に宿つて居ること、眼病で物を視る事叶はないこと、すべて皆探り得たので、偽瞽女にいでたち、木天蓼丸の短刀を用ゐて、小文吾をだまし撃たうとしたのである。

小文吾聞いて、「憎く、賊婦め、官府に引渡して重く罰せしめよう」といふのを、次團太とよめて、この邊は、三島郡片貝の別館に居らるゝ領主の御母君、箆の大刀自の裁斷に女に依怙の沙汰が多いので、民皆訴へ出づるを厭ひて、大抵の罪人をば神慮任せといふ私刑に行ふのである。それは町はづれなる庚申堂の梁に縛め吊して、三夜の間、これを打ちたゞき、責め問ひ、かくても死なねば、その者を放ちやり、死なば千曲川に水葬するのである。この賊婦も、またこの例に依るべきであらうと、次團太は相撲の弟子なる泥海土丈二・百捌三の二人にいひつけて、庚申堂へ女を引き行かせた。「先日

の夜に磯九郎を害したのも、かの賊婦の同類のいわざかも知れない、その持つた短刀の血のくもりから推して穿鑿したら、磯九郎が仇を見出すことも出來よう」などと、次團太の語るを聞くにつけても、小文吾は眼の見えぬが口惜しく、歎かるゝのであつたが、ふとかの靈玉の不思議を思ひ出し、「先年石濱の城内に馬加大記が毒をもてはかつた時、命を全くしたのも、かの玉の効であつたのを今迄すつかり忘れてゐた」とてかの靈玉を取出し、眼險を撫で試みると、眼の内の邪熱忽ち退いて、視力全く恢復した。小文吾大に喜び、明日ははやくかの廢寺に至り、かの女が果して船蟲であるかどうかを見定めて來ようと思ひつゝ、その夜は寢に就いた。

こゝにまた犬川莊助義任は、去年の二月ひとり指月院を立出で、下總に到り、行徳の里を訪つて、文五兵衛は妙眞と共に安房に行つたが、小文吾がまだ歸らないと聞き、すゞろに胸安からず、それより常陸に赴き、秋の頃より陸奥の方に廻り、五十四郡を經めぐつたが、遂に尋ねる人に逢はない。今年春、道を變へて越路へと志し、神かくしに逢つて行方知れなくなつた大入の犬江親兵衛を尋ねて、あまねく深山幽谷を歩き廻り、越後魚沼郡のある山中で日がくれてしまつた。五月雨の空珍らしく霽れ渡つて銀盤のやうな月影があざやかに山上にのぼつた。月光にすかして見ると、行手の小山の下に古びた堂が立つてゐる。莊助そこへ迎り着いて、一夜を明かさうと破れた縁に腰を下し、熟視すると、柱傾き檐朽ちて、蜘蛛の巢に掩はれた扁額に「庚申堂」の三字がおぼろに讀まれる。さし入る月影に見ると、高座は壞れ落ち、御神體はましまさない。床には草生ひて、狐兎などの足あとを残した。

ふと聞くと、その樓上に人の呻く聲がする。

莊助いぶかつて、桁の落ちた階子に僅かに足場を求めてのぼつて見ると、面貌も醜からぬ、年の頃四十ばかりの女、きびしく縛められて梁に吊られてあるではないか。莊助、「こは妖怪變化の吾を誑かすのであらう、ばからしい」と冷笑ふのをきき、女はよゝと打泣き、「どうして妖怪などでありませう、わたしはこゝより程遠からぬ小千谷の郷なる旅店の女中でございます、主人の言ひ寄るのを肯かないからといつてこんな目にあはせたのです。どうぞこの苦しみの中からお救ひ下さいまし。御恩はいつまでも忘れません」と哀訴するのである。莊助はこれを年來小文吾に仇なす賊婦船蟲と知る由無いので、解き降して縄切り放ち、なほ請はるゝまゝに、かの荒寺なる酒顛二が巢窟まで送りとゞけた。船蟲は、この家の主人は我兄で乾兒數多ある獵人であると莊助に偽り告げ、自分先づ一人内に入つて酒顛二に事のしさいを話し、莊助を案内する。莊助、この家の様子合點行かぬところ多いので、一切酒食の饗應を辭して臥床に入り、眠らずに耳を澄ますと、かの靈玉の奇特であらう、賊夫婦が囁く聲、手にとる如く聞えるのである。船蟲は鬪牛の折、小文吾が姿を認め、もとの夫並四郎の仇を討たうとて按摩に化けて刺さうとしたが、却つてとり押へられ、庚申堂に吊られた次第を話すのを、酒顛二聞いて、今宵石龜屋を襲うて、小文吾・次團太をはじめ一家を塵殺にしようといきまき、なほ、事の漏るゝを防がむ爲め、今宵宿れる武士を片づけようかと相談するのである。莊助、先づ小文吾の所在を知り得たのを喜び、手早く身支度して、承塵にかけた、手頃の槍を選びとり、門のあたりの竹藪の蔭に身を潜

めた。酒顛二、莊助を討取らうとして来て見れば、臥床はいつか藻脱の殻である。不安を感じたが、早く石龜屋に討入らうと、十六七人の手下を従へて繰り出した。留守には船蟲を残し、「先刻の武士が歸つて來たら撃ち殺せ」とて、心利いた手下一人に鳥銃を授けて、船蟲に添へた、この手下は別人でなく、かの泡雪奈四郎悪の僕媼内が、めぐりめぐつてこの國に來り、この山賊の群に入つたのである。

さて酒顛二の一隊は、いづれも癡猛な面魂で、短槍雞刀など手に手にとつた異様のいでたち、百鬼夜行を見るやうである。折から月が雲に隠れて、おぼろの闇となつたので、うしろに従ひ共に走る一人の武士が、かの莊助とは氣附かうよしもなかつた。さて、一隊は小千谷の郷の次團太方に押寄せ、門の戸を破れるばかりに打ちたゞき、「次團太疾く起き出でよ。犬田小文吾に恨みがあつて復讐の爲めに來たものだ」と呼ばはる。次團太、「や、宵の僞替女の同類だな、眼病の犬田どの、どうして敵と刃を交へることが出來よう。お落しするより外ない」と小文吾が臥床に駈けゆく。此間に賊の一人は掛矢で門の戸を破つて亂入しようとする。その時思ひがけなく、背後から一筋の槍が閃めいて、大喝一聲、その賊を突伏せ、雷の如く呼ばはつた。「犬田も主人も驚くことはない、犬川莊助がこゝに居る。前面の賊は引き受けた、背戸の方用心」とおどろき騒ぐ小賊をまた二三人突き倒す。酒顛二仰天、思はずたじろいだが、彼また名うての兇賊だ。猛り立つて突きかゝる鋭い槍先を莊助二三合あしらうてゐるところへ、靈玉の不思議で眼病平癒した小文吾、次團太もろとも抜き連れて斬りかゝる。莊助愈々勢を得て、遂に酒顛二を突き伏せ、なほ三人で當るに任せて斬り立てたから、賊は殆んど殺し盡され、

危い命をたすかつて、彼の巢窟に逃げ歸つたのは、やつと一二名に過ぎなかつた。

かくて莊助は小文吾と絶えて久しいめぐりあひを喜び、賊の巢窟で聞いたことから、こゝに至つた次第を物語り、「船蟲も助けおくべきでない」と小文吾・次團太・鯉三等と共に急ぎかの荒寺に行つて見ると炎々と立ちのぼる焔、逆巻きのぼる黒煙にまぎれて、船蟲は媼内と共に風をくらつて逐電し、唯逃げ歸つて急を船蟲に告げた瀬六・穴八と云へる二人の小賊が慾に目がくれて、重いもの背負うてまご／＼してゐたのをとらへて、責め問ふと、酒顛二・船蟲が來歴、磯九郎を殺したのも彼等兩人である事、また船蟲と共に逃げた媼内が索性まで漏れなく知ることが出來た。すなはち次團太より事の由を官府に訴へ、生擒にせる二人の小賊をも有司に引き渡したが、こゝに不思議なのは、この兩人の小賊、年なほ若くして容貌不思議にも小文吾と莊助とに生きうつしだといふ一事であつた、陽虎が孔子に似たといふのも、誠にこのたぐひであらう。

(三) 小文吾・莊助の奇禍

莊助・小文吾の二犬士は、久し振りの對面で、つもる物語に長い夏の日も短いばかりであつたが、その日の下、哺に、片貝の別館から、執事の老臣稻戸津衛由光が使者として、萩野井三郎といふ武士、十人餘の従者を引連れ、二挺の轎子を昇かして、二犬士を迎へに來たのである。二犬士はしきりに辭退したが、由光は「般の大刀自の内命で二犬士饗應の儀を承はり參つたもの、おいで無くば我等の落度

となりませう」といつて、強ひて請うてやまなかつたので、是非なく轎に乗つて稻戸の邸に至つた。由光燭を乗つて自ら出で迎へ、下にも置かないもてなしぶりである。いたく二犬士が功を褒め、武勇をたゞへ、内命の由を述べて盃をすゝめたが、宴半ばにして、とりあげた杯をはたと抛つと、これを合圖に物蔭に伏せた力士二三十人、亂れかゝつて二犬士を抑へ、十重二十重に纏うつた。二犬士且つ驚き且つ怒り、事の次第を語り問ふのである。由光嘆息して恭しく容を改め、「これは某が本意ではない。しばらく怒をさめ詳細の事を聞いて下され」とて、諄々と説き出づる一條、その要を摘めば、般の大刀自に二人の息女があつて、一人は武藏國大塚の大石左衛門尉憲儀の内室となり、他の一人は同國石濱の千葉介自胤の内室となつてゐる。故をもて大塚に於ける莊助が消息、石濱に於ける小文吾が行動、皆わるくのみ傳へられて、大刀自の耳に入つて居つたところ、この度はしなくも二犬士の名が聞えたので大刀自、搦め捕つて石濱と大塚とに送り、二人の女婿の威信を成さうとした。由光言葉をつくして諫めたが、嚴命によつて不本意乍かく計らつたのであると額に汗して述べる言葉に、その苦衷、思ひやられるのである。二犬士怒解けて、何事も天命であると覺悟して、「是非も無い次第、首を討つて下さい。」と云ふいさぎよい覺悟に、由光ます／＼嗟嘆して、忍び難い色を浮べながら、萩野井三郎以下腹心の者二三人で、兩士を一室に護らせた。

かくて、兩士を囚へた旨を大刀自に告げると、大刀自は斜めならず喜んで、「武藏に送る途中、同類どもに奪ひ去られる恐れがあるから、首にして送らう」といふ。「しかし、五月は罪人を處刑せぬしき

たりだから、次の月まで待たせてはいかゞでせう」といふ由光の言により、二犬士は暫く禁獄せらるる事となつた。然るにどうしたのかこの時より二犬士共に聲が嘎れて物言ふことが出来なくなつた。さて、六月となれば、關東なる女婿達より、暑中見舞の使者あり、大石家よりは、かの神宮河で力二郎・尺八兄弟に討たれた陣代丁田町之進が弟畔五郎豊實、千葉家よりは、馬加大記が妻の甥にて、大記殺さるゝや召出されてその名跡を繼いだ蠅六郎郷武と申すもの參つた。兩使歸國の土産としてかの二犬士が首を送らうとて、大刀自は由光にその首を討たせた。畔五郎は莊助を、蠅六郎は小文吾を、共に見覚えがあるので、その首共に相違無きを見、なほ、莊助が帶びた兩刀は、粟飯原胤胤が横死と共に行方知れずになつた小笹・落葉の兩刀で、小文吾が帶びたのは、莊助死刑の場で討たれたかの陣代兼上社平が太刀なるを見、それをも共に請ひ受けて歸る。あゝ、靈玉も今は靈無く、二犬士は遂に非業の双に斃れたのか。ふたつの首は二人の使に護られて東に送られた。

然るにその夜稻戸津衛由光は、ひとり家廟にこもつて更けるまで看經に専念してゐたが、やがて家内の者皆寢鎮まるや、ひそかに佛間の板席を刎ね開けてほとくと打たくと、その下には土窖があつて、その階子をのぼつて来るものがある。それは犬川莊助義任と犬田小文吾悌順である。首となつて東に送られた筈の二犬士がどうしてこゝに在つたのであるか、これは、津衛由光が苦心のはかりごとであつた。由光いかにもして兩士をたすけようと心を碎く折柄、兩士によつて捕はれ、官府にひき出されたかの小賊淵六・穴八の面影、不思議に兩士に似たのを見て、屈竟の身代りと、藥で聲を嘎らし、物言ふことを得ざらしめて牢につなぎ、二犬士には事情を告げて、わが家の土窖にかくまひ置き、さて、身代りの二賊を首になし、小文吾・莊助と稱して、關東の使者にもたせてやつたのである。

由光しかくと二士に語り、偽首で欺きおほせたのであるが、かの太刀の、千葉家秘藏のものであつたのはどうかと問ふと莊助は「かの太刀は、犬川家傳家の寶刀で、我父則任の死と共に、失せたものであるが、犬田氏が他から買ひ取つて所持してゐたのを譲り受けたのである。失せて居つた間に粟飯原胤胤の手に入り、千葉家に獻ぜられてその寶となつたのであらう」と、具さにその由來を説き、再び失つた事を惜しんだが、また歸つて来る時もあらうとあきらめた。なほ、語り合ふ中に、莊助の父衛二則任は、由光の兄事した舊い識合であることも知れ、更に感慨を新にしたのであるが、夏の夜は短かく、はや曉を告げる鶏の聲がするので、さらばとて、二犬士は別れを告げ、城門の鑑札を渡されて片貝を立出でたが、かの刀を奪はれたのは無念である。遠くは行くまい。一行に追ひついて奪ひ返さうと道を急いだ。

(四) 毛野、二犬士と逢ふ

信濃なる岐蘇の高峯に雲湧いて、秋のすゞ風のわたる諏訪湖のほとりに、世をわびてすむ二人の乞食があつた。路傍の堤に小屋を連ね、筵屏風を圍ひにして一人は齡四十ばかり、足なえて鎌倉塞兒と呼ばれたが、一人は十七八の少年で貌醜からず、相模小僧と呼ばれた。土用なかばの日ざかりに寝く

たびれた鎌倉みざりは、壁越しに聲高く、「どうだい、となりの相模小僧。午になつたがもの欲しくはないか、今日は残念だが、みいり少なく、朝からやつと七八文、里に出た折、餅など買つて来て呉れまいか。」と頼めば、相模小僧、「よしきた。御同様に腹は北山、南の町にひとはしりしようか」と走り行く。あとに残つた鎌倉みざりは、もう一ねむりと肘枕すると、通りかゝつた行列は、かの大石・千葉兩家の使、丁田畔五郎豊實・馬加蠅六郎郷武等であつた。この豊實と郷武とは心ねぢけ、功を貪る小人なので、片貝館やかたより荻野井三郎を副使として添へ上さるゝをよろこばない、遂に道中で三郎を出しぬき、逸早く歸つて主君の恩賞を獨占しようと思ひ、今この湖畔にさしかゝつたのである。湖水のほとりの茶店に憩ひ、しばらく暑さを凌いでゐたが、郷武この時かの兩刀を取出し、豊實に向つて、「この小篠・落葉の太刀は、人を斬れば四邊の木の葉秋ならぬに亂れ落ちると聞いてゐる、虚實をたしかめることはないかな」と云へば、豊實も大に好奇心動き、試し斬りの犠牲になるものはないかなと打案した。

この時、彼等が眼に入つたのは、かの鎌倉みざりである。「足は跛なえたと見えるが、骨逞しく肉肥えてゐるから、ためし斬にはもつて來いだ、彼を引き出せ」とて、若黨をしてその乞食をつれ來させた。鎌倉みざりは肝魂きもたましも身に添はず、わなゝきつゝ、助命を請うたが、情を知らぬしれもの共、あざ笑つて取り合はない。郷武は太刀をふるつて遂に胴中から斬つて落す。しかし落葉の奇瑞を見ない。さてはそら言かと呟つぶやきながら、僕にいひつけて太刀の血に水をそゝがせる時、物蔭から躍り出で先づその

僕のえり髪とつて一丈ばかり投げつけたものがある。誰かと思れば相模小僧である。驚きあきるゝ郷武が、太刀をとつた手をむづと握り、腰に挟んだ手拭ゆんでを左手にとつて兩三度刃を拭ひ、つくゞと見成つてゐたが、「これは父が撃たれた折、紛失したといふ落葉の太刀であらう。これを持つた奴は、正しく仇の餘類だ、馬加と名のつてゐるのを見ても。さあ、兩刀と共に首を渡せ」と聲高くいきまき叫ぶ。少年に似合しからぬ膽勇のふるまひは、名乗らないでも明かな八犬士の一人、犬阪毛野胤智たねともが浮世を忍ぶ假乞食と、はじめて知る郷武・豊實、思はずきよつとしたが、多勢を恃んで、「何んだ物々しいぞ小童こわら」と抜き連れて斬つてかゝる。毛野は、飛ぶやうに刃の下をかいくゞり、手早く郷武が太刀をもぎとり、唯一刀にその首を切り落し、二の太刀には一人の若黨を切り伏せ、返す刀で更に一人を斃し、疊みかけて豊實が小鬘こむんに斬りつけた。豊實敵はぬと、命からゝ逃げ去つたのである。

この時、兩使が後を追つて來れる二犬士の中、小文吾が草鞋の緒おを結ぶ間に、逸早くもこゝに走り寄れる莊助、打ち見やれば、乞食のやうな少年血刀ちかたひつさげて佇立んでゐるのに、あの方あの方に寄つて覗ふと、手にしたのは正しく求むるところの我が太刀である。必定曲者に相違無しと躍り出で、抜き合せ、互の手練優らず劣らず、時移るまで切り結んだ。その時、後れ馳せに走り來つた小文吾、この體ていに先づ驚きつゝ、對手を誰かを見ると、正しくこれ、片時忘れぬ犬阪毛野である。「お待ちなされ、犬川氏。犬阪氏も刃を止めよ。この小文吾なるを忘れられたか」と、しきりに叫んで禁むれども、一上トヤウ一下必死の太刀打、耳に入れようともしない。小文吾、茶店のわきの長い石の榜示はりかたをば大力に任せ

て抜き取り、切り結ぶ刃の上に投げかけ、おしを打たしてやうやくその戦をとどめた。三士こゝにゆくり無く出會つて互に胸襟を披き、小文吾と毛野との歡び限りなきは勿論、莊助・毛野また一見舊知のおもひを爲した。小文吾は毛野をも同因果の士ではないかと久しく思つてゐたが、毛野はその肘なる痣を示すと共に、智字の靈玉をもつてゐることを語り、奇異のおもひをなして、測らざる喜びに浸つた。

かくて毛野は刀を最初の主なる莊助に渡し、三人打ちつれて甲斐の方に走り、その夜は青柳の驛に宿取り、燈下に坐して一別以來の物語をした。毛野は小文吾と別れてより、叔父に當る相模犬阪のほとりなる願成院の住持に身を寄する事三年。それより讐敵縁連の行方を尋ねて諸國をめぐり、諏訪の山里に籠山といふ村ありと聞き、或は逸東太が縁故の地でもあらうかと此地に來つたので、非人に打拵つたのは石濱の討手を逃るゝ手段であると語り、小文吾・莊助が交々靈玉の由來を語りてとり出し示すので、毛野また襟に縫ひ込んだ智の字の玉を取り出して、その感得の由來を語るのであつた。毛野は三年の間母の胎内にあり、母は粟飯原家斷絶により、相模犬阪に潜んで居たが、流星の如き光を放つものがあつて、忽然南方より閃ききたり、その懐に入つたのを探つて見れば、この玉であつて、その夜初更に産の氣付き、生れたのはこの毛野であつた。その名を胤智といふも、この靈玉の文字を取つたのである。なほ諸犬士の噂も出で、歡談に夜を更かしたが、毛野は「讐敵を討ち得ぬうちには、犬士の群に入ることが出來ない」といふのを、兩人は強ひて勸めて、「鬼も角も石和まで同道しよう」と、

てその夜は枕を並べて臥した。しかるに、翌朝起き出で、見ると、毛野がゐない、悪痕淋漓として障子に書きつけた兩行の句と一首の歌を見れば、

凝成白露玉未全。

環會流離儘自然。

めぐりあふ甲斐ありとても信濃路に

なほわかれゆく山川の水

とある。讐敵縁連を討つてから、犬士の群に入らうといふ下心と見える。兩犬士、その志を諒とし、時の未だ到らないのを嘆きつゝも敢て追はないで石和を指して赴いた。時は文明二年の夏末である。

八、鈴森の復讐戦

(一) 囚はれた二犬士

文明二年秋九月、蕭々たる雨の中を武藏なる千住の郷近い穗北の暇路にさしかゝつた二人の旅人がある。一人は犬飼現八信道、一人は犬村大角禮儀である。庚申山の妖猫を退治して下野を立去つた犬村・犬飼の二犬士は、他の諸犬士にめぐり逢はうとして、相模・伊豆・駿河・遠江・尾張・伊勢・美

濃・近江等に二年餘を費し、雛衣の三回忌には、一度赤岩に立ち歸つて法事をつとめ、それより小文吾が舊地行徳に行かうとして、こゝに來たのである。午後になつて、日が照るかと思ふと、村雨の空さだめなく、ひたすら道を急ぐ折柄、現入は石に躓いて足を痛め、恩はず二町ばかり後れた。それとも知らない大角はなほ只管に走る程に、脊に負うた荷物の結び目解けて、地上に落ちたのを、七八間行つてはじめて心づき、振り返つて見ると、早くもそれを引攪つて、河原の方に一目散に逃げて行く者がある。大角、飛鳥の如く追ひかける。逃ぐるを追うて走り繼る時、大なる衣葛籠きぬつらを卸して堤に立つてゐた同類なる一人の曲者、これと力を併せて撃つてかゝる。大角忽ちこれを投げ伏せ、刀の柄つかに手をかけておどしたところ、二賊は身を翻して水中に飛び入つた。大角が荷物は奪ひ去られて、かの衣葛籠きぬつらのみ残つてゐるのである。察するにかの賊ども、この近くで盗んだものと覺える。盗まれた主に歸してやりたいと、追ひついて來た現入と語らふ折柄、走り來つた百姓十人ばかり、手に／＼棒、鍬などをもつて、「賊はこゝにゐた。にがすな。」とだみ聲高くわめきながら、二犬士を犇々とおつとり巻くのである。

二人は聲ふり立て、叱り退けながら事の仔細を話してきかせたが、唯がや／＼と罵り騒いでゐて容易に信ずる様子も無い。「面倒だ、無益の殺生ながら切つて捨てよう」と刀の柄つかに手をかけると、百姓ら心怯れて、暫く何事をかひそ／＼と話し合つてゐるさまであつたが、その中兩人は先づ穂北の方に走り去り、残る者の中より一兩名進み出で、小腰を屈めて詫びて云ふやう、「わたくしどもは穂北の郷

士氷垣ひがき殘三夏行なつゆきと申すものゝ家來でございますが、今日、親方の家に賊が入つてこれなる葛籠を盗んで行きました。今この葛籠の手に入る以上、何の仔細も無いわけではあります、盗賊を捕へないで葛籠のみもち歸つたら、親方はわたくしどもを疑ふにちがひありません。御迷惑恐れ入りますが、わたくしどもと御同道、ことの由、親方に合點まるるやうに陳べて下され」と乞ふ言葉に道理があるので、二犬士は百姓等に隨つて氷垣が邸に案内された。衡門かぶきもん高く立ちて、白壁の色夕日に照り映え、穀倉の穀もみちあふれて、諸事ゆたかな構へである。

二犬士、導かるゝまゝに、土藏の横手の小徑を側の小門から入つて書院の方に進んで行くと、思ひ掛けなく、足下の土ぐさとめいつて、あなやと叫ぶ間もなく、二人は共に坎穿おとしあなに落ちた。従ひ來れる百姓ども、折重なつて犇々と繩うつた。二犬士、切齒はやしりしても、及ばない。百姓ども、手を拍つて囃しながら、二人を引立て、主人が前に出した。縁先に立ち出でた主人氷垣ひがき殘三夏行は、白髪あから顔で眼鏡く光り眉太く、筋骨たくましい老丈夫である。身には段々染の仁田山紬に厚綿いれたのを着、僻組くみの圓帶を腰高に結び、上に煤竹色の道服をまとうたが、二犬士を睨みつけて、「にくい盗賊共、ところもあらうに我が家に忍び入るとは不敵である。斬つて捨てよう」といきまゝ。二犬士は、引据ゑようとする小厮こもわ等を蹴倒して、夏行に向ひ、事の仔細を陳べ、欺き寄せて理不盡に搦かめ捕つた無禮を責めるのである。殘三、あざわらひ、先刻賊を懲らした際、賊の爲めにちぎり取られた大角の襦袢の袖を示して、このもの我が家の枸櫞かたらの生籬いけがきに掛つて居た以上、汝等が盗賊である動かしがたい證據だと

いつて、刀を提げて立ちあがつた。かゝるところへ出て来たのは、夏行が娘重戸で、袖を引きとめて諫めるやう、「人は見かけに依らないと云ひますが、この旅人たちの人柄、盗みする者とは思はれませぬ。たゞ襦袢の袖のみが證據として生命を絶たば、後に悔ゆることが無いとは言へますまい。殊に今日は亡き母上が忌日、翌日まで成敗をお延ばし下さいませ」といふので、夏行も、その理を盡した言葉に動かされ、一先づ刀を鞘にをさめ、二人を益樹室えきじむに閉ぢこめおけと命じて奥に入った。

そもこの氷垣夏行と云ふのは、近郷に鳴り響いた物持の郷士で、武勇の聞え高く、心ざまあらあらしいが、情ありあはれみ深く、百姓の信服を得たのである。妻は既に世を去りて、娘重戸に落鮎餘之七有種を婿としてからはや三年を経た。今日、土藏を修繕するといつて、戸を開けて置いたのに乗つて、晝泥棒が盗み去つたのは、尋常の衣葛籠ではなく、鑲帷子くすりかたびら、籠手こて、脛當など秘藏の武器を納めたものである。世はみだれたが、この地方のみは自分の統治で、盜賊の影も見せぬを、日ごろ誇りとしてゐたのに、處も處、時も時、我が家に晝中忍び入り、しかも秘藏の武器を盗むとは不敵のかぎり、我が威勢にもかゝはること、思へば一通りならぬ腹立ちである。重戸は父の一旦の怒りに、冤人を殺さうとするのを見て、心を痛めること一方ならず、その夜ひそかに、益樹室のほとりに至り、番人を遠ざけて室の戸を開け、二人の縛めの繩を解き捨て、腰の物と荷物とを渡し「早く／＼こゝをお逃げなされ」と云ふ、二人は、その女に似もやらぬ人を見るの明あるに感じ入り、深く恩を謝して立ち去つたが、二人はどうにかして、まことの盜賊をとらへ、殘三がまどひを釋きたいものと思ひ、

この夜は千住に宿りを求めようとして、川邊に來たが、夜は渡さぬのか、一艘の船も見えない。堤にのぼつて見渡すと、一町ばかりの川上に、苦葺いた船が岸近くとどまつてゐる。走り寄つて呼び掛けたが、空船と見えて答へるものも無い。

現八、いらだちて先づ船中に飛び入つたところ、忽ち現れ出で、組附くふたりの曲者がある。三人しばらく船中にたゝかつたが、折から雲を破る月かげに、互にきつと面を見合せ、「犬飼現八ではないか。」「さういふ二人は犬塚・犬山。」と、三人等しくおどろき叫んだのである。圖らざるこの不思議の出會ひに、三人は歡極つてしばらくは言葉も出なかつたが、やがて、現八は大角を兩兄弟に紹介し、別後の物語、初對面の挨拶、河波は明月を浮べて、歡語の聲と共に鳴りひびくのである。

犬塚信乃・犬山道節の二犬士は、このほとりまで濱路姫を送つて先づ武藏をめくり、船で千住に渡らうとしたところ、この船は賊船で、船頭なる二人の賊が二人をはからうとしたのを取押へ、搦め取つて船底に籠め置いたと物語る。そこで、引出して見ると、果して大角が見覚えある彼の二賊で、奪はれた荷物もそのまゝにあつて、大角が賊にもぎ取られた片袖も、賊が氷垣方の柵橋からなちに取られた片袖も同じものと分つた。大角・現八は、更によるこびを成し、これより四犬士打揃うて二賊を引立て、穗北を指して行かうとする折から、人音俄かに騒がしく、氷垣殘三夏行・落鮎餘之七有種の武勇に誇る勇婿が、村の若者ども三十人ばかり引具し、二犬士を追うて來れるに出逢つた。殘三は短氣の老人である。二犬士の辯じよとするのを耳にもかけず、「おのれ、盜賊ども」と叫んで、餘之七と共に斬